闇夜の真昼

暁さくや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
闇夜の真昼

【Ｎコード】
Ｎ５６６７Ｆ

【作者名】
暁さくや

【あらすじ】
舞台は幕末の横浜。骨董屋のお嬢様、お亮はある日、見知らぬ侍から妙な荷物を預かった。ところが、その侍が何者かに殺されてしまう……不思議な力を持つ兄・悠乃介と共にお亮は事件の解決に乗り出したのだが……幕末の騒乱の中で仕組まれた恐ろしい罠に、お亮も巻き込まれてゆくことになる。

序章・妖異の濫觴（らんしょう）

風が鳴った。

潮の香と湿気を含んだ怒涛のような海風が、脇坂重三郎の耳もとで吼える。身体に巻きつくような冷えた空気をともなって、強風が背割り羽織をなびかせていた。

望む湾内は瑠璃紺が広がり、力を持て余した波が激しく岸壁に打ち砕かれている。

脇坂重三郎は獣のごとく猛り狂う海を見下ろしながら、目の前に立ちはだかろうとする自然の脅威に怖じ気づきそうになる自分を鼓舞するように咳払いした。

「脇坂、何をしている、参るぞ」

風にあおられながら振り絞るような男の声が脇坂を呼ぶ。ほかに一緒にいた八人の仲間も肯いた。

脇坂重三郎を入れて仲間は全部で十人いる。一人が小脇に抱えなければならない大きさの木箱を持ち、彼を前後で守るようにして男たちが並んでいた。脇坂は列の一番後ろである。

木箱を持つ者を間に挟んで歩き出した一行は、みな、柄袋に刀を差して野袴をはいた武士の旅装束姿であった。

先頭を歩く男が、一同を見渡してから言った。

「待ち合わせ場所であった約束の寺を見つけるのに手間取って、すっかり薄暗くなった。皆、急ぐぞ」

つい先ほど寺の鐘が鳴ったので、いまは暮れ六つ（午後六時）頃である。

「峠を越えますか？」

「いまからでは無理であろうよ」

海沿いの古い街道は松並木になっており、ずっと一本道である。すでに人の気配は薄くなっていた。

「早く宿をとって、今宵は休もう」

先頭を歩く侍の声は同意を求めるのではなく、命令するような口調だった。九人の侍たちはそれに従い、峠とは反対方向に足を急がせた。

脇坂の前は幼馴染の山本という男だった。山本には国元に細君がおり、腹には新しい命が芽吹いている。ともに国元に帰る頃には父親になっているはずである。山本には鼻の右脇に目立つ黒子があって、皆に赤子にも黒子があるのでないかとからかわれていた。部屋住みの上、いまだ独り身の脇坂には、そんなからかいも羨ましい限りである。

「のう脇坂……怪しい雲行きだと思わんか？」

「たしかに」

山本の不安げな言葉を聞いた後すぐ、耳元でまた風が咆えた。空を仰ぎ見ると、まるで一行を追うように妖雲が立ち込めている。

歩きながら、脇坂は何故か気が急いてきた。手が自然と腰に差す刀の柄に触れた。そうしているとどこか安堵している自分がいる。

三度、風が咆えた時のことだった。すぐ前でかすかな呻き声がおこった。風にまぎれ、聞き間違いではないかと思うほどの、ほんとうに短い呻き声であった。

同時に、十人の一行の、ちょうど真ん中を歩いていた者の首が、まるで古枝がもげたかのようにするりと滑り落ちた。小脇に抱えた木箱を大事そうにおし抱き、足は地面に吸い付いて立ったままである。首だけがごろりと地面に落ちて鈍い音をたてた。

「うわあっ、鹿嶋ぁっ！」

悲鳴のような叫び声があがった。

一瞬ののち、猛烈な血飛沫がとり残された鹿嶋の胴体から吹き出して、一行を襲った。

脇坂はまるで小雨のような返り血を浴びながら、驚きのあまり声が出なかった。頭は何も考えていないのに、足は勝手に首を落とされた鹿嶋から素早く後退していた。

転がった首はしごく穏やかな顔をしている。眼も見開いたままだ。

斬られたことすら自覚せずにいたのかもしれない。
男たちは全員、眼球が乾燥するほどに目を見開いて首を凝視していた。
驚きのあまりか、身体の臓物が全部吐き出されそうだった。
「なに奴だ！」
正気に返った先頭の男が声をあげた。声に触発されてか、全員が同時に抜刀していた。お互い背をあわせ、用心深く辺りの様子を伺う。
街道には誰もいなかった。つい先ほどまでは数人が行きかっていたはずであったが、辺りは風の唸り声と潮騒以外はいたって静寂に包まれていた。
「誰か我らがこの密命を受けたことを、知る者がおるのか」
先頭にいた一番年嵩の男が、首を落とされて仁王立ちになったままの鹿嶋からそっと木箱を奪いとった。抱きかかえていた木箱を失って首なしになった遺骸は、均衡を失して転倒した。
皆が息をのんだ。
一体いつ、誰がどうやって鹿嶋の首をこうも見事に落としたのか。
「急ぐぞ」
木箱を抱えた男が駆け出した。
けれども、脇坂は足がすぐには動かなかった。首を落とされた鹿島は、確か縁談がまとまったばかりだった。年老いた養父にようやく楽をさせてやれると話していたのは、つい昨日のことだったというのに。
脇坂は強く目を閉じ、鹿島の成仏を願うと踵を返した。次の瞬間、再び血の雨が降ってきた。
ひゅうと、脇坂ののど元に冷たい空気がなだれ込んできた。
先頭きって駆け出した男には首がなかった。かっと目を見開き、大きく口を開けた首が、後に続く者たちの足元に転がってきた。
身体だけがほんの数歩、勢いあまって前に駆け、つんのめって転倒した。

一同は刀を構えたまま、誰も動かなかった。
荒ぶる風にまかれて、じっとあたりの物音にだけ耳を傾けた。敵がどこに潜んでいるのか分からない。全身が緊張で凍て付いた。
耳朶に触れる海風はまるで死者の糾合のようだと、脇坂は思った。

其の一・届けられた妖異……1

元治元年（一八六四年）三月――

横浜――海からそよぐ潮の香が新しい時代を呼び込む町。

春風が心地よい夕暮れ時、本町通りにある大店、骨董商・大倉屋の暖簾が勢いよく舞い上がった。

飛び込んできたのは、胸元に小さな風呂敷包みを大事そうに抱えた侍風の男だった。少々くたびれた着物を身につけていて、脇差すらさしておらず丸腰である。

侍は入口に突っ立ったまま、肩で荒く息をしていた。お店の左手に整然と並ぶ京都の茶道具、反対側の骨董の大壷や横浜港を描いた錦絵などを一通りぐるりと見渡している。

「おこしやす。すんまへんなぁ、ちょっと待っといておくれやすな」

ちょうど番頭は別の客を相手している最中だった。手代の一人は奥で接客を、他の手代や下人、丁稚たちは使いや所用で、店の者はみんな手が塞がっている。

大倉屋の一人娘・お亮は、この好機を逃してなるものかとばかりに立ち上がって店先に駆け出した。番頭の惣八が、茶道の稽古を怠けたお亮に罰として骨董道具磨きを言いつけたものだから、ちょうどこの時、お店（たな）の端で渋々茶道具を整頓していたところであった。もちろん整頓している振りをして、なんとか逃げ出す隙を見極めていたのは言うまでもない。

天神髷に結わえた髪を飾る簪が、お亮の動きに合わせて小さく涼やかな音をたてる。

丸い顔は朝露に濡れた赤い椿のように愛らしい。口元には面白い悪戯を見つけた幼子のような、輝いた笑みが浮かんでいた。

ふんわりと重そうな振袖の袂には牡丹の花が織り込まれている。朱色のちりめんに黒い襟、銀糸がふんだんに使われた華麗な帯。駆け出す姿はまるで妖しげな蝶が飛び立ったようにもみえた。

十八になったばかりの可憐さと上品な仕草は、誰が見ても文句なしで大店のお嬢さま然としている。
「お嬢さん！　あきまへんえ。お客さんにはちょっと待っといてもろうておくれやす」
客の相手をしながら、釘をさしておかねばならんとばかりに番頭が声を張り上げた。
「惣八は心配性やな。うちかて、お客さんの相手くらいできますがな」
大きな瞳を眇め、唐紅色に薄く色付いた唇を歪ませて、お亮は番頭を睨みつけた。
番頭の惣八など怖くもなんともない。一番怖いのは、いまだ京都に残っている父親の大倉屋籐吾郎だ。甘んじて罰を受けているのも、惣八が藤吾朗に告げ口するのを恐れてのことなのである。
店先まで歩み出ると、片手を帯に添え、もう一方は着物の袂に添えて、できるだけ優雅に見えるように頭を下げた。それもこれも、嫌々ながらも手習いを続けた藤間流の踊りのおかげともいえる。
「ようこそお出でやした」
お亮が挨拶をしても、勢いよく大倉屋に入ってきた侍は包みを抱え、暖簾の前で棒立ちになったまま動かなかった。どこか冷めた視線は真っ直ぐ、番頭が相手にしている客に止まっている。
客は異人だった。ヒグマのような大きい体躯に、透けるように白い肌、栗毛色の癖のある髪、身につける衣服は洋装で靴を履いている。異人はお亮の艶やかな振袖姿を目に留め、手にしていた茶道具を置くと、連れてきた買弁と何やら聞き取りにくい言葉で会話を始めた。買弁とは、香港や清国（当時の中国）の商人であり、開港当時の横浜において、外国商人と日本人の間を取り持つ通訳のような役割を果たしていた者たちのことである。
いつまでたっても侍が何も言わないので、痺れを切らしたお亮が声をかけた。
「お侍さん、異人さんは初めて見はったん？」

お亮は店の入口に立ったままの侍を上から下まで眺めやった。まだ年若そうな顔をしている。鼻筋が通っていて、右の鼻の脇に少し目立つ大きな黒子があった。お世辞にも裕福とはいえない姿で、髷は乱れて着物も綻びがみえる。どこかの屋敷で禄を食んでいるようには見えなかった。かといって、いま流行の「攘夷」という排外思想を掲げる浪士たちのような荒んだ雰囲気もない。

浪人風の侍は急に思い直したように、店先できちんと正座したお亮の前へと歩み寄ってきた。間髪おかずに、いきなり持っていた風呂敷包みをお亮に押し付けてくる。

お亮が眼を白黒する間もなく、素早く耳元で、

「頼む。しばし、預かってくれぬか。少しの間でよいのだ。必ずやすぐに戻るゆえ」

と、囁くと、あっという間に踵を返してお店の外に消えていった。

「ちょっと、お侍さんたら……」

腰を浮かせて呼び止めたが無駄であった。疾風の如き勢いで飛び出した侍の姿はあっという間に見えなくなった。

風呂敷包みは小石が詰められたみたいにゴツゴツとしていて、手にどんと重く圧し掛かってきた。ちょうどお亮の両方の手のひらにすっぽりと乗っかる大きさだ。

預かれと言われても困る。骨董商は品物を買い受けて預かることはできるが、荷物の預かり場所ではない。いや、お亮とて預かり物くらいできるが、見ず知らずの言葉を信じていつまで待てばいいのやらわからない。もしも明日にでもなったら、大変だ。明日は店に出る予定ではない。今の若侍が預かり物を取りに来てもお亮は不在に違いないし、ただで品物を預かったと番頭の惣八に知れたら、次のお仕置きには庭履きだとか床拭きだとか言い出すに決まっている。

明日だけは、天地がひっくり返っても絶対にあけておかなくてはならない。長崎から兄の悠乃介が戻ってくる日だからだ。出迎えたあとは土産話も聞かねばならないし、話したいことも山のようにたまっている。つい先日、馬車道通りで見つけた異国風の茶屋にも兄

を案内したい。
お亮は番頭の惣八を盗み見た。どうやら惣八は、ようやく覚えた異国の言葉をたどたどしく操ることで精一杯らしい。浪人風の侍から預かった風呂敷包みを抱きしめて、すぐさま草履をはいて店を出た。
今からなら追いつける。
時は申の刻・ちょうど七つ半（午後五時）の夕暮れ時だ。大倉屋を出ると本町通りは家路を急ぐ者や、たくさんの荷を乗せた大きな押し車をおす者、買い物途中の者など、まだ多くの人が行きかっていた。そのほとんどは商人や店子たち一般庶民だ。浪士と外国人との事件を避けるため、居留地を含む横浜港一帯の「関内」には武士が入ることができない決まりだった。
「どこへ行ってしもうたんやろう……」
大倉屋を出た時点で、お亮はすでに風呂敷包みを抱いた浪人風の侍を見失っていた。
看板娘として着飾った振袖も、人を追うには不便な重さだった。仕立てが良くて柄が織り込まれている分だけ、小袖などよりは重くできている。おまけに包みも重かった。お亮は包みを袖の袂にしまいこんで胸に抱きかかえた。
とにかく、侍風の人間が戻るとするなら外国人居留地方面ではないはずだ。店にいた外国人客を見る若侍の冷えた目が、お亮にそう判断させていた。
時代はいま混迷の時を迎えている。侍たちは「攘夷」だと言って異人を嫌い、幕府体制は崩れ落ち、地方の藩は覇権を争って諍いが絶えない。粛清と称して辻斬りも横行していた。つい三月前まで京都に住んでいたお亮は、肌で時代の変革を感じていた。いまや京都は尊皇攘夷の嵐が吹き荒れている。
足は迷うことなく、本町通りから馬車道通りへと向いた。
とその時だった。響きわたる大きな悲鳴に足が止まった。
「ひ、人が死んでるよぅ！」

二軒ほど先の路地裏から、大きな悲鳴が次々とあがった。
嫌な予感だった。侍の冷えた眼差しが脳裏にまざまざと甦った。振袖の袂をしっかりと抱きしめると、お亮は駆け出した。裾が少々肌蹴るのも、全く気にしない。
通りを歩いていた人たちが声を聞きつけて次々と集まってきた。屋敷と屋敷の間の狭い路地を隠すように、あっという間に人間のぶ厚い壁ができあがっていた。
「殺されてるじゃねぇかい」
「横浜も物騒だねぇ」
「また侍同士のいざこざかい？」
半ば呆れたような人々の声が届いてきた。横浜は新しい異国の風がより間近に吹いていただけに、攘夷の風当たりは厳しかった。二年前の文久二年（一八六二年）八月二十一日、武蔵野国生麦村で、英国人が殺傷されて薩英戦争に発展したばかりだ。関内でも、安政六年（一八五九年）暮れに関所ができるまでは、攘夷と称する殺傷事件が相次いでいた。
横浜の町でも不穏な空気を拭い去ることはできず、人々の心中に深い闇を植えつけているのである。
お亮は中の様子を伺おうと、めいっぱい人垣の隙間から覗いてみるが、いっこうに分からない。
胸に抱きしめた重い荷物が、お亮の心の臓と一緒に拍動し続けているようだった。こうなったら顔を確かめずにはいられない。野次馬たちは侍だと言っていた。もしも死んでいるのが荷物を預けた侍なら預かったものをどうするのか、大きな難問が降りかかることになる。なにより、横浜港から眺める海の広大さにも負けないお亮の好奇心が黙っちゃいなかった。
フンと、気合と入れると、袖をしっかと抱いたまま「ちょっとすんまへんなぁ」と、肩で野次馬たちを押しどけながら前におし進んでいった。
背後からは役人たちが駆け寄ってくる声が耳に届いてくる。神奈

川奉行所から、さっそく人が呼び寄せられたのであろうか。
ようやく野次馬たちの前方に出たお亮が見た遺骸は、やはり見知った顔だった。
今は、眼が零れ落ちそうなほどに見開いて大きく歯をむいているけれど、筋の通った鼻の横に目立つ黒子が確かにある。胸には匕首が握り手のところまで深く差し込まれていた。
一突きやわ……
お亮は声には出さなかったが、手口の見事さに驚きを禁じえなかった。
大倉屋を出てからさほど時間が経ったわけではない。あっという間に裏路地に引きずり込んで殺め、すでに下手人の姿はないようだった。
大事な荷物を一旦人に預けようとしていたのだから、つけられ追われていたのかもしれない。追いついたものの、浪人風の侍が荷物を持っていなかったので口を封じたのか。それとも荷物そのものが目的で邪魔な侍を手にかけたか。
ざあっと、足元から冷たいものが這い上がってきた。いまその荷物を持っているのは自分だ。
「さがれ、さがれ！」
腰に刀を差した奉行所の同心たちが二人、目明しらしき者たちを連れ立ち、人ごみを掻き分けてやってきた。野次馬たちを少し下がらせて、仰向けに倒れている骸を囲んで検分しはじめる。
お亮は考えた。
いま抱えている荷物を役人に渡すか、それともこのまま預かって敵の出方を待つか。だが明らかにいわくありげな預かり物を持って厄介ごとに首を突っ込めば、明日帰ってくる悠乃介や番頭の惣八に「横紙破り」だの「お転婆」「ゆき遅れ」と罵詈讒謗を浴びることになりかねない。さらに、父親の藤吾朗の耳に入って京都に連れ戻されるのだけはごめんだ。
お亮の決断は早い。こんな物騒なものをいつまでも持っているわ

けにはいかない。とっとと役人に渡してこんなこととは縁を切り、明日から兄と何をして遊ぶか、そのことだけを考えたい。

「お――」

けれど一歩踏み出したお亮の足を止めたのは、ほかならぬ一人の同心の声だった。

持ってねぇのかい？

へぇ、旦那。

密やかに交わされた二人の会話を、お亮の耳は聞き逃さなかった。

お亮は胸に抱いた荷物を再び抱きかかえた。同心と目明しらしき男の顔を目に焼き付ける。

奉行所の役人らしき一人の男は、細面で目も細い野犬のような男だった。反対に目明しらしいほうはぶ男で、岩のように四角い顔と右眉の上に小指の長さほどの傷があった。

心の臓がお亮の胸で「こいつら悪人だよ」と口を利いたみたいだった。

お亮は人垣をかきわけると、そ知らぬ顔で大倉屋に戻った。

其の一・届けられた妖異……2

横浜の開港は、大倉屋にも疾風怒濤の風を呼び込んだ。

大倉屋はもともと京都で、主に公家を相手として代々、茶道具などを扱う道具屋を営んでいた。だが時代は進歩的な大倉屋主人・藤吾朗の商売人としての手腕を放ってはおかなかった。

まず老舗の道具屋を流行の骨董商に発展させた。茶道具などに留まらず、手広く骨董品を金に変えてくれる良心的な藤吾朗はあっという間に京都で名を馳せた。三条家をはじめとする公家たちが得意先となり、店はあっという間に大きくなった。

時を同じくしてペリーが黒船で浦賀に来航し、江戸幕府は開国を余儀なくされた。大倉屋藤吾朗は長崎の出島が開放されるとすぐに迷うことなく当地で店をのれん分けし、長兄・友太郎に店を任せた。公家たちから集めた骨董品を生糸などの輸出品と抱き合わせて諸外国相手に手広く商売し、これが成功した。続いて函館、長崎、横浜、新潟、神戸の五港が開港されると、横浜にも店を出した。こちらは次兄の悠乃介に白羽の矢が立った。

一八五九年に横浜が開港されて以来、交通の便の悪かった寒村は一気に西洋の風に吹かれる活発な異国の町へと変貌した。新しいもの好きなお亮の横浜への憧れは尽きなかった。兄たちがそれぞれ店を任されて長崎と横浜に移っていったのに、お亮ひとりが黙って京都に残るいわれは何もなかった。

藤吾朗の子供の中で、頑固で豪傑な父親の血を最も濃く受け継いだのが、長兄の友太郎でも次兄の悠乃介でもなく、お亮であった。

次兄の悠乃介が横浜の店を任されることなった途端、蔵に籠って父親の藤吾朗との直談判に出たのである。頑固者ではどちらも名を譲らない。結局、お亮の横浜行きに藤吾朗が折れるまで、ゆうに半年の月日を要した。嫁入り修行に、踊り・茶道・華道を習得することが条件だった。

「見えてきたえ、惣八！」
お亮は盆踊りでも踊りそうな勢いで、両手を上げて飛び跳ねた。
「お嬢さん、はしたのうおますがな。やめておくれやす。たのんますから、大人しいしといておくれやすな……」
「ほら、悠乃介兄さまの乗った船やわ」
袖にすがりついて押さえ込もうとする番頭の惣八を押しどけて、お亮は波止場の際から身を乗り出した。
惣八も無駄とは知りつつ、お亮の袖を握り締める。放っておいたら海に飛び込みかねないと、真摯に思っていたからに違いない。先代から大倉屋に奉公していた番頭は藤吾朗の信任も厚く、赤ん坊の頃からお亮を見てきて誰よりもその性分を知っているのである。じきに六十に手の届く歳になったがまだまだ腰も曲がっておらず、現役だった。
丸い顔と髪が薄くなって広くなった額に玉のような汗を浮かべながら、惣八も海を見た。
紺碧の海と澄んだ青い空の境界線の間に、対岸の土地が見えた。入り江に船が一艘、ゆっくりと入港してくる。船は潮の香りと異国のにおいを連れ立って、お亮たちを包みこんだ。
間もなく、悠乃介を乗せた船が横浜の東波止場に入ってきた。横浜港は自然の地形を利用されており、東波止場はイギリス波止場とも呼ばれていた。反対に西波止場は税関波止場で基部には運上所が設けられている。さらに湾岸に沿っていくと神奈川台場がある。
船は大きな汽笛を鳴らす鉄の塊だった。全長約七十メートル、積載量は四百五十トンになる。沖合に停泊した鉄の塊から、ハシケへと荷が降ろされ始めた。ハシケの中に目ざとく目当ての人間を見つけて、お亮は待ちきれずに声を張り上げた。
「悠乃介兄さま！」
船乗りや商売人たち、船から荷を降ろす大勢の海の男たちがハシケを待ち構える中で、お亮の甲高い声と、トキ色の小袖は否が応でも目立っていた。

呼ばれた本人も大きく手を左右に振っている。
悠乃介はお亮と違って面長で、髷を結わずに髪は束ねている。歌舞伎役者でいうなら女形でも務まりそうなくらい整った風貌は、商人というより学者風でもあった。明哲さが眉宇に溢れ、それでいて空に漂う白い雲を彷彿とさせる柔和さがある。体躯も大きく、惣八など悠乃介の肩ほどまでしかない。
「よく迎えにきてくれたね、お亮」
「おかえりなさい」
優しい手がお亮の頭にのせられた。それだけで、お亮は心の臓が焼け火箸をあてられたみたいに熱くなって、身体が燃えそうだった。そのまま頭の上で湯でも沸かそうかという勢いだ。
「惣八を困らせていたんじゃないかい？　お亮の声が船まで聞こえていたよ」
「とんでもあらへん。うちはええ子にしとったもん」
「そうかな」
悠乃介は目を細めて惣八に気の毒そうな視線を送った。
「長崎の友太郎兄さまは元気やった？」
「もちろんだよ、立派な旦那さまになっておられた」
「ふぅん」
お亮の口が意地悪く歪んだのを見てか見ずか、悠乃介は話の矛先を変えてきた。
「文にいろいろ新しいものを見つけたと、書いてあったろう？　お店に戻る前に、見せてもらってもいいかな」
悠乃介の待ちに待った言葉に、お亮は両手を打ち鳴らした。馬車道通りの茶屋と居留地に新しくできた異国の食べ物の店「ベーカリ」は、絶対に行かねばならない横浜の新名所だった。ベーカリ、は今で言う「パン屋」で、イギリス人が居留地ではじめて民間人向けに店を開いたのだ。

其の一・届けられた妖異……3

横浜大倉屋の若旦那の部屋は、立派な茶室のように小ざっぱりとしていた。

床の間に掛け軸がかかって花が生けられていて、文机が一つあるだけであった。長崎から持ち帰った荷物はまだ隅に無造作に置かれている。仏間には大日如来像が鎮座していた。

悠乃介はお亮を前に座らせて、大仰に腕を組みなおした。

「それで、お亮は預かった荷物を持って帰ってきてしまった、というわけかい？」

黙って肯く妹を悠乃介は渋柿でも食べたような顔をして睨みつけた。

悠乃介がお亮に怖い顔をすることはあまりない。目にいれても痛くないというほど可愛がってくれている。お店のことや自分のことなると細かいくらい厳しい姿勢を崩さない悠乃介が、どういうわけかお亮にだけは甘い。悪戯をしたら庇い、出掛ければ欠かさずお亮が喜ぶ土産を買い、機嫌を損ねると甘菓子が出る。

が、危ないことをした時だけは、いつもきつく理路整然としたお小言を食らった。父親の藤吾朗のように、いきなり拳骨と雷が落ちてくるのとは、訳が違う。

静かな波にじわじわと侵されていくボロ舟の気分だった。

「そやかて、侍さんが命をかけてうちに預けたもんやで？　なんで悪い奴等に、渡してしまわなあかんの？」

殺められた侍が手にしていた風呂敷包みを膝の前に置いて、声の勢いを殺さないように詰め寄った。

一方の悠乃介はきちんと正座したまま腕を組み、それとは知れぬほどの小さなため息をついた。

「あのね、お亮。どうして侍が善人で役人のほうが悪人なんだい。侍が盗みを働いたのかもしれないだろう？」

「そんなことあらへん！　そやかて目明しの旦那は悪人面やったし」
「顔で決めるのかい、お亮は」
今度は小難しい書物でも読んでいるような顔になった悠乃介だったが、一瞬だけ口元が綻んだのを、お亮は見逃さなかった。
「どう見たって、あっちが悪そうやったもん」
はっきりと言い捨てて、拗ねた子供みたいに頬を膨らませると、目の前の包みに目を落とした。
「まったくお亮の無鉄砲さといったら、さすがの私も言葉を失うよ。こんな事を旦那さまがお聞きになったら、もう横浜にはいられないよ」
「それは後生だから、悠乃介兄さま！」
合わせた手をおでこにきつく押し付けて悠乃介に懇願するそぶりをみせたが、実は内心、兄が父・藤吾朗に告げ口などするわけがないと高をくくっている。今までもお亮がやってきた悪戯や無鉄砲な行動をいつも影から助けてくれるのは悠乃介ただ一人だった。
悠乃介は腕組みをして、うんと唸った。
「私はお前が何かやらかすたびに、五条大橋の乱闘を思い出すんだよ」
「それも言いっこなしやわ」
急にひ弱な声になってお亮は呻った。悠乃介の言う「五条大橋乱闘事件」とは、お亮が十五の歳に起こった出来事だった。
店の骨董商品にケチをつけた客の背中に「私は阿呆です。骨董の目利きもできまへん」と書いた張り紙をこっそりと貼り付けた。客がどのくらい町の人間の笑いものになるのかと、こっそりあとを付けたことは言うまでもない。客が周囲の人間にこそこそと笑われているのがとても小気味良かったのだが、五条大橋のあたりでお節介な人間が張り紙のことを告げ口して、事が発覚した。烈火のごとく怒り狂った客は橋の上で、誰がやったんやと、大騒ぎを始めた。誰がやったと言わずとも、「骨董」と書いてあるのだから、おのずと犯人は明白だったろう。お亮は隠れていたつもりだったが、あっけ

なく見付かって橋の上に連れ出され、負けじと「無礼者！」と叫んで暴れたものだからさらに騒ぎが大きくなった。
運の悪いことに、相手が大倉屋をひいきにしていた三条家などの公家と敵対する、京都所司代の与力だったから大変だった。公家はこんなお店を相手にするのかと蔑まれ、お亮一人の問題ではなくなってしまった。
「ええのんよ、うちも一矢報いて、引っかき傷を残してやったから」
「あの時は三条さまにはお世話になったねぇ。そうそう、三軒先の松野屋のおみっちゃんが行方知れずになった、という騒ぎの時も奉行所までいったんだったねぇ」
「あれは、おみっちゃんという名前を猫につけた松野屋さんが悪いやもん。誰かて、おみっちゃんがおらへん、って聞いたら、子供が浚われたんやと思うやろう？」
悠乃介は噴出した。
お亮のする事にはそれなりに正義があるらしいのだが、如何せんいつも騒ぎが大きくなりすぎるのが困ったところだった。
「ま、それは拾得物として神奈川奉行所にお届けしよう。それでいいだろう？」
お亮は口をへの字に曲げながら、渋々肯いた。別に犯人探しをしてやろうとか、お侍の仇をとろうとか、考えていたわけではなかったが、悪人面した神奈川奉行所の役人にすんなり渡してしまうと思うと、なんだか腹の底が熱くなるのだった。
攘夷や粛清の気風が激しいこの世で、お亮が一番嫌うのは「虎の意を狩るキツネ」だからだ。誰も彼もが我も我もと刀を振るって人を斬ることが、まるで正義のような世の中である。殺められた気の毒な侍も、そんな世情の風に吹かれて命を落としたのかもしれないと思うと、妙に腹立たしかった。
「……そやかて」
「また、そやかて、かい？」
「明日は『さあかす』にいかなあかんしなぁ……」

「別にお亮が奉行所まで行かなくても、惣八に頼んでおけばいいよ」
悠乃介はお亮の膝の前に鎮座する風呂敷包みに手を伸ばした。
「包みの中身な……赤い石ころやねんよ」
「――石？」
包みを解きかけていた悠乃介の手が止まった。
「珍しいもんやけど、赤い水晶みたいやった」
風呂敷は三重になっていた。家紋や独特の文様などは見付からず、ごく一般的に街中で普及している風呂敷のように見えた。一枚目は無地の紺、二枚目は渦のような文様のある濃茶色をしている。
ところが、最後の一枚には家紋が入っていた。
葵の御紋である。
この家紋を知らぬものはいまい。二人は思わず目を見合わせた。
葵の御紋が入った風呂敷包みをあけた悠乃介の手がふいに止った。風呂敷の端を握り締めたまま硬直している。
中には五つほどの石が入っていた。
お亮が言った通り、庭先に転がっている小石を大きくしたものと変わらなかった。一つ一つは、手のひらにしっかりとおさまる。
ただ、灰色の中に混じる色は、赤とも紫とも判別しづらい。そういう色が斑に混じっていて、時に白っぽく見えることすらある。石によっては岩石の色より赤い斑のほうが多くて、赤い石、と言ってもいいものもあった。
「そやけど紫水晶よりは鈍い感じやろう？」
お亮の言う通り、石の赤い部分には透明感がない。
悠乃介は風呂敷を握り締めていた手を解き、今度はまるで腫れ物を障るかのようにおずおずと持ち上げた。
兄のこんなにおどおどとした目を見たのは初めてだった。指先が震えてすら見えた。いつもは、どんなに暑くても「涼しいですよ」という取り澄ました顔をしている。おおよそ、動揺する、という感情を知らないのではないかとすら、お亮は思っていた。僧侶が悟りを開いた、と言うのなら、悠乃介はまさにその境地にあるとすら思

う。
「これは、宝石、というものと違うやろうか」
すっかり関東言葉になっていた悠乃介が、京都訛りで呟いた。
「ほうせき、って、うちも聞いたことがある。咸臨丸に乗った勝海舟はんがメリケンで『だいやもんど』っていう石をもらわはったんやろう？」
「お亮はそういう新しいことに詳しいね」
半ば呆れたように息をつきながら、悠乃介は赤みがかった石を元通り風呂敷に包みなおし始めた。
勝海舟が咸臨丸でアメリカを訪れたのは万延元年（一八六〇年）のことだ。親善の証として徳川幕府に約五カラットのダイヤが贈られたという。そののち、ダイヤが一般的になるには、まだまだ先のことだ。
「これは、京都に持って帰ろう」
元通り石を包みなおした悠乃介は、立ち上がって文机の上にそれをのせた。
「なんで？」
お亮は合点がいかなかった。まさか悠乃介が猫糞を決め込むつもりだろうとは考えなかったが、中身が宝石の類だと知って奉行所に届けないとはおかしな話だ。しかも、葵の御紋である。将軍家に関わりのあるものであったら大変なことになる。
風呂敷包みを置いた悠乃介は、まっすぐお亮の前に戻ってきて正座しなおした。
「お亮は邪眼という言葉を知っているかい？」
聞いたことのない言葉に、お亮は首を横に振った。
「さすがのお亮も、西洋の話には詳しくないね。宝石はね、西洋ではお守りや薬になったり、切り出して削って、瑪瑙や水晶みたいに着飾るために使ったりしてるんだよ。けれど、中には石に怨霊が住んでいたり、宝石を守る妖怪がいたりするらしいよ」
お亮は思わず膝を崩し、手を後ろについて身をよじった。

それが悠乃介の得意分野であることは百も承知だったが、同時にお亮にとっては最も苦手とするところでもあった。
悪い奴らや不条理なことは大嫌いで怖くもなんともないが、こと怨霊や妖怪となるとわけが違った。
悠乃介はざっと顔の色を失ったお亮を見て、可笑しそうに口を綻ばせた。知っていて、魑魅魍魎の話を聞かせる兄を見て、思わず口が歪んだ。
悠乃介には神通力があって、時々、お化けや妖怪が見えるらしく、怖がるお亮をからかうことがある。
小さく声を立ててひとしきり笑ってから、悠乃介は「悪かったよ」と謝った。
「邪眼、っていうのはね。見るだけで人を不幸にする力を持つ目のことなんだよ。呪い、というとお亮にも分かるかな。西洋には、ひと睨みするだけで人を石にできる魔物がいるらしい。日本にもいるんだよ、確か、飛騨国の上宝村あたりには牛蒡種（ごんぼだね）という憑依体質の者がいて、彼らは邪眼を持っていると聞くが……」
お亮は身体ごと向きを文机のほうに向きなおして、風呂敷包みを指差した。
「じゃあ、それって西洋呪いでもかかってるの？」
「呪い、とは少し違うんだけれどね。この赤い石には、かなり悪い力が満ち溢れているのさ。おそらく、だよ？　邪眼、らしき眼が開いているような気がするんだよ。簡単にいえば、持ってるだけで人が不幸に、なる、とでも言うかな。まあ、おおかた、殺められた侍にしても、この石が危険だということを知らずに持っていたのだろうけれどね」
悠乃介がなにやら恐ろしげなことを、涼しい顔をして言っている事のほうが、背筋が寒かった。
そんな危険なものを、なぜ浪人風の侍が持っていたのか。しかも、葵の御紋入りの風呂敷に包まれていた。あげくに侍は横浜へ入り込んで殺されてしまった。

まさか悠乃介兄さまが言う通り、侍のほうが悪者で、奉行所の役人は単に追っていただけだったのだろうか。侍は仲間割れした、のかもしれない。だとしたら、私は大変なことをしてしまったのかもしれない。

お亮の頭の中を、様々な推測が浮かんでは消えていった。

「お亮、眉間に深いしわが寄っているよ」

悠乃介は再び立ち上がって、文机に向かうと紙と筆を用意した。

「なにすんの？」

「赤い石の力を封じておこうと思ってね。大倉屋に置いておいて、悪鬼を呼び込んでしまっては大変だからね。」

半紙を取り出すと、九印を記した。

包みと半紙を手に大日如来の前に移動すると、悠乃介は数珠を取り出して経を唱え始めた。高低のない、淡々とした低い声が部屋に充満していくようであった。

「天元行躰神変神通力、臨・兵・闘・者・皆・陣・烈・在・前！」

低くて刃のある鋭い声が手刀とともに九字の印を切る。真綿のような普段の悠乃介の声とは思えなかった。

お亮は思わず背筋を伸ばし、生唾を飲み込んだ。あたりの空気が夏の夕立のあとみたいに瞬時に冷えて、ムッとした湿気に包まれたようだった。

悠乃介のこんな姿を見るのは初めてではなかったが、やはり少し怖かった。いつもは身近にいて優しい兄が、お化けと一緒に遠くに行ってしまうようで嫌だった。目に見えず、剣で斬れず、はたまたどんな説得も常識も通用しない化け物が、大きな隔たりとなって立ちはだかったようにも思えた。

「さて、これでしばらくは災いも起こらないだろう。惣八に頼んで、京都に向かう船を用意してもらおう。旦那さまから大京寺の方丈さまにお願いしていただくことにするよ」

「大京寺、って言ったら、悠乃介兄さまの？」

「そうだよ竹香芳悦（ちくこうほうえつ）和尚さまならお任せして大丈夫だから」

悠乃介は穏やかに微笑んだ。陽だまりのようだった。兄がこうして笑ってくれると、必ず何事も上手く運ぶ。お亮に荷物を預けて亡くなってしまったお侍は可哀相だったが、きっとこれも神仏のお導き、何かのご縁と考えることにした。

「そうやね、方丈さまにお任せしたほうがええね」

竹香芳悦和尚は真言宗大京寺の住職であり、悠乃介の育ての親だった。

悠乃介は藤吾朗の実子ではない。お亮も子細は知らないが、悠乃介は寺に捨てられていたそうである。和尚は小僧として悠乃介を慈しんで育てていたという。ある時、寺の檀家であった藤吾朗が悠乃介の利発さに舌を巻き、引き取ったと聞いていた。惣八によると、長兄・友太郎の他にも男子が二人いたがどちらも早世し、身代を分ける者を失ったと、当時の藤吾朗はひどく嘆いていたらしい。

お亮が七つ、悠乃介が十三の時だった。藤吾朗が悠乃介を連れ立ってやってきて、今日からお前の兄さまだぞ、と告げた。

長兄の友太郎はお亮とは十も歳が違う。お亮が物心ついた頃には、すでにお店を継ぐのだと大きな顔をして、藤吾朗の元で勉強ばかりしていた。末娘で初めての女の子だったから、藤吾朗も母親のお咲もお亮をとても可愛がってはくれた。けれどどんどん店が大きくなって忙しくなり、一人で遊ぶことが増えた。母親のお咲が三つの時に流行り病で亡くなってからは、近所の男の子たちと遊ぶのが日課となった。

だから、突然現れた悠乃介は格好の遊び相手だった。

手習いも一緒だったし、町人ながら剣の稽古もつけてもらった。何をやっても、悠乃介に敵うことはなく、はじめは意地になって対抗していたが、いつしかそれは憧れの感情へと変わっていた。

今もその気持ちはまったく変わっていない。

「さて、この話はおしまいだ。明日のことは楽しみにしていたんだよ」

お亮も手を打って、大きく肯いた。

明日は「サーカス」が日本で始めて公演される日だった。
錦絵にも「中天竺舶来之軽業」として残されているサーカスは、アメリカのリチャード・リズリー率いる一座だった。
「べーかり、という食べ物も、なかなか良かった。そうそう、長崎からカステラをお土産に持ってきたんだった」
「ほんま！」
魑魅魍魎のことも、侍が持ち込んだ赤い石のこともすっかり忘れて、お亮の頭の中には甘いカステラの味が広がっていた。

其の二・おとなった妖異……1

大勢の人間が、朝早くから山手にある居留地へと集まってきていた。初めて日本にやってきた西洋の曲芸とはどんなものかと、みな興味津々で子供のように好奇心いっぱいの目をしている。お亮とて例外ではなかった。

居留地を訪れるのはまだ三度目なので、首と目も忙しい。右を向いても左を見ても、日本とは違う光景が広がる。建物は洋館で二階建て、格子のガラス窓、入口には「扉」とういものが付いている。軒先には花が植えられ、家と家が密集している関内とは違って、どこか小ざっぱりとした印象だった。

おまけに、今日やってきた日本人をよくみると、誰もが身形がよくて裕福そうだ。

中には紋付袴の侍姿で、幕府の役人か神奈川奉行所の人間、もしくは運上所の役人という者が数人混じっていた。が、主だった者はすべて町人たちだった。

横浜の総年寄り（町長）石川徳右衛門の姿もあった。

弁天通りで大店を構える野沢屋（のちの松坂屋）茂木惣兵衛、生糸貿易商の中居屋重兵衛、老舗旅館の福井屋、両替商の佐野屋など、横浜を代表する者たちが顔を揃えている。

空も今日の初興行を祝福するように晴れ渡っていた。

「すごい人やねぇ」

お亮も先日とは違う振袖を着ていた。桜が舞い散ったような織り込みが入った橙色の着物は艶やかだ。髪を飾る鼈甲の櫛は、長崎から悠乃介が土産に持ち帰ってくれたものだった。赤い椿が描かれた美しい櫛だった。当然、見せびらかせるために付けてきた。

隣に並ぶ悠乃介といえば、いつも通りにゆるく髪を束ね、どこから見ても文句のつけようのない若旦那ぶりだった。凛と背を伸ばして薄い笑みをたたえていると、若い娘たちが指を差して囁きあう。

お亮はひとり、嬉しくてしようがなかった。サーカスを見にきたことも嬉しいのだけれど、悠乃介と町を歩けることはもっと楽しい。自慢げに「ええやろう？」「私の兄さまやよ」と微笑んで回ってもなお足りないくらいだった。

「見えてきたよ、お亮。あれがリズリー一座じゃないかな」

異国の洋館が並ぶ居留地の広場に、大きな天幕が現れた。赤や青や、原色がたくさん使われていて、華々しい雰囲気だ。

リチャード・リズリー率いるサーカスの一団は、攘夷風の厳しい日本での興行回りを許されなかった。横浜の居留地でのみ公演を許され、日本で初めて「さーかす」という名を知らしめた。

たくさんの旗が掲げられ、青い空にはためいている。空砲が数発、打ち鳴らされた。

大きな音に思わず耳をふさいで、か弱い乙女の如く悠乃介に縋ってみた。

「何の音やろう、兄さま」

「存外怖がりなんだね、お亮は」

お亮の頬が風船と同じくぷうと膨らんだ。お化け以外のものに対して「怖がり」と言われるのは、少々心外だった。

「ああ、異人さんたちもたくさん来ているね」

「そりゃ、異人さんの曲芸やもん」

リズリー一座の天幕の周辺には、訪れる日本人の数を上回る異人たちが開演を待ちわびていた。遠く異国の地を踏み、自国の催し物を懐かしんで、今日の日を心待ちにしていたに違いない。

悠乃介の上背を上回る巨体の異人たち。見るもの全部が青く見えてしまうんじゃないかと誤解しそうな空色の瞳。火で焙ったんじゃないかと勘違いしそうな縮こまった髪や、光に溶けてしまいそうな金の髪。

たくさんの異人たちがいると、いかに珍しいもの好きなお亮といえど、怖いものが少しあった。横浜の錦絵に描かれた異人は、古の妖怪に似たものもある。横浜にくる前は錦絵を見るだけで震え上が

っていたものだ。もちろん、異人を怖がっていては異人相手の商売は成り立たないし、お亮の気性をもってすればすぐに慣れた。
たとえ肌の色や瞳の色、髪の色が違っても、同じ「人」であることはすぐに分かる。日本人と同じように笑い、大仰に泣き、大きな身振り手振りで感嘆の声をあげる異人たちは、攘夷だの倒幕だといきりたつ浪士たちに比べれば、よほど健全で素直に思えた。
何より、お亮の目を引くのは異人の女性が着ていたデコルテだった。胸元には「びいず」と「れぇーす」に飾られ、腰が締まり、そこから空気を入れたように着物が大きく膨らんでいる。大倉屋にある西洋のお人形のようにお洒落な着物だ。お亮は横浜に来て以来、まだ一度も袖を通していない。袖を通すどころか、あれをどうやって着るのか皆目見当すらつかない。
目の前を歩く異人の夫妻を眺めながら、いつか悠乃介か籐吾郎におねだりして、デコルテという着物をきて町を歩いてみたいとぼんやり考えていた。ちょうど去年、エゲレス人のピアソンという人が、居留地にドレスメーカー「サムエル・クリフ支店」を開店したのを、お亮はちゃっかりと知っているのだ。
「らしゃめんがいるよ」
「本当だ、恥ずかしくねぇんだかねぇ」
すれ違う者の会話が、ふと耳に止まった。彼らの視線の先には、異人に寄り添う着物姿の日本人がいた。
綺麗な女だった。地味な紺色の小袖には裾のほうにだけ金糸で鳳凰が描かれている。一目見ただけで、仕立てのいいものだと分かった。結い上げた日本髪から、ほんの少し遅れ髪がうなじに落ちていた。それがまた大人の女の魅力をかもし出している。横顔しか見えなかったが、肌も艶があって、艶かしいくらいの赤い紅が唇に引かれていた。
「お亮、そんなに見ていては、はしたないよ」
「ごめんなさい。あんまり綺麗な人だったから」
つい、足を止めて「らしゃめん」と呼ばれた女を眺めていたらし

い。
　そんな風に呼ばれなくちゃいけないのは、可哀相だと思った。そんなら単なる「慰み者」みたいだ。本当に好きあって異人と一緒になった女だっているに違いないのに。
　開国当時、横浜では異人の愛人のことを「らしゃめん」と呼んで差別していたのである。
　そうこうするうちに、ラッパが鳴り響き始めた。天幕の入口には大きな玉に乗った異人が短剣を二本弄んでいた。「カムヒァ！」という言葉を繰り返している。お亮には意味が分からなかったが、どうやら雰囲気からすると天幕の中に招きいれようとしているらしかった。
「行こうか、お亮」
　悠乃介の片腕をつかんだまま、大きく肯いた。
「ごめんよ！　ごめんよ、ごめんよ！」
　お亮の脇を、威勢のいい声が駆け抜けていった。はずみで肩がわずかに触れ合って、思わず小さな悲鳴をあげた。こういう時は大店の箱入りお嬢さまとして、品良く、か弱く、美しく振舞うことなど何の造作もない。
「すまねえ、急いでるんだ。わりぃな」
　かすりの着物の裾を背中の帯に挟み、片手を懐に押し込んでいる。「粋」を気取ったように、言葉にも節があった。
　謝っているのに、悪かったという響きのない言葉に、お亮は思わず睨み返した。
　岩石のような顔だった。ほお骨が高くて、顎が出ていて、岩のように四角い顔。右眉の上に小指の長さほどの傷がある。一生忘れない、悪人面だ。
　考える前に目明しを指して叫んでいた。
「ああ！　悪人面の目明し！　ほら、殺められた――」
　悠乃介があわててお亮の口を塞いだ。
　男の顔色は瞬時に赤くなっていた。右眉の上の傷が、目が釣りあ

がるのと一緒にもちあがった。
「なんでぇ、てめぇ。ひでぇこと言うじゃねぇかい！」
「お亮、なんてことを言うんだ。申し訳ございません、旦那。この子は最近、横浜に来たばかりで、疲れておりまして。どうぞ、許してやっておくんなさいまし」
悠乃介が口を啄木鳥みたいに尖らせたお亮を背に庇って前に出た。謝りながら、丁寧な物腰で頭まで下げる。慌てて、謝罪をやめさせようと悠乃介の背中に手をかけたが、後ろ手に腰の辺りを叩きこまれて、黙るしかなかった。
「どんな躾してやがんだ」
先日、お亮に荷物を預けたのちに殺された侍を検分していた目明しは、いきり立って声を荒げた。それでも急いでいたらしく、そのまま天幕の裏側へと走り去っていった。
目明しの姿が見えなくなるのを待って、悠乃介はお亮に向き直った。
眼が、はっきり怒っていた。半眼のまなざしは真っ直ぐお亮に注ぎ込まれている。非難と叱責と怒りがありありと籠もった眼差しだった。
「そやかて、悪人面やったもん」
大きなため息が、悠乃介の口から漏れた。お亮の「そやかて」がはじまると、決して折れたりしない。
お亮は悠乃介の身体に半分隠れるようにして、天幕の裏側を覗き込む真似をした。
「なあ、兄さま。なんで、あんな目明しふぜいが、さあかす、見にきてるんやろう。おかしいやんか」
「お亮は懲りてないんだね。あれは船の手配がつき次第、方丈さまの元へ送り届けて浄化していただくんだ。これ以上、関わりになってはいけいない。わかったね」
ぴしゃりと言ってのける兄に素直な返事をするのが果てしなく躊躇われたので、お亮はまず頬を膨らませて抗議の意思を示した。

それから、小さく「はぁい」と返事をした。
「ほら、それよりサーカスが始まってしまうよ。せっかく来たのだから」
「ほんまや」
その意見には大賛成だったので、ちゃっかり笑顔で返事をした。

其の二・おとなった妖異……2

十人の座員と八頭の馬による舶来の芸能は大好評であった。
天幕の表で、膝ほどの高さがある大きな玉に乗って二本の剣を弄んでいた異人もいた。弄ぶ剣が正真正銘本物だという証明に、異人は剣を壁に突き立ててみせた。瞬間、観客からは感嘆の声が漏れる。それを空中に投げて受け取るという荒業には、お亮も冷や冷やさせられた。
日本にも曲芸などを披露する旅の一座などがある。お亮はそれと同じようなものだと考えていたが、少し違っていたようだ。リズリー一座のサーカスは、もっと大胆で、もっと心が躍った。
特に、空中ブランコだけはお亮を夢中にさせた。
昔、近所の男の子たちを引き連れて、近くの神社の裏にある大木に登ったことを思い出す。そこにブランコがぶら下がっていたなら、どんなに面白かったろう。
着物の裾を捲り上げて大きな簪をつけたまま、よく木に登ったものだ。いつも番頭の惣八に見付かって、藤吾朗にこってりと絞り上げられた。
「大店のお嬢さんがやることやない。そんな暇があったら、茶道や生け花をやって、店に出しても恥ずかしゅうないような教養と礼儀作法を身につけんか」
という言葉から説教が始まる。お亮の母親、お咲がまた慎ましく穏やかな性質だったらしく、必ず比べられるのが気に食わなかった。そうなると意地の張り合いになる。お亮はますます、母親のように女らしくなんぞするもんか、と活発になっていった。
けれど、だからといって教養や嗜みがないと言われるのは堪らなく悔しい。いっぱしのお嬢さまに見えるように、それはそれとして努力もしてきたつもりだった。そうなると藤吾朗のほうも、強く叱ることもできなくなる。

そんなお亮と藤吾朗親子の潤滑油となるのは、いつも悠乃介の役割だった。
「素晴らしかったね、お亮」
お亮はガキ大将のようににっこりと微笑んで、口元で両手を合わせて答えた。
「ほんま、すごかったわ。あの空中ブランコ、というもんな――」
「無理だからね、お亮。家には空中ブランコは作れないからね」
瞬時にお亮の頬が河豚のように大きく膨らんだ。
「なんで分かるのん？」
悠乃介は涼しい顔をしたまま、「お亮が悪い算段をする時は目が山形に歪むんだよ」と言って小さく噴出した。
今度は頬を膨らませたまま、眉を寄せて目を眇めた。
「それじゃあ、お亮。昨日行った茶屋に寄って帰ろうか。甘いぜんざいはどうだい？　それとも白玉がいいかな。私は団子にするとしようかなァ」
一瞬目が泳いだが、負けずに頬は膨らんだままだった。悠乃介は甘いものに誘えば、お亮の機嫌が直ると思っている。いつまでも、そんな子供じみたことで誤魔化されるものじゃないと、少々意地を張ってみた。
しかし、悠乃介も負けていない。
茶団子にしようか、餡がよいか、それとも羊羹にするかと、次から次へとお亮の好物を並べ立てていった。
着物の両袖に手をしまって、楽しげに甘菓子の話をする兄には勝つことができない。居留地の中をゆっくりと足を進める悠乃介の前を塞ぎ立つと、お亮は胸を張った。
「今日は団子」
口を歪めたままのお亮の頭に、悠乃介の大きな手がのせられた。髪を手で整え、簪を挿しなおす。そのままお亮の手を握って、悠乃介は歩き出した。
胸の中が騒がしかった。

サーカスの興奮よりも、もっとひどく胸が高鳴るのを、お亮は感じていた。

＊

お亮と悠乃介が大倉屋の暖簾をくぐったのは、昼も随分と過ぎた八つ（午後二時）頃だった。

出迎えたのは、血相変えた惣八だった。

「どないしたん？　惣八」

馬車道通りの茶屋で団子を食べ、呉服問屋で新しい振袖を仕立て、悠乃介に思いっきり甘えてきたお亮はすこぶる機嫌が良かった。いまなら惣八のお小言の一つや二つ、屁とも思わない。

けれども、お小言をいわれるような雰囲気ではなかった。

惣八は困ったように薄くなった頭を撫でると、お亮をわずかばかり眺めやった。小さな嘆息を挟んでから立ち上がって悠乃介に近付き、耳元で素早く何かを囁くと、「奥の部屋にお通ししておますさかい」と言って、先導し始めた。

「お、っと。お嬢さんのお客さんと違います」

惣八は、お亮など通してなるものかという具合に、両手を前に出して押し留めた。

「お亮は部屋に戻っておいで」

悠乃介もお亮に下がるように言う。

別に兄の言葉に剣があったわけでもなんでもないが、惣八の様子からお亮はぴんときた。

うちに聞かされへん話やな。

惣八の目線とため息は、間違いなくお亮を避けるようにと考えをめぐらせた結果に他ならない。

ここは素直に部屋に戻る「振り」をするのが一番だ。

お亮はお店の奥に入り、兄と惣八を見送った振りをしてから素早くとって返し、そっと後をつけた。お店の奥には何十と部屋があっ

て、見失ったら最後、どこだか分からなくなってしまう。
後をつけながら、しかし少々不思議だった。
悠乃介は、つい一昨日、横浜にやってきたところだ。ご近所への挨拶回りはすんでいる。惣八が血相変えていたところを見ると、あまりいい客ではないのだろうと予想はついたが、どういう類の客なのかはまったく分からない。
横浜では競争が激しく、昨日まであったお店が今日はない、ということなどざらだった。異人相手の商売や貿易はまだまだ難しく、運上所や奉行所、町年寄との付き合いも重要な商売のひとつである。またどこかの藩が後ろ盾になっているというお店もあり、繁盛具合も様々だ。挨拶回りも多い。
まさか、奉行所から何かケチがつくようなことでもあったのだろうか。
ふと、先日訪れた殺められた侍のことが頭をよぎった。けれども、あの侍が大倉屋に立ち寄ったことまで、奉行所が調べ上げているとも思えない。
惣八と悠乃介は、大倉屋の一番奥にある茶室へと向かっていた。小さな橋を渡り、別棟で建築された茶室へと着く。惣八は人がひとり通れるだけの隙間を開けて、慎重に悠乃介を部屋へ通した。
襖が閉まったのを確認してから、お亮は足を忍ばせて茶室に近付いた。
中から声が聞こえてきた。どうやら来客が挨拶をしているらしい。
「突然の訪問、ご容赦願いたい。こちらも気が急いているゆえ、そちらの番頭さんに失礼があって、申し訳ございません」
「さ、堅苦しいことはおっしゃらず。茶をたてますのでごゆるりと」
悠乃介の穏やかな声が、耳に届いた。
それにしても、兄が茶とたてることができるとは、初耳だった。と、考えていると襖が大きく開け放たれる。
「さ、お嬢さん。お客さまにお茶を」
惣八が目を細めて、襖の脇に立っていた。お亮の行動は予測済み

であったと言わんばかりの呆れ顔だった。それが少々悔しくて、お亮の唇は大店のお嬢様にふさわしくないくらい前に飛び出して歪んだ。

「うちが？」

「そうです。若旦那さんがお呼びですさかい。ほな、私はこれで」

惣八が茶室の中に丁寧に頭を下げて踵を返した。すれ違いざま、心配と書いた張り紙を顔に貼り付けて歩いたような惣八を見て、お亮の口はさらに歪んだ。どこまで心配性なのだろうか。いい加減、子供扱いはやめて欲しいのに、と内心呟いた。

「お亮、お客さんにお茶をお出ししておくれ」

部屋の中から再び悠乃介に呼ばれて、振り向く惣八を横目で見ながら茶室の前に立った。

障子の外には小さな竹林が見える、静謐な茶室だ。

お亮は胸を張って小さく咳払いをした。大店のお嬢さまに変身する時だ。敷居を跨ぐ前に膝を折り、相手の顔を見る前に深く頭を下げた。

「大倉屋の娘、お亮と申します。ようこそいらっしゃいました」

少々余所行きが過ぎたかなと、思うほどの、上出来な挨拶だと考えてひとり満足した。

客はまだ年若い町人風の身形だった。ゆったりと髷を結い、若旦那のように羽織を着ていた。けれども、立ち居振る舞いや目付きは、町の人間の者ではなかった。真っ直ぐに背筋を伸ばし、正座した膝の上に両手を添え、凛としている。目元は、流れ落ちる滝のように鋭く、口は横一文字に引き締められていた。

お亮はとくりと胸が一つ打ち鳴らされたのを耳もとで聴いていた。

「脇坂重三郎と申します」

若者は軽く頭を下げた。

「お亮、お茶を」

言われるままに、お亮は茶をたてる用意を始めた。別段、得意というわけでもないが、出来ぬこともない。茶室の棚に収められた茶

碗を用意し、作法にのっとって茶をたて始めた。
「さて、妹が茶を立てている間に、御用むきをお伺いいたしましょう。大倉屋に、どのような御用が？」
悠乃介が脇坂重三郎と名乗った男に問うた。脇坂は居住まいや表情を一切変えることなく、膝で悠乃介のほうへわずかばかりにじり寄った。
「三日ほど、前のことでございます。友人を探しております。こちらへ立ち寄ったのではないかと、すでに番頭さんにお聞きいたしましたが……」
お亮に聞かれまいとしているのか、脇坂は声を落とした。
悠乃介が凪いだ海のように穏やかに微笑んだ。
「やはりそのことでしたか」
茶をたてながら、お亮は必死で聞き耳を立てていた。いつもは気にならない、呂釜で湯が沸くかすかな音や茶筅がたてる音が、ひどく邪魔だった。
「それなら、妹にお気遣いはご無用。貴方さまのご友人なる方にお会いしましたのは、我が妹でございますから」
悠乃介と脇坂の視線が一度にお亮に注がれた。
茶筅を立て、茶碗を返して脇坂に差し出しながら、お亮は膝の向きを変えた。
脇坂の目は、厳しくお亮に向けられたままだった。
「可哀相なお侍さんの、お話ですか？　ここにこう……」お亮は、自分の鼻の右脇を指差しながら、「ちょっと目立つ黒子がある人ですやろ？」と続けた。
「そうです。間違いない。山本はこちらに風呂敷包みを預けはしませんでしたか！　それを返していただきたい！」
はじめて殺められた侍の名を知って、心の臓の奥にちくりと針が突き立ったようだった。たった一言しか言葉を交わしてはいないものの、不思議な縁で出会った侍の顔が、お亮の脳裏に焼きついている。

けれども、そのことと風呂敷包みの事は別だった。
「山本はん、言わはりますの、あのお方。さ、それより、お茶が冷めますさかい、どうぞ」
脇坂は苛立ったようにほんの少し涼しい目を細めた。言われた通り茶碗を手にし、十二時の方向から手前まで回し、茶碗の表をお亮に向けてから、口をつける。ちゃんと作法を心得ているようだった。
「結構なお手前でございます」
茶室は、湯の沸くかすかな音だけに支配されていた。薄く開いた障子から涼やかな風がふわりと舞い込む。
お亮が後始末を終えるまで、脇坂は声を発しなかった。ただ、膝の上でかたく握り締められた拳が、彼の心中を表しているようだった。
「単刀直入に申し上げましょうか」
静寂を破ったのは悠乃介であった。

其の二・おとなった妖異……3

「何なりと。そのほうが有難い。少々、急いでおりますゆえ」
「では、脇坂殿。あれを、どこで手に入れられましたか」
「それは申し上げられませぬ」
「それでは困ります」
「中を、ご覧になり申したな？」
「ですから、申し上げております」
脇坂は怪訝そうに横浜大倉屋の主・悠乃介を眺めた。
「山本が預けました品物を返していただきたい。金子、とおっしゃるなら、ご用意いたしましょう。如何ほどでも、そちらの言い値で」
脇坂の声は、今にも噴火を始めそうな山に似ていた。声を荒げたわけではないが、言葉尻に苛立ちがはっきりとでている。悠乃介は脇坂の苛立ちを知ってか知らずか、変わらず淡々としていた。
「脇坂殿はあの石が宝石だと、知っておいでかな。相当な値がつきますよ、売ってしまえば」
脇坂がさらに目を細めた。商人風の格好をしているが、もしも腰に刀を差していれば、この瞬間に抜いたのではないかと思うほどの殺気が迸っていた。
お亮は呂釜の前で袱紗をたたみながら、兄が心配になって思わず身を起こした。
「兄さま、お役人さんのことも、私から聞いてええやろうか」
悠乃介が肯いた。
「役人？」
「そうです。私は山本はん、というお侍さんが殺められはった時、近くにおりましてん。お荷物はお役人に渡してしまおうと思いましてなぁ。そしたら、どうどす？　奉行所のお役人さんと目明しの人が、お侍さんが手ぶらやと言っておいででした。神奈川奉行所のお方は、脇坂さんのお友達どすか？」

あれほど殺気が満ちていた脇坂の顔が瞬時に青くなったのを、お亮は見逃さなかった。
「うちらが荷物をお返しできませんのはな、どっちのお方が正しいのんか、分からんからです。奉行所のお役人さんに、お荷物を渡してしもうたほうがよろしぅおすのかなぁ？」
お亮は無邪気に小首を傾げてみせた。わざとらしく京都弁で語尾に力を入れ、いかにも脅しているのだぞ、と脇坂に分かるように、かまをかけた。
横浜の関内には通行鑑札が必要で、浪人風情の武士は関所で止められて入ることができないうえ、横浜の利益は徳川幕府が握っている。脇坂がわざわざ町人に身をやつしてまで関内へ忍んで来るほどの価値が、あの石にはあるに違いない。
脇坂は答えなかった。じっとお亮を見つめて考えているようだった。
「大倉屋さんのお話はわかりました」
脇坂は言い終わる前に、膝で後ろに下がって手をついた。「どうか、山本が命をかけて守った品物をお返し願いたい」と言って、そのまま畳に額をこすり付けるようにして、脇坂は平伏した。
「脇坂殿。あれがどのようなものか、貴殿はご承知でおっしゃっているのですか」
悠乃介の問いに脇坂が顔をあげた。何を言っているのか分からない、という風だった。
「貴殿にもすでに、あの石の影響が濃く出ておりますよ。あの石はいけない。持っていては、悪鬼、化生を呼び、よくないことになります」
「なんの、お話か……」
幾分か迷った素振りをみせたあと、脇坂は意を決したように居住まいを正すと話しはじめた。
「一体なにをおっしゃっているのか分かりかねますが……あれを江戸藩邸に届けるのが我々の役目。出立した時は十人ばかりいた同士

が、あっという間に一人減り、二人減り、最後は山本と二人になり申した」
「ということは、襲われでもしましたか」
脇坂が肯いた。
「夜陰にまぎれ、疾風のごとき太刀筋でござった」
肩を落としながら、息をゆっくり吐き出している。襲われた時のことを思い出し、身震いするのを懸命におさめているかのようだった。
「相模に入り、小田原を過ぎて、じきに武蔵というところでした。保土ヶ谷宿あたりから不思議と宿がとれなくなり、そのまま江戸へ足を急がせておりました。山本が荷を持ち、私と坂部という者がもう一人、この時にはすでに仲間は三人になっておりました。夜の街道は誰も通らず……月の光が急に隠れて……気がつくと、坂部の悲鳴が――」
言葉を切ってしまった脇坂の代わりに、悠乃介が続けた。
「それで、山本殿とお二人、街道を逸れられたか？」
「はい……横浜の手前の村でまた襲われて、伊勢崎というところで山本とはぐれました。山本を探すうち、吉田橋の関門でそれらしき人物を見た、という者がおりまして。そうこうするうち、関内から遺骸が運び出されて、捲れた筵から覗いた顔が……すぐに申し出て遺骸を引き取り近くの寺に運びましたが、荷物がない」
「なるほど」
脇坂は、山本が横浜港の方向に逃れたに違いないとふんで、関内に潜り込んだらしい。
「よく大倉屋がお分かりでしたね」
「人に聞けばすぐに分かりました。山本が殺められたのは大倉屋さんの三軒先。近くに隠したか、預けたか……周辺の店をしらみつぶしに訪ね回ってまいりました」
悠乃介が着物の袂に手を入れて腕を組んだ。真っ直ぐ前にいる脇坂を見ている。

脇坂の言葉をすべて信じるのなら、義は彼にあるように聞こえた。
藩名は分からないが、彼らは十人ばかりで宝石を江戸に届ける命を受けて旅立ち、途中で得体の知れない敵に襲われたことになる。ようするに、荷を殺された山本という侍から奪おうとしていた神奈川奉行所の役人と目明しは敵方、であり、包みの中身が高価な値のつく品物であることを知って狙った、と考えることもできた。話の筋はちゃんと通っている。
お亮は、脇坂に包みを渡してしまってもよいと思い始めていた。江戸はもうすぐ目の前だ。人を何人か雇ってやって、脇坂を送り届けてやればいい。かわりに、どこかの藩と大倉屋はつながりを持つことができる。大倉屋は京都に地盤があって、横浜においてはまだまだ新参者であり、商売は順調とは言いきれぬところもある。商売をするうえでは、願ってもない話だ。
「ということは、あれはすでに、少なくとも九人の血を吸ったことになる」
悠乃介の声はゾッとするような響きをもっていた。印を結ぶ時のような低い声で、畳に目を落としている。
「先ほどから、あなたさまの言っていることが分かりません。私には石を江戸藩邸に届けるという責務がござる。どうか、お返しくださりませんか」
「それではお聞きしましょう。仮に、脇坂殿があの包みを持って大倉屋を出立し、無事に、その江戸藩邸に着けると、そうお考えか？」
「もちろんでござる」
脇坂は膝で前に進み出た。目には燃えるような決意がこもっている。
「何故、山本という方が、それほど大切な石をこちらに預ける、などという行動を起こしたのでしょうか。それほど、追い詰められ、危険を伴ったのでございましょう？　そもそも何故、その石は狙われるのでございますか？　藩邸内に、敵がいるか、もしくは――」
「あの石は――」

脇坂は苛立ちをあらわに立ち上がった。
「まぁ、お座りください。いいでしょう。お返ししましょう。ですが、その前に、貴方はお祓いをしたほうがよろしい」
「お祓い？」
お亮の心臓が暴れだした。悠乃介の目はいつになく真剣だった。
横浜の錦絵のように綺麗な顔はいつだって優しさに溢れていたし、笑みを絶やすことだってない。お亮の知っている兄は、学問にすぐれ、剣術にすぐれ、そして、真言密教に深く関わっている。これほどまでに冷たい雰囲気を持つ兄を見るのは、そうあることではない。
山本が預けた風呂敷包みを開けた時の悠乃介を思い出した。ひとつの身体に二つの人格が潜んでいるのと同じで、悠乃介という人間の皮を二人が被っているようだなと、お亮は考えていた。いまの兄は、大倉屋の若旦那、ではなく、密教に通じる大京寺の阿闍梨としての姿であるようだった。阿闍梨とは、密教では高位の僧侶をさす。
悠乃介の語り口は、経を読む僧侶のように淡々として、押し迫るものがある。
「こういうことはご存知か？　人の念というのは、いつまでも残るもの。それが強ければ強いほど、惹かれ膨れ上がり、容易に怨念へと変化する。一つ例えを申し上げれば、道具にも人形にも、人の慈しみの心が映りこみます。そういう道具は年を経るごとに輝きを増し、骨董としての価値も膨れ上がる。言い伝えによると、古い道具には妖怪がつく、それを付喪神ともいいますね。まぁ、そんなわけで、同じことが、あの石にも言えるのですよ。ただこの石の場合は怨念を吸い取るわけです……」
悠乃介はそこで脇坂を見上げた。上目遣いに、脅すように怖い顔だった。
「あの石には邪眼という目がある。いうなれば一目見るだけで、人を地獄に落とすことができる力です。それが石には込められているようです。つまり、あの石というか宝石を持っているだけで、悪鬼を呼んでとり憑かれてしまうのです。そんなものを貴殿の藩に置い

ておかれたら、主筋も危なくなる。それでも、貴方さまは江戸藩邸にお届けなさるか？」
脇坂は毒気を抜かれたように、膝を折って再び腰を下ろした。思ってもみなかったことを聞いたとばかりに、目を見開き、唇は薄く開かれていた。
「貴公は……ただの骨董屋か？　それとも」
悠乃介が薄く笑った。誹ったようでも失笑したようでもない。見るものを安堵させ、包み込むような薄い笑みだった。
「別に、ただの骨董屋の若旦那でございますよ。少々幼い頃から、妖怪だの悪霊だのを、よく見るだけのことでございます。骨董の価値を見抜くにはちょうど良い力でもございますけれどもね」
まるで、芝居や相撲を良く見るのだよ、と、言っているような口ぶりだった。なんでもないような、とても自然な言い方だった。
脇坂だって、九人の同士をわけもなく失っていなかったら、こんな酷い反応はしなかっただろうとお亮は考える。見ていて気の毒だった。藩命をいただいた時は、こんなことになるだろうとは思いもよらなかったであろう。江戸に着けば十人揃って藩主か家老に労いを受け、無事に国元へと戻ったあかつきには、愛しい家族や仲間と元通りの生活を送る予定であったはずだ。
「お侍さん、悠乃介兄さま。今日は日も暮れますし、どうやろうか、一晩ゆっくり泊まってもろうたら。そしたらお祓いかてできるし、大倉屋で籠でも用意して、江戸まで送って差し上げることもできますやろ」
「よいことを言うね、お亮」
悠乃介が褒めてくれたので、お亮は得意になった。
「ほんなら、惣八に言うて、明日の籠の手配と部屋の用意をさせますさかい」
大店のお嬢様として、お亮はきちんと膝をそろえて畳に手をつき、小首を傾げて京人形よろしく艶やかに微笑んだ。
大倉屋の最奥にある茶室に、ようやく安堵の空気が流れた。

其の三・降りかかった妖異……1

朝起きてみると、暗澹とした空が広がっていた。鉛色の雲が低く垂れ込め、空が重い荷物を背負ったみたいだった。今にも雨が降りそうな気配がある。

見ているだけで気分が滅入りそうになって、お亮は障子を閉めた。

「せっかく脇坂はんが出立なさるのに」

惣八に、大倉屋を訪れた脇坂重三郎の部屋を用意するように頼みに行ってから、お亮は自室に戻っていた。

悠乃介が、昨夜のうちに脇坂のお祓いを済ませたはずである。少々気後れがして、同席したいなどと我がままを言う気にはなれなかった。

赤い宝石、という石に込められた悪鬼が脇坂にも影響を及ぼしているという。お亮は思わず、錦絵にある妖怪を思い出した。つり上がった目をしていて、口が大きく裂けている。そこからべろりと舌が垂れ、赤子よりも小さな手で脇坂の髷をしっかりつかんで頭の上にしがみ付いている画だ。想像しただけで、真冬でもないのに身震いする。そんな恐ろしいものがお祓いの最中に、脇坂の後ろに見えでもしたら、きっとお亮は卒倒してしまうに違いない。

これですべてが終わる。殺められた可哀相な山本という侍も、どうやら遺骸は脇坂が引き取ったようである。あとは大倉屋で籠を用意して江戸まで脇坂を送り届ければいい。そして、あわよくば、お亮もその籠に同行するつもりであった。

「おはようさん、惣八、悠乃介兄さまは？」

動きやすいように薄紅の小袖でお店にやってきたお亮は、挨拶より前に惣八のあきれ果てた目に迎えられた。渋茶を飲んでうんざりしたような顔だ。以前、大事な店の骨董品である茶碗を粉々にした時も、同じような顔で見られたことがある。

「なんやの？　うちがなんかした？」

「これから、なんぞ、しやはるおつもりでっしゃろ？」
惣八は腰を少しばかりかがめて、帳簿を片手にお亮を睨んだ。さすがに、お亮が生まれたときからの付き合いなだけある。お亮が脇坂とともに江戸へ行こうとしていることなど、何もかもすっかりお見通しというわけだ。
ムッとして口を尖らせていると、畳み掛けるように惣八は続けた。
「今日はあきまへんえ。踊りのお師匠さんのところへ行く日ですからな。その後は、石川徳衛門さんのお屋敷で、お茶会が催されますのんや。是非に、言うて、お誘いを受けておますさかい。絶対、あきまへん」
惣八相手では埒があきそうにもなかった。頑として譲らない意志の強さが、今日の惣八にはある。確かに踊りの手習いの日だし、そういえば、お茶会の話も聞いていたような気がする。忘れていたのはお亮が悪いのだが、これは面白くなかった。
口はますます尖って、ふいと踵をならして奥へととってかえした。
大倉屋の客間へと足を運ぶと、すでに脇坂重三郎は身支度を整えていた。昨日と同じ、商人風の羽織、帯には粋に扇子をさしている。
ただ、表情がさっぱりとしていた。朝、冷えた水でざぶりと顔を洗った後のようだ。昨日のような切羽詰った冷たい雰囲気が一切ない。どこにでもいる、柔和なお店の若旦那、という風に見えた。目元が涼しいから、なお朝露に濡れた美しい葉のようだった。お亮でさえ、一瞬見惚れたほどだ。
「おはようさんです。脇坂さん、よう寝やはりましたか？」
お亮が丁寧に両手をついて挨拶をしたので、脇坂もそれに習った。
「おかげさまで、久方ぶりに布団で休むことができました。それもこれも、お嬢さんのおかげです」
「それはよろしかったわ」
お亮はひどく満足で鼻が高い。
「おや、お亮は早いね」
悠乃介が木箱を手に現れた。朝の挨拶を済ませてから、手にした

木箱の中身を問いただそうとしてやめた。
木箱には九印の文字が書かれ、護符が貼り付けてあった。悠乃介はそれを脇坂に差し出した。
「中身をおあらためください。箱には護符を描いておりますが、宝石そのものは浄化されているわけではありません。昨夜も申し上げましたが、ぜひ、そのように。私からの書状は、ともに木箱におさめておきますので」
「承知しました」
脇坂がまた、深々と頭を下げた。
「なになに？　なんやの？」
「この石は危険なのですぐにお寺に預けてくださいと、お願いすることにしたのだよ」
子供に諭すように悠乃介が言うので、お亮は少々機嫌を損ねた。脇坂を見ると微笑んでいる。どうやら悠乃介の勧めに応じて、宝石を寺に預けるよう、江戸藩邸の者に伝えるつもりでいるらしい。
丁稚が籠の用意ができたと、告げにやってきた。
脇坂は悠乃介とお亮に何度も礼を言い、大倉屋をあとにした。

＊

脇坂が早朝に大倉屋を出立して一刻ほどが過ぎた。お亮も丁稚一人を伴って、しぶしぶ踊りの稽古に出かけた。
日本舞踊は明治以降に生まれた言葉で、厳密に言えば、この時点では、歌舞伎舞、であった。藤間流・藤間勘兵衛の流れを組む師匠の一人が、ちょうど乞われて関内で踊りの稽古をつけており、お亮もそこへ通うようになった。
無論、自ら進んでゆくわけではない。大倉屋藤吾朗との約束で、横浜に居るためには仕方のないことであり、お亮にも意地というものがあった。元来、おだてや褒め言葉に弱かったから、師匠に多少褒められて、現在のところは気分良く通っているというだけのこと

である。
然しながら、今日は少々ご機嫌の向きがよろしくない。
脇坂を次の関所くらいまでは送ってゆきたかった。自分が預かりおいた品物の行く末は、かなり気になっている。悠乃介は、赤い石には邪眼が込められており、持っているだけで良くないことが起きてしまうのだと言う。にわかには信じがたいことだったが、事実、宝石を運んだ十人のうち、生き残ったのは脇坂重三郎、たった一人だった。
脇坂はんは、無事に関内を出はったやろうか……
頭によぎるのはそのことばかりだった。
だから、見知った顔とすれ違ったことには、まったく気付かなかった。
大倉屋がある本町通りは、変わらず人の往来が多い。踊りの稽古場は弁天通り方面にある。居留地方向に向かってしばらく歩き、細い路地を抜けていくのが近道だった。
路地に入ったところで、人通りは急速に減少した。見計らったように、下卑た声がお亮を呼び止めた。
「また会ったな」
後から声をかけられても、まさか自分が呼ばれたなどとは思いもよらなかった。
「無視すんのかい、大倉屋のお嬢さんよ」
耳の底を撫で上げられたかと思った。声を聞いただけで、嫌な顔を思い出す。機嫌が悪いのに、さらに不快になってきた。振り向きもせずに突き進んでいると、ぞうりを引きずるようにして近付いてくる気配がする。
黙っていられなくなって、お亮は足を止めた。隣で、丁稚が不安そうに荷物を抱きかかえている。
「なんぞご用どすか？　目明しの旦那はん」
すぐ後ろに岩のような顔があった。右眉の上に傷のある顔だ。片手を懐に入れ、偉ぶっているのか顎を突き出している。狙っていた

獲物を目の前にした蛇みたいな目で、お亮を上から下まで眺めやってから言った。
「お前、大倉屋のお嬢さんだったんだ。はぁ、そうか……あの時、近くにいたんだな？　何か見たのかい？」
「あの時、って、何のことやら分かりまへん」
腹の底から煮えくり返るような気分だった。下卑た輩を相手にしていると反吐が出そうだ。つんと顎を上げて、睨み返してやった。
「気の強そうな女子（おなご）よな。ちょいと聞きてぇことがある。顔かしな」
いくら路地とはいえ、多少の往来はある。目明しは若い娘を連れ出そうとしているのに、隠そうともしなかった。
「嫌や、言うたらどないしはるん？」
お亮はつまらない脅しに屈服するようなか弱い娘ではない。口を尖らせて小首を傾げると、京風の赤い簪が風に揺れた。
「嫌、とは言わせねぇよ」
目明しは懐に手を入れたまま、お亮に近付いてきた。思わず身を引こうとしたが、後ろに隠れるように立っていた丁稚の長吉がお亮にしがみ付いてきた。
「お嬢さま！」
「長吉。お前は、事の顛末をちゃあんと、若旦那さんに言うておくれや」
お亮に恐怖はない。相手は人間だ。化け物じゃあない。このまま神奈川奉行所に連れて行かれても、知らぬ存ぜぬを貫き通すだけだ。反対に、この目明しをかどわかしで奉行さまに訴え出てやるつもりだった。
その時、右の脇腹から腕が差し込まれた。後ろに立つ長吉に気をとられている間に、目明しがお亮の背後に立ったらしい。さらにうしろに、二人のごろつきが立っていた。
「活きのいい、お嬢じゃねえか」
脇に差し込まれた目明しの手が握っていたのは、匕首だった。さしものお亮も息をのんだ。

山本という侍を殺めたのは、この男かもしれない……。
「さ、歩いてもらおうか」
右脇から目明しの腕が消えた。
「おっと、誤解してもらっちゃあ、困るんだぜ。ちゃあんと、ここに」目明しは懐に突っ込んだ右手を、左手で指し示し、「仕舞ってあるんだからよ。いつでもズブリと、お嬢の背中を串刺しにできるんだぜぇ」と、声を低くして、喉をならして笑った。
「そっちは始末しとけ」
「へい」
嫌な声だった。まるでゴミを捨てるみたいな言い方に、お亮は驚いて振り向こうとした。
「おっと、歩いてもらおうか」
振り向く間もなく背中を突かれて、仕方無しに歩き出す。周りからすれば、まるでお亮が何かをしでかして、目明しに連行されているようにも見える。
すかさず、通りの向こうから籠がやってきた。あっという間に男に腕をつかまれて籠に押し込められる。そのまま籠の中で、引っ掻いて一矢報いる暇もなく手を後ろで縛られ、猿ぐつわをかまされた。
お亮の右脇に匕首が差し込まれてから籠に乗るまで、ほんのわずかな時間しか経っていなかった。
無論、そのあと可哀相な丁稚がどうなったのか、お亮は知る由もない。
籠ががくんと揺れて、お亮はどこかへと運ばれていった。

其の三・降りかかった妖異……2

悠乃介は、大倉屋の店先で帳簿を眺めていた。

義父・藤吾朗の言いつけで、長崎を回り、兄・友太郎のもとで商売に関してしばらく学んできた。京都大倉屋の暖簾を守るには、脇を固めねばならない。

いま京都は攘夷の嵐が吹き荒れ、大声で「貿易」などと口にすれば町人といえど粛清の対象となる恐れがある。中には、用心棒として腕の立つ浪人者を雇っているお店すら出てくる始末だ。いくら、三条家、西園寺家をはじめとする清華家（公家の家格の一つ）などと昵懇にしていようとも、結果としては同じことだった。

三条実美は強硬な攘夷派で、昨年、公武合体派に敗れて京都を追われた。

だからと言って、一転平穏になったわけではない。京都の御所周辺では、会津、薩摩など諸藩の武装した者たちが一触即発の状態にある。

いまのところ京都においては、保守的に商売を続けるのが得策だと、藤吾朗は考えているらしかった。

けれども長崎と違って、横浜は江戸に近く、幕府が権益を抑えているので、まだまだ商売が順調というわけではない。噂では京都の攘夷派が、横浜鎖港を将軍に迫ったとも聞く。

悠乃介も頭の痛いところであった。安くて質の良い生糸をどこから買い付けするのか、いかに安く運搬するか、居留地にあるどの商会となら上手くやっていけるか。横浜においての地盤作りは、はじまったばかりだった。

「若旦那はん。ちょっとよろしいか」

「どうかしたかい？　惣八」

惣八は物憂げに悠乃介の前に正座すると、「実はお嬢さんのことですが」と切り出した。

「今日はちゃんと踊りのお稽古に出かけたのと違うのかい？」
「はぁ、それが……」
悠乃介は暖簾のほうへと目をやった。まだ日は高く、暖簾の影が店に短く差し込んでいた。時刻はちょうど昼九つ（午後十二時ごろ）になろうかという頃だ。
「一緒に行かせた丁稚が、ちいとも戻って来よりませんのんや。昼時になったら、違うもんを迎えにやろうと思うておりましたんやけど」
「まさか、お武家さんを追って行ったとでも言うのかい？」
「いえ、そうは言いまへんけど」
長年勤め上げてくれている番頭が、ひどい心配性であることは重々承知であったが、戻ってくるはずの丁稚が一人、未だにお亮とともにいるというのも、少々解せぬことではあった。
「丁稚が言いつけを忘れたのかもしれない。もうしばらく待ってみましょう」
惣八も悠乃介の言葉を聞いて、渋々とお店の奥へ戻っていった。
お亮が脇坂重三郎のあとを追ったとは、悠乃介も考えていなかった。踊りの稽古を怠けたことが父親の藤吾朗の耳に入りでもしたら、お亮は横浜にいられなくなるだろう。お亮と同じで、父・藤吾朗はこうだと言い出したら、てこでも動かない。それこそ、富士のお山と同じで、当主の意思は不動のものだ。
藤吾朗が横浜か江戸の基盤作りの一つとして、こちらの商家へお亮を嫁にやることにしていることは悠乃介も知っている。三条実美が京都を追放にならなければ、お亮はそれなりの公家に嫁ぐはずであったことも知っていた。横浜行きを許したのも、京都が危険だからでもある。少々のことではお亮を戻しはしないだろうが、藤吾朗のことだ。京へ戻れと言い出したら、お亮も従うほかなくなる。そうなったら悠乃介も寂しい気がした。
目を輝かせて活き活きとしているお亮が、悠乃介にとっては羨ましくもあり大切でもある。自由な翼を持つ妹は、悠乃介にとっては

自らの分身である。どんな厄介ごとを持ち込んできてもさして苦ではないし、どんな難題も解決するのが楽しくもあった。とはいえ、今回の厄介事は思いのほか危険を伴ったことは事実だった。

赤い宝石の邪眼のことだけではない。訪れた脇坂重三郎もまた、随分と込み入った事情を抱えているらしかった。

悠乃介は昨晩のことを思い出した。

脇坂を一目見て、悠乃介はその背に九つの黒い影が住み着いているのを見て取った。

影は小鬼のような姿をしていた。人の指ほどの大きさで、脇坂の頭や肩、腕に細い糸のような四本の手足を絡ませてしがみ付いていた。時々、林檎を齧るように脇坂重三郎の身体に齧り付き、精気を喰っている。釜から湯気が立つのと同じように、小鬼からは黒い陽炎がゆれ立っていた。

悠乃介は封印したままの赤い宝石を脇坂に見せた。小鬼は宝石を前にすると、浮き立ったように脇坂の身体をいったりきたりしはじめる。妖力の湧き立ちを歓迎しながら、封印された力に憤ってか騒々しく甲高い声を立てた。

悠乃介はいつも通り、大日如来の前で経を唱えてから、九字の印による邪破の法を執り行なった。脇坂の背に向かって九字を切りながら「臨・兵・闘・者・皆・陣・烈・在・前」と唱えて印を結ぶと、小鬼はあっけなく四散していった。

脇坂重三郎は、途端に伸びをして息を吐いた。

「なぜか、身体の疲れがとれた気がいたします」

「それはよろしゅうございました」

悠乃介は小鬼の話を、詳しくは脇坂に話さなかった。言えば、九つの子鬼を殺められた同志たちの怨霊だと考えてしまうに違いなかったからだ。

身体が楽になったためか、問題の赤い宝石を確認して安堵したためか、脇坂は今までの経緯をごくごく簡単に話し始めた。

「私は水戸藩士、脇坂重三郎吉照と申します。ご存知かどうか分か

りませんが、いま水戸は乱れております。井伊大老を桜田門外で襲撃してより、水戸藩の名は地に落ちました。斉昭公がご逝去され、過激派を止める手立てはもうございらん。いま、この時にも、軽挙妄動に逸る藩士たちが事を起こしておるやもしれません」

脇坂は言葉を切って項垂れた。

水戸藩は水戸学という学問に従って、徳川斉昭、藤田東湖らを筆頭に尊皇攘夷の気風が強かった。ところが徳川斉昭が井伊直弼と対立して失脚すると、穏健派と過激派の二派に分かれて藩内で対立するようになる。斉昭、藤田東湖亡き後は、東湖が四男・小五郎が先方に立った。

ここで暴動を起こせば、水戸藩からだけでなく幕府からも討伐隊が出されるかもしれず、一刻の猶予もない。過激派浪士たちは、長州藩士・桂小五郎らと与し、危うく東西より挙兵する、という所まで話が進んだこともあるという。

「軽挙妄動をおさめるには力が要ります」

「まさか――」

悠乃介が何を驚いたのか脇坂はすぐに悟ったらしく、慌てて首を横に振った。

「とんでもない！　石がこのように妖かしであることを、私は知りませんでした。これは横浜の栄商会を通じて売却し、武器弾薬に変わるはずだったのです」

武力を制するに、武力をもって成すか……悠乃介はそう思わずでもなかった。圧倒的な兵力を有する諸外国を目の当たりにし、粛清と謀略が横行する今、避けられない流れかも知れぬとも考えた。

「それで、どこからこれを？」

文机の上に鎮座する赤い石の包みを指差した。

「下田です。そこで受け取り、江戸藩邸に運ぶ手筈でした。栄商会から申し出があったそうです。栄商会によれば、これはビルマというところから安い原価で仕入れたのだが、本来、売ればかなりの値がつくであろうと……武器に換えるのならこれほどよい取引はない

とのことでした。手が足りないので買い取って運んでくれさえすれば、宝石を元手にフランスの武器商人へ仲介する、と。フランスも水戸藩とのつながりを望んでおるので、良い取引ができるとのことでございました」

一通り聞けば、さして不審に思うところもない。運搬料の代わりに、自らが宝石を運んだまでのことだ。聞くところによると、薩英戦争のあと、薩摩藩はイギリスと手を結んで砲台や弾薬を手に入れたらしい。最新式の武器に刀が敵うはずもなかった。

諸外国の商人たちは、ここぞとばかりに内乱につけこんで商売に余念がないのも事実だ。

脇坂は腕を組んで呻った。

「我々は運ぶだけがお役目だったのです。いや、過激派の藤田小五郎殿の耳にでも入ったのかもしれません。我々穏健派が、武装するのを止めようとしたのやもしれません」

「ですが、山本というお方が殺められた時に、そばで宝石がないと呟いたのは、神奈川奉行所の同心であったと、お亮は言っておりましたよ」

「それが解せませぬ。神奈川奉行といえば、いまは松平康直さまと都筑峯暉さまがお勤めのはず。我々水戸の子細をすでにご存知だと、いうことでしょうか。諸藩が金銭的に潤い武装することを、厭うておられる、とか……だから、密やかに我らを襲ったなどと、そのようなことは考えたくもありませんが……」

「さぁ、私たち町の者には、分かりかねます」

脇坂はそれ以上、何も言わなかった。

彼らを襲ったのは、水戸の過激派か、はたまた幕府の手の物か。今はどちらとも、断言しかねる状況である。どちらにしても、宝石の原石を今のまま放置しておくわけにはいかない。

脇坂は素直に悠乃介がしたためた書状を手にし、藩主徳川慶篤へ陳情すると言って頭を下げた。宝石に関わってこれ以上の犠牲者を出さぬためには致し方ない。

今ごろ脇坂は無事に吉田の関門を渡り、次の関所を通っているころであろう。
書状にはすみやかに赤い石を浄化するように勧めてある。きちんと寺で浄化し、祓えば、再び売ったとて問題はない。
上手くいけば、京都大京寺の竹香芳悦阿闍梨に依頼するよりも早く、邪眼を始末できることになる。
「若旦さん！」
惣八が駆け寄りながら、声を荒立てた。薄くなった頭を手ぬぐいで拭いながら、すっかり顔の色を失っていた。
「どうしたんだい？」
「どうしたも、こうしたもあらしまへん。お嬢さんが、おらんようになりました。手代を一人、踊りのお師匠さんのところに迎えにやらしましたんや。そしたら、今日は来てないと、そう言って帰されてきたんです」
「行ってない？」
帳簿を机の隅に片して、悠乃介は立ち上がった。暖簾の脇に、手代の七助が所在無く立ち尽くしている。
「七助、本当かい？」
「へぇ。朝はちゃんと、弁天通りのほうへ歩いて行かれるのを見届けました。それは間違いありません」
方向的には、踊りの師匠の元へ向かったことになる。お亮はたまに、お茶の稽古を怠けたりもしているが、丁稚とともに出かけて行方知れずになることなど一度もなかった。一人で出かけたのなら、どこか茶屋で遊んでいることも考えられるが、丁稚が一緒だとまた話は別だ。
まさか、と思いつつも、頭の中にある男の顔が思い浮かんだ。リズリーサーカスを見に行った時、お亮とすれ違った目明しの顔だ。
目明しは山本が殺められた時にそばにいた。お亮はそれを見たような事を言ってしまった。サーカスが終わったあと、お亮と自分の後をつけようと思えば、いくらでも隙はあった。付けられているこ

とには気付かなかったが、だとすれば、お亮の身元など簡単に分かったであろう。当然、大倉屋に戻ったのであるから、山本が殺められた場所に程近いことも、すぐに知れたはずだ。
だが、それだけでお亮に目をつけたというのは、あまりに早計ではないかとも思える。お亮が目明しに言った言葉だけで、赤い宝石が大倉屋にあるなどと分かろうはずもない。現に、宝石は脇坂が持って江戸へ出立したあとだ。
あるいは、脇坂の身にも、すでに何かが起こったかもしれない。
赤い宝石に関わった脇坂たちがすでに九人殺められていることを考えあわせると、悠乃介が考えているよりもはるかに、事の実相は深く、趨勢は悪いのではないかと思いはじめていた。
仮に、江戸幕府が宝石を手中に収め、水戸藩よりも先に武器弾薬を調達しようとしているのなら、お亮はとんでもない抗争に巻き込まれたことになる。神奈川奉行所の同心や目明しが関わっているのなら、その可能性は無きにしも非ずだ。
さらには宝石に込められた邪眼が、持つ者の好むと好まざるとに関わらず、次々と不幸を呼んでいく。このまま放っておいては、幕府や水戸藩云々の前に、関わった者すべてが地獄におちることになってしまうだろう。
「ちょっと、心当たりがありますから、行ってきます」
悠乃介は脇にかけていた羽織を手にした。
「若旦さん、どこへ行かはりますのんや」
縋るように追う惣八を押し止め、心配しないように言い置いた。言っても無駄だとは、重々承知はしていたが。
「気ぃつけてください。お嬢さんをたのんます」
拝むように腰を折る惣八をみて、悠乃介は胸が温まるのを覚えた。惣八が細々とお小言を並べるのも、お亮が大切だからに相違ない。

其の三・降りかかった妖異……3

薄い明かりが、お亮の目の前を照らし出していた。
蝋燭がじりりとあたりの空気を焦がして燻った。蝋の臭いと焦げた空気の匂いが、鼻に付く。
ゆっくり目を開けると、あたりは岩肌で何もない。頭をもたげて見渡すと、どうやら牢の中に押込められているらしかった。
床は湿気った畳敷きだった。蝋燭の明かりは牢の外側にある。左側に通路があるらしく、深い闇が続いているのが見えた。
一体いつ気を失ったのか、お亮にも分からなかった。いままでいろいろ悪戯をしてきたけれど、かどわかされたのは初めてだ。気を失うくらいの衝撃だったのかもしれないと思うと、なんだか自分で自分が可笑しかった。
同時に大きなため息が出た。
まず考えたのが、こんなことが京都にいる父・藤吾朗に知れたらただじゃあ済まないということだった。いや、その前に生きて戻れたら、の話ではある。
猿ぐつわはされていない。手も自由だった。牢の中に押し込めておけば、女ひとり、縛っておかなくても大丈夫だと思ったのであろう。
畳の上に横になっていたので、身体のあちこちが軋む。うんと身体を伸ばすとようやく心中にも余裕ができた。目を擦りながら、薄闇に包まれた周辺を見渡してみる。
と、右隅に黒い塊がうずくまっていた。
「ひゃあ！」
思わず素っ頓狂な声をあげて、座ったまま後ずさった。魑魅魍魎・悪鬼・怨霊の類は何よりも苦手である。
しかして目を凝らしてみると、どうやら人間らしい。色が灰色だったので、わずかばかり闇に溶けて見えたようだった。犬のように

這って、少しずつ横たわった人間に近付いてみる。
ちゃんと足もあったが、草履は履いていなかった。かなり大柄だ。人差し指で突いてみたが、反応がない。
死んでいるのやろうか……
考えていると、肩のあたりがピクリと動いたのがみえた。
「もし、生きておいでですか？」
お亮が尋ねると呻き声がおこった。思わず立ち上がって傍に寄ると、横顔が少しだけ見えてきた。町人風の髷は乱れ、肩口の袖がバッサリと口をあけて裂けており、黒く滲んで汚れていた。
「怪我、してはるやないの！」
横たわる者の前に回って、お亮は「あ！」っと声をあげた。
脇坂重三郎だった。
「脇坂はん！　こないな所で、どないしはったん！」
言ってから、自分がいかに馬鹿なことを口走ったかと、恥じ入ることになった。だいたい、お亮自身が捕らわれてきたのだから、脇坂が牢に入っている訳を聞いたところで同じことだ。
目的はひとつ、宝石という赤い石。
脇坂は腕を切られているようだった。左を下にして横たわり、右の袖がきれて血でにじんでいる。よく見ると胸の左脇の着物も斬れており、そこかしこに泥がついていた。
はじめて涙が滲みそうになった。
宝石を運ぼうとして、脇坂も山本と同じ運命を辿ったのだ。
ということは、あの赤い石は敵の手に渡ったに違いない。だとしたら、脇坂を生かしておくのは何故であろうかと、お亮は考えた。山本は一刺しにしておいて、脇坂は死なない程度に痛めつけてあるようだ。
「脇坂はん、しっかりしとくれやす」
お亮はそっと脇坂をゆすり起こした。再び呻き声を上げた脇坂は、重たげに目蓋を持ち上げた。
「ああ、よかった。お亮です、大倉屋の亮です。気ぃが付かれまし

たか？」
顔をしかめながら脇坂は声のするほうを見上げた。それから驚いて眼を見開いた。
「貴方……何故、こんなところに……」
歯を食いしばって体を起こそうとする脇坂をなんとか押し止めて、お亮は傍で正座した。幸い、お亮に怪我はない。
「言うていた神奈川奉行所の目明しに、かどわかされました」
脇坂は息をするのも辛そうに、眉根を寄せた。
「やはり、幕府の手が入っているのですね。誤解を受けたのかもしれない……武器弾薬を揃えようとしたから……」
「なんや、事情はようわからへんけど、ほんならなんで、うちらは生きてるんです？　赤い石さえ手に入ったら、よいのと違いますのんか？」
「仰るとおりだ」
今度はお亮の制する手を押しどけて、脇坂が体を起こした。左の脇腹辺りはかすり傷のようだった。着物に付着した血の汚れも、さほどではない。ただ、右腕はまだ血が止まっていないらしい。絞れるのではないかと思うほど、着物は血で汚れていた。
お亮は迷わず帯を解き、伊達締めをほどいて、脇坂の腕を縛りつけた。
「ちょっと不恰好やけど、よろしいやろう」
「すまない」
いま一度、辺りを見回して抜け道がなさそうなことを確認してから、お亮は脇坂に聞いてみた。
「ここはどこやろう」
「分かりません」
「脇坂はんは、どこで捕まらはったんです？」
脇坂は首を横に振った。
「籠に乗っていたのでよくは分かりません。木箱の中が気になって、検めようと中をあけておりました。赤い石を確認していたら、突然、

籠が止まったのです。すると刀が差し込まれました。刃が左脇を逸れて、隙をみて外に飛び出すといきなり腕を斬られ、首筋に激痛が……」

どうやらお亮と同じく、かなり手際よくかどわかされたようだった。

「あの石やわ……あの石をみんなが狙ろうているんやわ」

「ほぉう……石のことを、よう知っとるらしいな」

洞窟のような牢にわずかばかり反響する声が、後ろから近づいてきた。聞き覚えのある、嫌な声だ。

振り向くと、案の定、目明しが立っていた。いつも通り片腕を懐に入れていた。

目明しの後ろに、もう一人、見知った顔を見出した。

野犬のように鋭い眼をした細面の男だった。黒の紋付袴に着流し姿である。山本が殺められたのを検分していた同心だ。

さらに、牢と通路の境目に、もう一人立っているらしい。通路の奥で岩肌にもたれかかって姿形は分からないが、着物の片袖がちらちらと見えている。

お亮は胸を張って、手傷を負った脇坂の前に立ちはだかった。

「与五郎、お前が言う通り、なんとも気の強そうなお嬢さんじゃねえか」

「へえ、そりゃもう、一筋縄じゃいかねえんで、佐久間の旦那」

むかっ腹が立つとは、このことかもしれないとお亮は考えた。けれど目の前の二人を攻め立てたところで、牢から出られる保証はない。ないどころか、下手をすれば「煩い」と言われてバッサリ斬られてしまいかねない。佐久間という同心はいかにも短気に刀を振り回しそうな感じだ。

与五郎と呼ばれた目明しが、牢に近寄ってきた。

「聞きてぇ事があるんだ。大倉屋はこの一件に、どんだけ関わってんだい？　まさか賊の一味ってことかい？　それにしよう、お宝の箱に入ってた書状、ありゃ、誰が書いたんだ？　竹邦悠膳（ちくほうゆうぜん）というヤツ

を、てめぇも知ってんじゃねえかい？」
お亮の心臓が、刀で抉られてきゅっと縮こまったようだった。悠乃介の言葉が脳裏に甦る。
――私からの書状は、ともに木箱におさめておきますので。
確かに兄はそう言っていた。
悠乃介は、京都の大京寺で阿闍梨の竹香芳悦和尚から、その名を一字とって法名をいただいている。それが竹邦悠膳である。おそらく、脇坂の仕える藩主へ書状を送るために、大倉屋悠乃介の名前ではなく、大京寺での名前を書き記したに違いない。
「聞いてやがんのかい？　邪眼、ってのはなんだ？　知ってんだろう？」
牢に顔を押し付けるんじゃないかと思うほど、与五郎は寄りかかってきた。
「知りまへん。うちは何の関係もあらしまへん。そんな言わはるんやったら、お奉行さんでも呼んできておくれやすな」
顎を引いて、ことさら京都弁を強調して喋ってやった。こんなところで兄の名を出すわけにはいかない。第一、佐久間という同心と与五郎は、どうやら宝石に込められた妖かしの力のことは知らないらしい。こんな悪そうな輩が赤い石を悪行に利用しようと考えたら、それこそ天下の一大事だ。石のことは決して知られてはならないぞと、お亮は固く決意していた。
「口のへらねぇガキだな。よう、そっちの浪人はどうだ。生きてやがんだろ？　え？　なんとか言ったらどうなんで」
脇坂は、与五郎の挑発には乗らなかった。手傷を負った右腕を押さえながら、じっと座ったまま終始無言だった。
「けっ、痛い目をみてぇのかい」
与五郎は懐から錠を出して、牢を空けようとした。
「放っておけ、与五郎。そのうち、ベソかいて泣き言をいうだろうさ。さて、明宝（めいほう）どの、いかがなさる？」
同心・佐久間は、通路脇に隠れるようにして立っている人物のそ

ばへ移動した。どうやら、それが「明宝」と呼ばれた者らしい。
佐久間は腰の刀に手を添えた。いつでも斬れるという、意思表示のようである。
「手に入れた、いい。侍、使える。生かす、助かる」
「始末、しねぇんですかい？」
お亮からは佐久間の顔がよく見えた。横顔だったが、不審げに歪んだのがはっきり見て取れた。腰の刀に手を添えていたところを見ると、いまここでお亮と脇坂を斬ってもはばかりない、とでも思っていたのであろうか。
「与五郎、行くぞ」
佐久間は与五郎を連れ立って、牢をあとにしていった。
草履の音が、徐々に遠退く。やがて扉が閉まる音がごくごく小さく聞こえて、牢は静かになった。
「脇坂はん、なんや分かりまへんけど、うちらは生き延びたみたいですよ」
「そのようでござるな……」
脇坂は右腕を押さえたまま、辛そうに頭を項垂れた。
辺りを見回しながら、お亮は考えた。
怪我をした脇坂と、ここから抜け出すのは容易ではない。いまは生き延びたが、次も同じように助かるとは限らない。かといって、悠乃介にこの場所を教える術もない。
八方塞のような気がした。

其の四・おいたつ妖異……1

運ぶ足は足枷をつけられたように鈍かった。心の中は一刻も早くお亮の安否を知りたいと願っているのに、とてつもない不安が沸き起こってくる。

悠乃介には、自分が何に怯えているのか、真の正体が分からなかった。

お亮が手にかけられてしまったのではないかと、しんそこ心配している。心配しているが、現実そうなった時のことを、極力考えないようにしているらしいと、悠乃介は思った。

お亮がいない生活とは、どんなものだろうか。

それが悠乃介には分からない。きっと半身をもがれたようになるのではないか、ということだけは分かる。半身をもがれたら、水をもらえずに枝垂れていく花のようになるのではないかと、思えてならなかった。

襲い掛かるかもしれない、大きな喪失感が怖かった。

結局、お亮を心配しているではなくて、自分を心配しているのだと思うと、それがまた悠乃介の心を揺さぶった。

あの時に似ている。

悠乃介は歩きながらふと考えた。あの時とは、京都の大京寺を出て、初めて大倉屋に向かった日のことだ。

大倉屋に向かいながら、新しい生活を前に、今まで暮らしてきた寺での時間が失われていくように感じたものだ。

物心ついた時には、ほかの僧侶とまったく同じ生活を大京寺で送っていた。幼かったので、荒行の経験はないというだけだ。けれど不思議なことに、芳悦方丈は悠乃介を一人の子供として扱ったのである。外に出る時は、町家の子供と戯れる時間を作り、世俗の欲や学問、武芸までも厳しいほどに教えられた。

芳悦方丈は元から悠乃介を町家に戻すつもりで育てていたのだろ

うと、今は考えている。大倉屋の藤吾朗に引き合わされたのは、悠乃介が十歳の時だった。三年後、大倉屋に行くことになった。

不安だった。町家の暮らしも、親、兄妹がいる生活も、何もかも初めてである。おのれは大倉屋の役に立てるのか、藤吾朗を父と呼べるのか、兄を慕い、妹を大切にできるのだろうか。

大倉屋に行ったら、自分が何か変わってしまうんじゃないだろうか。

そう考えて出立までは読経三昧だった。結局のところ、大倉屋の役に立てるかどうかが心配だったのではなく、身をおく自分自身が馴染めるかどうかが不安であっただけだった。それが悠乃介をひたすら読経にはしらせた。

そうして大倉屋に引き取られ、お亮に会った。幼いお亮は京人形のようだった。薄紅の着物に、大きくて赤い簪。たった七つなのに、置物のように、なんと淑やかに座っているのだろう。

けれどそれはお亮のほんの一面に過ぎなかった。藤吾朗がいなくなった途端、好奇心に満ちた快活な瞳が悠乃介に向けられた。

「なぁ、何して遊ぶん？」

悠乃介の不安も心配も、お亮の一言で消し飛んだ。

そのお亮が、今どんな怖い思いをしているのだろう。

向かう足は少し速くなった。真っ直ぐ神奈川奉行所に向かっている。

横浜では、外交や関税を扱うのが運上所、行政などは神奈川奉行所が取り仕切っている。今は戸部役所と呼ばれていた。関内からは関所である吉田橋を越え、伊勢崎町から野下を過ぎ、戸部まで行かねばならない。まだまだ一足ある。大倉屋から半刻以上はかかるだろう。

ちょうど吉田橋の関所に通りかかった時、人だかりができているのを見かけた。急いでいるのでやり過ごそうと思ったが、関所の兵士たちが「役人を呼べ」といって騒いでいる。どうやら、横浜居留地と本土を隔てるために掘られた川に遺骸が浮かんでいたらしい。

背筋に悪寒が走った。それがお亮であるかもしれないと考えて、悠乃介は人だかりに近付いた。
「何があったのでございます？」
「おおよ、子供が死んでいたのよ」
野次馬の一人が、悠乃介の質問に答えてくれた。
「子供？　それはまた、可哀相なことを」
悠乃介は安堵の息を漏らしながら、話したくてウズウズしていそうな野次馬に付き合った。男は大工かなにかの職人風で、肩に大きな木箱を担いでいた。大工は太い腕で自分の首を絞める真似をしながら顔をしかめて言った。
「なんでも首を絞められて、川に捨てられてたって話でぃ。ひでぇ話だよなぁ。十二、三だ、って言うじゃねえか」
暑くもないのに悠乃介の背中に汗が伝ったようだった。お亮に付き添った丁稚は今年、十三になった。惣八の話ではいまだ帰ってきていない。まさか、と思いつつも、確認せずにはいられなかった。
「遺骸はどこにあるのですか？　今日、うちの丁稚が一人、行方知れずになっているのでございますよ」
「なんだって？」
男は眉根を寄せて兵士を呼びつけ、事の次第を話した。悠乃介は兵士とともに、まだ薄い筵の上に寝かされている遺骸と対面することとなった。
兵士の一人が、自分からは顔が見えないようにして、そっと筵を持ち上げた。
丁稚の長吉だった。顔が浮腫んで赤黒く目がこぼれ落ちそうなほど剥かれていたが、間違いない。
言葉がなかった。手を合わせて、経を口ずさんでいた。悠乃介の首が絞められているかのように苦しく痛んだ。
すぐさま兵士に大倉屋の丁稚であることを伝え、取り計らってもらえるように頼んだが、役人たちの検分がすんでいないので返せないという。

心が逸った。お亮が神奈川奉行所にとらわれているのではないかと考えていたからだ。しかし、一緒にいた丁稚の長吉が、こうして遺骸となってしまったからには話が変わってくる。

あの石に一体どのような価値があるというのであろうか。悠乃介は自問した。

無論、宝石といえば、諸外国では法外な値がつく代物だ。特に「鳩の血」という赤い石は産出が難しく希少価値があると、長崎で聞いたことがあった。武器弾薬に換えたとて、さらに釣りがくる。財政的に苦しいであろう幕府や大名にとってすれば、神仏よりもありがたい代物には違いない。

だからと言って、山本という侍を殺め、目明しを見たお亮をかどわかし、供にいた丁稚まで始末せねばならぬほどのものなのか。その前に、八人の水戸藩士も命を落としている。

赤い石はこうしている間にも、どんどん人の怨念を吸い続けている。

大京寺におられる竹香芳悦阿闍梨に、連絡を取らねばならないかもしれない。

悠乃介一人で、対処しきれる妖かしではなさそうであった。

「すまねぇが、付き添ってやってくれや」

兵士が悠乃介に申し訳なさそうに言った。兵士には悠乃介の顔が蒼白に見えたのかもしれない。

横浜大倉屋を預かる身として、巻き添えを食った長吉に付き添い、裏店に住んでいる親の長蔵に引き渡してやらねばならない。それが、主としての勤めであった。

其の四・おいたつ妖異……2

「お腹空いたなぁ」
どこか牢に逃げる隙がないかと調べながら、お亮は呟いた。昼には踊りの稽古が終わるはずだったから、このお腹の空き具合からして、今はかなり日が傾いてきたのだろう。だんだんと思考能力も低下してきた。
惣八は死ぬほど心配しているだろうな。そう思いながら、悠乃介の顔が浮かんできた。ごめんなさいと、心の中で呟いて大きな息を吐くと、お亮はついに座り込んだ。
「ちょっと休んでいたほうがいい。いざ、逃げる時に力をためておかないと」
「まぁ、脇坂はん、ええ事いわはる！」
お亮は手を打ち鳴らした。褒められた脇坂のほうが、毒気を抜かれたように目を見開いていた。ふいと、表情を緩めると、脇坂は言った。
「もう死んでもいい、と思ったが、お亮さんがいてくれると、ここから逃げられるような気がするから不思議だ」
「諦めてはったんどすか？　あきまへんえ」
牢の奥に背を預けている脇坂のところまで這って近付いた。隣に腰を下ろすと、お亮は声を低くした。
「うち、考えましてん。うちらを生かしておくのには、絶対わけがあるんどす。脇坂はんの右腕斬ったのも、刀を振れんようにするためですやろ？」
「そうかもしれぬな……」
「そいでな、脇坂はん。悠乃介兄さまは、きっとうちを見つけてくれはります。そやし、大丈夫です」
大人の女、というよりは、まだ少女といったほうが合う可憐な笑みを浮かべるお亮を、脇坂は横からまじまじと眺めた。

「問題はあの石や。あれは取り返して、早ようお寺にもって行かんとあかん……そうや、あの奥に立ってた、明宝、いう名前のお人。あの人、買弁ちゃうかと思うんやけど、どうやろうか」
「買弁？」
「そう、言葉が片言やった。妙な話し具合やったやろう？　うち、聞いたことありますねん。お店に来やはる異人さんについて来る清国のお人や。異人さんの言葉を、教えてくれはるんです」
　脇坂は感心したようにお亮を見ている。そうなると、お亮の口はますます滑らかになった。
「清国はエゲレスと戦をしやはって、負けはったんどす。で、香港、いうところを奪われはりました。次に、エゲレスは横浜にも来た。そやけど言葉が分からんから、片言でも日本語を喋れる清国の人を、連れて来はるのどす。エゲレスだけやおまへん。メリケンもフランスも、オロシアも、です」
　アヘン戦争ののち、条約によって香港はイギリスに譲渡され、支配下に置かれた。欧米列強はこぞって東南アジアの植民地化を図っているのである。日本進出もそのひとつに過ぎない。
「ということは、あの石は幕府が関わっているのではなくて、エゲレスが関わっていると？」
「さぁ、そこまではうちも分かりまへん」
　脇坂はもたれていた背をゆっくりと起こした。
「石は、横浜の栄商会から手に入れたのです」
「栄、商会？　それはどこのお店やろうか」
　首を横に振る脇坂を見て、今度はお亮が岩肌にもたれかかった。空腹なのもあったけれど、なんだかひどく疲れてきた。
「私が分からないのは、仲間をあれほど殺しておいて、私を生かしておいていることです。石が欲しいなら、奪えばそれですむ。奪って売れば、多額の金子か、武器弾薬に変わるはずだ。そうでしょう？」
　脇坂の声には深い怒りが込められていた。怒りをかみ殺すような

声が、お亮の心を揺さぶって鷲掴みにする。
脇坂が水戸藩士であることも、宝石の原石である赤い石を武器弾薬に変えようとしたことも聞かされた。神奈川奉行所の同心が関わっていると聞かされて、幕府が水戸藩の財政が潤うのを厭って横槍を入れているのかもしれないと考えたことも聞いた。
「とにかく脇坂はん。生きてんのやから、逃げましょうな！　絶対どす。悠乃介兄さまが、きっと探しておくれですさかい、どうもあらしまへん」
お亮は小首を傾げて、陽の光をいっぱい浴びた向日葵の如く溌剌と微笑んだ。そうすればきっと、脇坂の心が和むと思ったからだ。思ったとおり、脇坂も薄い笑みを口元にたたえた。
「大倉屋の若旦那さんは、すごい人ですね。お祓い、とやらをしている時のあの人は、本当にすごかった。体が軽くなったんですよ、ぐっすり眠ってすっきりしたみたいに」
「そうですやろ」
お亮は胸を張った。自分が褒められたわけでもないのに、ひどく嬉しい。
湿気って冷えた牢の中にいるというのに、気持ちだけならもう助かったようなものだった。

其の四・おいたつ妖異……3

結局、悠乃介が大倉屋に戻ったのは七つ時（夕方四時頃）だった。吉田橋関所の兵士と野次馬だった職人風の男に助けられ、荷車を借りて変わり果てた姿となった長吉を運んだ。

兵士や男には、のちほどお礼をすると名を聞き、お店の前で別れた。

「惣八、いま帰りました」

暖簾をくぐった途端、惣八が慌て転ぶように駆け寄ってきた。すっかり顔の色を失い、つるりと丸い額には粒のような汗をかいている。

「若旦那はん！　待っておりましたんや」

駆け寄ってすぐ、悠乃介の後ろにある荷車に目を止めて、息をのんだ。

「それは、もしや長吉でおますか？」

「何故、それを――」

言いかけて、お店の奥に一人の男が座っているのが目にとまった。瞬間、悠乃介の周りの空気が凍りついたかと思った。

黒い紋付羽織に着流し姿だ。腰のものは、きちんと揃えて右側に置いていた。鋭い目付きの男だった。餌に餓えた野犬のようであった。細い顔に浮かんだかすかな笑みすら、獲物に狙いを定めた蛇のような粘着さを感じさせる。

いや、背にとり憑いている黒い影が、悠乃介を硬直させたのである。

脇坂についていた小鬼の比ではない。小鬼は人の指ほどしかなかったが、今度は三歳くらいの子供ほどの大きさに成長していた。それが男の頭に齧り付くようにして精気を吸っている。

惣八が、同心のほうを見て、腰を低くした。

「お奉行所の同心のお方です。さっき、来てくれはって、若旦那さ

んをお待ちどしたんです。長吉が亡くなって、お嬢さんがかどわかされたのだと」
言葉を切って、惣八は糸の切れた人形のようにその場に座り込んでしまった。
悠乃介は、この男こそが、お亮の見た同心であると直感した。
「惣八、長蔵には知らせてあるんだね。あとで私が説明するから、まずは長吉を運んでやってくれないか」
「へえ……」
惣八は目尻の涙を拭いながら手代たちに指示をして、長吉を裏店に運んでやるように指示した。
お亮が同心の元にいるのは、間違いなさそうだ。大方、石の事を知っている人間を探りに来たに違いない。ということはつまり、脇坂に何かがあって、手渡した書状からすでに大倉屋のことが敵に知れているのではないかと考えていた。目明しがリズリーサーカスで見かけたお亮の後をつけたと考えるよりは、はるかに理にかなっている。
脇坂が捕らわれ、大倉屋・竹邦悠膳の名が記された書状をみたからこそ、ここへ来たのだ。運悪く目明しが大倉屋に来た時に、リズリーサーカスで騒いだお亮を見たとすれば、かどわかされた理由も得心がゆく。
悠乃介は背筋を伸ばして、同心に頭を下げた。
「私が横浜大倉屋の主人、悠乃介でございます。えらくお待たせいたしました」
紋付姿の同心が刀を手に立ち上がって、わずかに頭を下げた。
「神奈川奉行所、定町廻り同心、佐久間影秋と申す。いくつか、お伺いしたい儀がござってな」
そう言って佐久間は微笑んだ。それだけで悠乃介の足元から冷気が舞い込んできたようだった。
お店で、というわけにもいかないので、佐久間を奥へ通すとしばらく待たせた。下女にお茶の用意を依頼しておいて、悠乃介は一旦、

自室に戻った。
手ぶらでいては危険だと考えた。
袖の中に数珠を隠し、曼荼羅を懐に仕舞いこんだ。小鬼くらいなら、隙を見て簡単に払うことができるかもしれない。
息を整え、大日如来のもとで心経を唱えてから、悠乃介は部屋を出た。
佐久間は微動だにせずに待っていた。
「お待たせいたしました。さっそくご用件を伺います」
八畳二間続きになっている客間の上座に、佐久間は一糸乱れずに正座している。悠乃介は少し間をとって座った。
「ではお伺いしよう。竹邦悠膳どの、とやらに、会いに参った」
思ったとおりだ。その名を知るのは、赤い宝石を収めた箱へともに入れた書状を見た者だけだ。惣八すら、悠乃介の法名を知らないのである。
脇坂重三郎も佐久間の手にある、ということに相違ない。
悠乃介は腹を括って一切の表情を絶った。
「竹邦悠膳に、どのようなご用件がおありでしょうか」
「そなたには関係ない。いや、そなたも知っているのであるな、そう言うのなら。知らねば、即座に竹邦悠膳と引き合わすはず」
後ろの鬼が笑ったように思えた。今はまだ、鬼の顔は定かでない。悪鬼幽鬼の類は、たいてい固定した姿を持たない霊体だ。見るものの先入観と知識によって姿形が変わっていく。例えば錦絵にあるような、角が生え、口が裂けた鬼を意識すれば、自ずととり憑く鬼もそのような姿に見える。
佐久間影秋の後にとり憑く小鬼は、戯れるように頭から胸に回り、飽きることなく精気をしゃぶり尽くしていた。
「答えぬのか。ならばそれはそれで良いぞ」
佐久間は笑い始めた。肩を揺らしている。
「番頭の話では、そちはあの小娘の兄だそうな。ほお、頑固そうなところは、まるで瓜二つであるな」

右脇に置いていた刀に手を伸ばす。右手で鞘を握り締めると、佐久間は音もたてずに左手で刀を抜いた。
左利きであったか……悠乃介は心中で舌打ちした。
「ここで御腰の物を振り回して、いかがなさる？　私が斬られれば、すぐさま家のものが参りましょう。貴方さまは、罪無き町人をお斬りになったと、手が後に回りますよ」
「やってみるか？」
残忍な笑みがためらいなく佐久間の顔に浮かんだ。
もはやどんな脅しも効かないことを悠乃介は知った。佐久間は神奈川奉行所では顔が利くに違いない。神奈川奉行かさらにその上の外国奉行、もしくは老中あたりに後始末の得意な者がいるのだろう。
それに商人すら粛清の対象となるご時勢だ。町家の人間が一人斬られたからといって、お調べが進むとは思えない。
日が翳って薄暗い部屋に、白刃が鈍い光を放った。
「摩訶般若波羅蜜多心経……」
経を唱えながら、悠乃介は手の数珠を握り締めた。低い声で呟く念仏が、部屋の中に充満していく。
「ほお……思ったとおりだ。そうか、やはりお前が竹邦悠膳というわけか。それなら話は早い。賊が無礼を働いたと、一刀両断するまで」
佐久間は刀を斜に構えた。一縷の隙もない。
空気が針の穴があくことすら許さぬくらい、張り詰めた。
悠乃介は、芳悦方丈の計らいで一通り剣術も身につけた。藤吾朗はその筋に感心し、引き取ってからも道場に通わせてくれていた。おかげで同年の武家の子供には、けして引けをとらない腕前である。町人でなければ指南役さえ務まると、道場主は褒めた。
しかしそれは、本格的に商いに携わる前の話だ。真剣は言うに及ばず、木刀でさえここ何年も握っていない。
数珠を握り締めた左手を顔の前にかざし、少しずつ佐久間の気に圧されていく。

「さぁ、どうした、竹邦悠膳よ。さて、命をとる前にひとつ聞いておこう。例の物、なぜ寺におさめねばならん？」
「書状をお読みであろう？　書いたとおりです。現に佐久間殿、貴方も悪鬼に憑かれている。そのうち、精気を食い尽くされ、廃人になるのがおち。今のうちに手をうっておかれたが、得策でございますよ。なんなら、私がお祓いして差し上げますが」
「知ったような口を利く」
佐久間は言い終わらないうちに、素早い動きで足を踏み込んできた。紫電が一閃し、悠乃介の袂を裂いた。
「アビラウンケンソワカ……」
「くどい！」
左から斬り込んだ刀をすぐに返し、今度は右下から斬りあげてくる。
悠乃介は剣先を避けてしゃがみ込み、がら空きになった佐久間の左腰に下がる刀の鞘に手を伸ばして引き抜いた。すぐさま刀は頭上から振ってくる。
間一髪、鞘で刀を防いだ悠乃介は、佐久間の太刀を跳ね上げた。
ここで佐久間の顔色が変わった。
竹邦悠膳が、ただの商人ではなく、はたまた、ただの坊主でもないことに気付いたらしい。足を後ろに引き、さがって体勢を立て直した。
「若旦那さん、なんやら物音がしましたけど」
少し幼い声が障子の向こうから聞こえた。丁稚の一人が、刀を弾く音を聞きつけてやってきたらしい。そっと障子に手をかけようとしているのがちらりと見えた。思わず「開けてはならん！」と叫んでいた。
悠乃介が障子に気をとられたわずかな間隙を、佐久間は突いてきた。再び踏み込んで振り下ろされた刀先は、悠乃介の右腕を掠める。
「アビラウンケンソワカ……」
飛び散る血飛沫を気にも留めず、数珠を持った左手の指を二本た

て、空中に円を描いた。素早くその中心を指で貫く。
「臨・兵・闘・者・皆・陣・裂・在・前！」
一瞬、佐久間が怯んだ。憑いている悪鬼が怯えたといったほうが正しい。悪鬼は両手の爪を立て、佐久間の顔をわしづかみにしている。両足が首に巻きつき、身体を後ろに引いたので、佐久間がよろけた。
悠乃介は九印を切りながら、背筋を伸ばして悪鬼と対峙した。
「オン・ケンバヤ・ケンバヤソワカ」
大きな気合の声が、部屋を慟哭した。佐久間は右手で顔面を多い、なにかの苦痛に耐えるように身体を傾げた。しかし、なおも左手の刀を持ち上げようと試みている。
「そこから出ておゆきなさい。お前の住む場所ではない。出てゆくか、さもなくば、消してしまおうぞ」
佐久間にしがみ付いている悪鬼が、初めて目を開けた。一つ目だった。赤い、勾玉のような目だ。目は、赤い宝石の邪眼と繋がっているに相違ない。激しい怒りが、陽炎のように目の中で揺らめき燃え立っている。狼をはるかに凌ぐ鋭い二本の犬歯を大きく剥き出して悠乃介を脅しつけてきた。
「そのような脅しは効きません」
九印を結びながら、真言を唱え続ける。
佐久間は苦しげに片膝をついた。
「おのれ、わが身に、一体なにを施した……」
かすれた声が、佐久間の口から搾り出されるようにして漏れた。
苦痛に抗って身を起こした佐久間は、両手で刀を握りなおして力任せに振り上げた。勢い余って、刀は天井に深々と突き刺さった。
刀を引き抜こうとした途端、佐久間は突然胸を押さえて身体を二つに折った。眉間に深い溝を作りながら、なんとか天井に突き立ったままの刀を引き抜こうと手を伸ばしたが、そのまま倒れこむ。
「ぐふぇぇ！」
内蔵をすべて吐き出したのではないかと思うほど、佐久間は嘔吐

いた。
「おのれ……」
喉を掻き毟って畳の上で悶絶する佐久間に向かって、真言が唱え続けられた。
佐久間にとり憑いた鬼は、次第に影を薄くしていった。鷲掴みにしていた爪が緩み、目が閉じられていく。
何度目かの気合の声とともに、蒸気が空中に吸い込まれていくように、小鬼は消滅していった。
さすがの悠乃介も、片膝をついた。斬られた右腕の痛みが、悪鬼を退散させると途端に襲ってきた。
「な、なにが起こった……」
佐久間が粗い息を吐きながら、気丈にも立ち上がって袖で口元を拭うと、天井に刺さった刀を引き抜いた。
「貴様……」
「ですから、申し上げましたよ。貴方には、すでに赤い石の邪気が入り込んでいる。石に触れるか、眺めるか……いや、石に施した封印を解きましたね、愚かしい……」
佐久間は悠乃介を睨み上げた。
足元に鞘を投げやると、目もくれずに刀をまた悠乃介に差し向けてきた。
ちょうどそこで、「坊ちゃん！」という叫び声とともに、荒々しく障子が開き、手に包丁を携えた惣八が現れた。後ろには手代たちが、思いつくままの武器を手にして立っていた。大方、ただならぬ悠乃介の声を聞いた丁稚が、惣八を呼びに行ったのだろう。
かなり間が悪かった。
悠乃介は血まみれの右腕を抑えながら片膝をついていたし、佐久間は刀を悠乃介に差し向けており、般若の如き形相であった。
「悠乃介坊ちゃんに、何をしはりますんや！」
包丁を突き出して怒鳴り散らす惣八に、佐久間は舌打ちをして刀を鞘に戻し、踵を返した。大地震でも起こったのではないかと思う

ような、大きな足音を立てながら佐久間は部屋を出て行った。惣八もしばらく包丁を佐久間に向けていたが、大きく嘆息して駆け寄ってきた。
「坊ちゃん、良かった、もう生きた心地がしまへんでしたわ……」
「すまなかったね。みんなも、仕事に戻っておくれ。あとでちゃんと説明するから」
悠乃介は畳を駄目にしてしまったことを詫び、惣八を伴って部屋に戻った。
血で汚れた着物を替え、うしろで束ねていた髪を惣八が整えてくれた。惣八の顔面に血の気が戻り、額の汗がひいたところで悠乃介は口を開いた。
「頼まれてくれるかな。どうやらお亮は、さっきの同心にかどわかされたらしいんだよ」
惣八は小粒な目を見開いた。
「同心が、ですか！」
悠乃介は簡単に、今までの経緯を惣八に話して聞かせた。
数日前に、お亮が荷物を預かったこと。今朝、旅立った脇坂が荷物とともに行方知れずであること。荷物は、金に換えると大量の武器弾薬になること。その荷を見た悠乃介をも消そうとやってきたこと。細かいことは抜きにして、お亮の身が危ないことを強調した。
「早飛脚を頼むよ。ひとつは、親父さまに、もうひとつは大京寺の方丈さまに。急いで文をしたためるから、手配してもらえるかい？」
「そりゃもう、早急に。そやけど、お嬢さんはどうなりますんや？奉行所に届けても、あきまへんわなぁ。さっきのお武家さんも、役人さんのようやでなぁ」
惣八の広い額に、また汗が滲んできたらしい。懐から手ぬぐいを出すと、額から頭を拭った。それでも不安らしく、背中が丸くなった。手ぬぐいを握り締めたり絞ったりして弄びながら、独り言のように呟き始めた。歳を重ねて、惣八もくどくなったようだ。
「そやし、お嬢さんをお店に出すのんが嫌でしたんや。なんやかん

やと、厄介ごとをもちこまはる。そのたんびに、あての寿命が縮まっていく思いですわ。ああ、今ごろ泣いてはるんと違いますやろうか」
「惣八は、お亮が泣いていると思うかい？」
手ぬぐいを弄ぶ手が、はたと止まった。
「思えまへんな……無事でいやはるのでしたら、逃げる算段をしているか、引っかき傷のひとつでも、つけておいでかもしれまへん」
冗談めかして話しているが、惣八の顔はひとつも笑っていなかった。
お亮が泣いているとは思わない。泣いて、助けを大人しく待っていてくれたほうが、どれだけ助かるかしれないというものだ。
最も恐れるのは、悠乃介のそばを離れて石に近付き、悪鬼にたかられていないかどうかであった。お亮の心根は純粋であるから、そうそう魑魅魍魎が好んで寄ってくるとは考えにくい。だが絶対大丈夫だとはいえない。
確実に、赤い石の力は大きくなっている。人の怨念を吸い込む邪眼が、石のまわりで起こる憎しみや怨念を吸い取ってゆく。佐久間影秋にとり憑いていた悪鬼は、脇坂の子鬼よりもはるかに強かった。
「そうだ、もうひとつ、お亮を助けるために惣八にお願いしよう」
「なんでもやりますで」
「町年寄りの石川徳右衛門さんを訪ねておくれでないかい？　そこで、横浜に栄商会というお店があるかどうか、聞いてきて欲しいんだよ」
「それが、なんぞ関係あるんですか？」
「あるんだと思うよ。どこにお店があるのかを、調べて欲しい。だけどね、惣八。栄商会を見つけても、お店に近付いちゃいけない。調べていることを知られては、お亮の身が危ないかもしれないからね」
惣八は生唾をのみ込んで肯いた。
お亮が危ないと聞かされては、惣八は誰かに「行け」と言われて

も、絶対に栄商会に近付くことはないだろう。
目明しと同心に気をとられ、神奈川奉行所だけに目をつけていては、真実を見誤るかもしれない。石の出所である、栄商会を調べてみる必要がある。
佐久間影秋は、石が妖かしであることを知らなかった。普通の人間には、当然分からないことであるのだから、知らなくても当たり前ではある。
何かが、喉に魚の小骨が刺さりこんだのに似て、悠乃介の心にひっかかっていた。
石を武器弾薬に変えるだけなら、こうも見た人間を次々に始末していく必要などどこにもありはしない。奪ったなら、すぐさま売る手配をするほうが、人を斬って回るという危険を冒すよりも手っ取り早い。それとも、最も秘密裏に事を運ばねばならぬとでもいうのであろうか。
悠乃介は、斬られた右腕をさすった。
今はただ、お亮の無事を神仏に祈るほかなかった。

＊

お亮は夢を見ていた。
京都に降り積もった真っ白な雪と同じ、白無垢を身につけた自分の夢だった。父・藤吾朗を前に、畳に手をつき頭を下げている。それで、今まで育ててもらった礼を言っていた。
藤吾朗はお亮に幸せになるのだぞと言っている。同心の奥方になるからには、今まで以上にしっかりせねばならないぞと、延々説教を始めた。
説教を半分以上は耳から外に流しながらうんざりして振り向くと、紋付袴で座っている者がいる。
夫となるのは悠乃介か、と、喜び勇んで立ち上がって顔を見ると、違っていた。

細面で、山で餌をあさる餓えた犬のような顔をした侍だった。
「佐久間！」
自分の叫び声で、お亮は目を覚ました。
「お亮さん、どうしました」
脇坂がお亮の肩を揺さぶった。目を開けると、相変わらず薄暗くて、遠くで蝋燭が一本揺れている。それなのに、とても心地よく眠っていたらしかった。腰の辺りは傷むが、頭は暖かくて、少しごつごつした物を枕に、ぐっすり眠っていたらしい。
はっと我にかえると、脇坂の膝を借りていたことに気付いて飛び起きた。
「すんまへん！　うち、いつの間にか眠ってしもうて……」
慌てて謝るお亮に、脇坂は堪えるようにして低く笑った。
「ちっともかまいやしない。よく眠っていたよ」
「ほんま、すんまへん」
脇坂の隣に座って、水戸藩の話を聞くうちに眠っていたようだった。囚われているというのに、我ながら度胸があると感心する。
「ここに入れられて、随分経つような気がする」
「手は、どないです？」
「疼くのは、かなり良くなったようだよ、悪いね、心配をかける」
お亮は首を横に振った。
薄暗い牢の中で、脇坂の横顔が見える。端整な顔だった。もちろん、悠乃介にはとうてい叶わない。けれど、強い意志のあるしっかりした目で前を見据え、薄い唇をしっかり結んでいる顔は、とても凛々しくて頼もしかった。こういう顔を男らしいと言うのかもしれないと、お亮は考えていた。悠乃介の柔らかな綺麗さとは、正反対だ。
「お亮さんが眠っている間、いろいろ考えてみましてね。山本は何故、関内に入って、大倉屋さんに宝石を預けたのか、と、ね」
関内とは、横浜の居留地を含む一帯のことだ。周囲には堀がめぐらされ、橋が架かって関所まである。

「坂部と私と、山本の三人になって、坂部が殺られ、私とはぐれ、山本は私も死んだと思ったのかもしれない……江戸まで行く危険を冒すより、すぐそばに、宝石を仲介してくれる栄商会がある……そう考えたとしたらどうだろうか」
「ああ、そうかもしれまへんなぁ。追われる身ぃになって、栄商会はんから宝石の情報がどこぞへ漏れたんと違うかと、直接聞きに行かはるおつもりやったんかもしれまへん」
「あの時は、過激派の藤田小四郎殿あたりが疑わしい、と話していたこともありましたから……」
脇坂は言葉を切って、また何かを考えているようだった。
脇坂の顔に深い闇が落ちてきたようだった。心中には、幕府に対する疑念が渦巻き、栄商会に対する不審が沸き起こっているのであろう。多くの友を失い、今また自らが命の危険に晒されている。
「誰か来た」
脇坂が声を落としたので、お亮も耳を澄ました。足音が聞こえた。
女だった。
薄闇に溶け込みそうな着物を身につけている。結い上げた髪からは後れ毛がおち、口元の紅がとても綺麗に引かれている。少し肩を落として立つ姿まで、女の色香が臭い立つように艶めかしく思えた。
どこかで見た顔だった。瓜実顔の、美人だった。島原や吉原にいれば、花魁として座っていてもいいくらいに思えた。
「着替えだよ」
女は風呂敷包みを牢の隙間からねじ込んできた。押し込まれた風呂敷包みは音をたてて床に落ちた。
「それとこれは、おむすびだよ。毒は入ってないから、食べておくといい」と言って、そっと牢の隙間からなるべく形を崩さないように包みを押し込んだ。そのままじっと、お亮と脇坂を観察していた女は、ふいと立ち上がって懐から牢の鍵を出してちらつかせた。
「手伝おうか？　あんた、伊達締めを解いちまってるじゃないか」
声も聞きよかった。三味線でも持って歌えば、小判を払っても惜

しくない歌声が聴けるのではないかとすら思える。
「何故、着替えが必要なのだ」
お亮が何か言う前に、脇坂が庇うようにして体を動かした。女はそれを見て、鼻で笑った。
「何が可笑しい？」
「いや、別に。あたしゃ、頼まれただけだからね。別に、あんたたちに、何の縁もありゃしない。期待したって無駄だよ。助けにきたわけじゃ、ないからね」
女はそう言うと踵を返した。
「待て、この子を返してやってくれ。この人は何の関係もない」
「しつこいね、あたしゃ、関係ないって言ってんじゃないか」
立ち止まって睨みを利かせた女は、行きかけていた足を戻して牢のそばまでやってきた。
「忘れてたよ。夜が更けたら、ここを出立するからね。ちゃんと着替えをしておくんだよ」
「どこへ、連れて行くつもりだ！　この人を――」
「煩いね」
女は脇坂の言葉を遮り「旅支度をしておけばいいんだよ」と言って、足早に牢を出て行った。
岩牢は、また静かになった。
「旅支度だって」
「致し方ない。刃向かうのは、得策ではないと思うのだが、どうであろうか」
お亮は大きく肯いた。
「ここから出られるんやったら、それに越したことはありまへん。逃げる隙が、できる、ってもんです」
胸を張って立ち上がり、牢内に投げ込まれた風呂敷包みを解いてみた。武家の装束と、女物の着物、手甲と脚絆が揃っていた。
それよりも、今はおむすびのほうが先だった。手にとるとまだ暖かい。握りたてらしい。子憎たらしい女だったが、お亮はしんそこ

感謝した。

其の五・朦朧とする妖異……1

「小娘まで着替えをしたのか」
牢の前に立つなり、目明しの与五郎はまるで厄介な荷物でも背負ったみたいに口をゆがめて呟いた。
脇坂もお亮も、ついさっき女が持ってきた着物や旅装束に着替えている。
湿気た牢にいたせいかきていた着物は薄汚れていたし、伊達締めは脇坂の右腕の傷を縛るのに使っていたので、着替えて本当にすっきりはした。おむすびのおかげで、お腹も少し満足した。けれどもお亮の機嫌はすこぶる悪い。なんせお亮の着物は古臭い辛子地の縞木綿の小袖だった。花鳥風月の華やかな京風の着物に囲まれて育ってきたお亮には、かなり不満だった。わずかばかり頬が膨らみ、口が尖っていたのは致し方ない。
一方、脇坂の右腕の傷はかんばしくない。出血のほうは止まってきたようだったが、お亮の伊達締めはすっかり血で汚れていた。
「菊野姉さんも余計なことをする」
与五郎は文句を言いながら懐から錠を出して、牢の鍵を開けた。
「出な」
顎をしゃくって出るように促す与五郎に、脇坂とお亮は顔を見合わせた。が、当初の考え通り、外に出て逃げる機会を待つために素直に腰をあげた。
「おっと、そっちの小娘は居残りだ」
「ならば、私も行かん」
脇坂は確固たる意思を与五郎に伝えるためか、少々強い口調で言った。与五郎は怒りに震えてか目を剥いた。
「なに言ってやがんでぇ。小娘には用はねぇんだ。佐久間の旦那なんか、かんかんだぜ。これ以上旦那を怒らせたら、お店の一つや二つ、潰れっちまうぜ？　始末するように言い付かってんだ、文句い

わねぇで、おめぇだけ出やがれ」
「それはできん。私はお亮さんを守る義務がある。お亮さんに手をかけるつもりなら、私はお前たちの言うことなど聞きはしないし、ここで腹を切る覚悟でおる」
きっぱりとした言いようだった。聞いていて気持ちのいいくらいだ。
お亮は拍手喝采を送りたい気分だった。与五郎の顔が、見た目にも分かるほど歪んだからでもある。はて、困った、と舌打ちをし、眉根を寄せている与五郎をみていると、思いっきり舌を出してやりたかった。
牢の中に入っておらず、立場が囚われの身でさえなければ「ざまあみろ」と言って囃し立てていたとすら思う。
けれど与五郎が困った様子であったのは、わずかな間だった。すぐにフンと笑うとこう言った。
「なるほど、おめえにはこの小娘が弁慶の泣き所、ってぇわけだ。そりゃいい。それなら佐久間の旦那だって、許してくださるってもんさ」
お亮は急に足が震えてきた。自分が脇坂の荷物になってしまったのだと思い知らされたのだ。今後、どんな無理難題を突きつけられても、お亮の命と引き換えだといわれたら、脇坂はきかずにはおられなくなってしまう。牢から出ることができても状況が良くなったとは言いがたいらしい。
与五郎が牢の扉を大きく開け放ち、再び出るように促した。
脇坂とお亮は、お互い一度だけ目を見合わせて合図し、狭い牢から外に出た。
牢の外は大方の予想通り、左側に向って通路が伸び、数段の階段があって扉がついていた。からくり屋敷のようにも見えた。噂に聞く、忍者が使いそうな地下牢である。なにかの所以あって造られた家か屋敷に違いない。お亮は辺りの観察も怠らなかった。
と、脇坂が立ちどまった。

「待て、お前たちの言うことを聞く前に、ひとつだけ教えてくれ」
「ごちゃごちゃと、うるせぇ奴だな」
「先だって、大倉屋の近くで殺められていた侍を殺ったのは、お前か」
　与五郎が扉の前で足を止めて振り返った。小さな傷とともに片眉が上がり、小馬鹿にしたように脇坂を冷ややかな目でじろりと眺めやった。
「なんで、わしが殺らなきゃならねぇんだ」
「匕首で、一突きだったと聞いた」
「しらねえよ」
　脇坂は絶対ひかぬとでも言いたげに、執拗に与五郎に迫った。
「では、下田を出たあと、私の仲間を殺ったのも、お前だな」
「しらねえ、って言ってんだろうが、しつけぇな。わしらが、関内に入り込んだ賊を捕まえろ、と言われたのは、殺された侍が来る一日前でぇ。賊を探してたら、うめぇこと殺されて見付かった、ってだけだ」
「では、なぜ、私が大倉屋から出て江戸に向かったと知ったのだ」
「しらねえって言ってんじゃねえか。お前を連れてきたのは、俺たちじゃねぇ」
「では――」
「うるせぃやい、死にてぇのか」
　与五郎は投げやりに喚きたて、懐に入れた腕を少し引き出して匕首をちらつかせた。
　お亮の頭の中は一体いま何を聞いたのかすっかり混乱していた。てっきり、山本を殺めたのはこの与五郎という目明しだと決め付けていたからだ。それで、同心・佐久間と結託し、栄商会から賄賂でももらって、あくどい商売に手を貸しているのだとばかり思っていた。それが一番筋が通っていたし、お亮は与五郎と佐久間の悪人面を理由に、二人が下手人だとすっかり決めつけていたところもあった。

水戸藩に宝石を売ると見せかけて金子を払わせ、途中で奪って幕府に売れば、余計な利益が計上できる。自分たちが危ないことをしているのだから、知っている人間が居ては困る。だからお亮もかどわかしたし、脇坂も捕らえたのだと、心底、そう考えていた。

どうやらお亮の考えは、根底から覆されてしまったらしい。

与五郎は「面倒くせぇ」と何度も呟きながら歩いた。

地下牢の扉を開けると、湿気臭くて狭い部屋に出た。そこで懐から手ぬぐいを出した与五郎は、脇坂とお亮に目隠しをした。

「なにすんの！」

暴れようとしたお亮を脇坂が諌め、仕方なく目隠しをされた。けれども「これ以上何かやったら、承知せぇへんよ」と叫ぶお亮はついに猿ぐつわもかまされてしまった。与五郎を引っ掻いてやりたい気分だったが、そんな事をしたら脇坂に迷惑がかかるかもしれないと思って、なんとか思い止まった。

手を縛られて、引きずられるようにわずかばかり歩かされ、突然背中を押されて、狭い籠に蹴りいれられた。

「何故、始末せなんだ？　あの胸糞悪い男の妹だろうが」

「すんません。そっちの侍は、この方が言うことを聞きやすいらしいんで」

一人は、どうやら同心・佐久間影秋の声らしい。

外の声に聞き耳を立てながら、お亮は考えていた。

話の流れから察するに「胸糞悪い男」とは、悠乃介のことかもしれない。佐久間はすでに、大倉屋にまで行ったのだ。行って、竹邦悠膳の正体を確かめた。とすれば、悠乃介は一体どうしたのだろうか。佐久間があのように言うのだから、おおかた悠乃介に巧く丸め込まれたか、軽くあしらわれたか、そのどちらかだろう。

悠乃介兄さまに勝てるわけあらへん……

お亮は心の中で思いっきり舌を出した。

「関内を出たら、真っ直ぐ水戸に向かえ。よいな」

「分かりやした」

――水戸？

隣の籠に押込められている脇坂も、与五郎と佐久間の会話を耳にしたであろうか。脇坂を水戸に返して何をするつもりなのか、お亮には皆目検討もつかなかった。

お亮は音をたてないように手を動かしてもがいてみたが、縛った縄が解けるわけもない。

けれども何とか、ここに自分がいたことを悠乃介に知らせねばならない。

髪には、悠乃介が長崎から買ってきてくれた櫛がさしてある。嬉しくて、もらってからずっとつけていた。他の髪飾りなら、お亮のものかどうか判断できまいが、これなら間違うことはない。せっかくの土産をこんなことに使うなんて、と、お亮を迷わせはしたが、一時の情にかられて絶好の機会を逃す手はないと決意した。

身をよじって頭を狭い籠の中にこすりつけた。何度かするうちに、何かが頭の上から膝に落ちてきた。

頭にさしているのは悠乃介に買ってもらった櫛だけだ。

さて、これをどこに落としておくか……。

そうこうするうちに籠が揺れて動き出した。

お亮は全身で外の気配と音を感じ取ろうとした。櫛を落とす場所を間違えてしまったら、一貫の終わりだ。

どうやら籠は、無理やり狭い家の中を通っているらしかった。隙間からわずかに灯りが差し込んできた様な気がする。

しばらくすると、籠を担いでいる者が、一段降り、同時に籠も揺れた。

外に出るのかもしれない。

籠担ぎの者が草履を履く気配だ。

膝にのっていたものを身をよじって落とす。それがどこに落ちたかなど、お亮は知る由もないが、あとは祈るばかりだ。

気付かれたのではないかという危惧はあったが、すぐに籠は揺れて動き始めた。

格子戸の開く音がして、籠がどうやら外に出たらしい。
お亮はめったに祈らない神さま仏さまに、うんと心の中で手を合わせた。

其の五・朦朧とする妖異……2

悠乃介は文机でうたた寝をしたくらいで、暁のころまでほとんど寝付けなかった。

昨日のうちに、大京寺の方丈と大倉屋・藤吾朗に書状をしたため、早飛脚に依頼した。手元に届くには、三日ないし四日の日数がかかる。さらに、竹香方丈からの返事は、同じだけの日数を待たねばならない。

最悪、竹香方丈の神通力に頼ることになるかもしれないが、それまでの間は悠乃介一人で対処してゆくほかない。

お亮と脇坂重三郎の監禁先もいまだ不明だ。

一方、惣八は悠乃介が書状をしたためている間に、早飛脚の手配と、町年寄の石川を訪ねてくれたらしかった。

石川徳右衛門の覚え書きによれば、栄商会は港に程近い裏店に店を出す小間物屋らしい。店主の届けは、栄屋・正治となっているという。関内の居留地と西波止場の運上所が目と鼻の先だった。もとは運上所の役人の休息所のような屋敷であったらしい。それを正治が買い取ったのが数年前だということだった。

悠乃介はお店が開く前に、一人で大倉屋を出た。惣八に言えば、一人では行かせぬというに決まっている。しかし、丁稚の長吉がすでに亡くなってしまい、これ以上大倉屋の者から死者が出るのは、主としても許すことができなかった。

袖の下には、数珠が隠されている。

お亮を助けるためなら自らの命を捨てる覚悟で、身辺の整頓をしてきた。

大倉屋藤吾朗には、その旨を書状にしたためてある。

血の繋がらない悠乃介に店をひとつ任せてもらったこと、大切に育ててもらったことに対する礼を、丁寧にしたためた。あのまま大京寺にいれば、けして見ることのできなかった広い世界を、藤吾朗

のおかげで知ることが叶った。
藤吾朗が店の骨董品よりもはるかに大切に可愛がっているお亮だ。無傷で、藤吾朗に返さねばならない。
歩きながら、思い出すのはお亮の笑い顔ばかりだった。
土産の簪を嬉しそうに差す顔。カステラや白玉を、頬を高潮させながら食べる顔。サーカスを興奮して楽しむ顔。
どれも愛しい顔ばかりだ。
お亮の顔を思い浮かべながら、まだ人の少ない早朝の通りを小半時も歩かず、目当てのお店はすぐに見付かった。
異国の息がかかった貿易商会の大店や、両替商が立ち並ぶ一角にある、本当に小さな店だった。間口が二間ほど、あるかないかという所だ。
確かに看板には「小間物・栄商会」とある。
店の入り口の脇には、ガラス張りの棚に小間物が並んでいた。
簪や櫛、笄などや組紐、この時代ではまだ珍しい懐中時計なども展示されている。
悠乃介の目を引いたのは、並んでいる商品の種類ではない。櫛には、赤や緑の石が埋め込まれていた。水晶とはまったく違う輝きをもっている。鼈甲や象牙の櫛とは、明らかに異なる商品が陳列されていた。
宝石である。日本にはまだ、翡翠、メノウ、琥珀などしか存在しておらず、宝石の価値を知るのもが少ない時代だ。
栄商会の仲介によって、水戸藩は宝石の原石を手に入れ、フランスの商会から武器弾薬を受け取る手はずであったという。栄商会が妖かしの石に関わっているとするなら、目的は金子以外には考えられない。異国から安く手に入れた原石を、水戸藩に高く売りつけ、差額を利益としてあげる算段である。武器を輸出するフランスにしても、噂では粗悪品や中古品が混じっているとの事であるから、原石と交換するのなら悪い商売でもない。さらに栄商会には仲介料も入る。

栄商会の腹は、少しも痛むことがないようになっている。
もしくは、幕府と水戸藩を天秤にかけ、良い値で引き取るほうをあくどく詮索しているとも考えられた。
問題は、原石が妖かしまじりである、ということだ。邪眼を持ち、悪鬼を呼んでしまうがゆえに、人の邪念が大きく膨らんで絡みつくのかもしれない。
悠乃介は、息を整えて栄商会の暖簾をくぐった。
「ごめんください」
声をかけると、すぐさま奥から駆け出す足音が聞こえてきた。
「あれ、まだお店は開けてませんよ」
耳に心地よい声だった。小鳥が歌を口ずさむように軽やかに聞こえる。奥の暖簾を持ち上げて、現れたのは女だった。
見目良い女だった。黒い着物に金糸で模様が縫い込まれている。京都で言えば、芸子のようにも見えた。瓜実顔には綺麗に化粧が施され、唇には赤い紅が薄くさされている。小首を傾げると、後れ毛がうなじに落ちて、傾けた体の線が丸みを帯びて艶かしかった。年のころは二十代も後半だろうが、熟れきった果実のような婀娜っぽさがある。
どこかで見た顔だ。とっさに悠乃介も考えた。
「何の御用ですか？」
「……いそぎ、人に贈りたい櫛がありまして」
女は愛想よく微笑むと、抱えて運ばなく手はならないほどの木箱を持って店先に歩みでた。
「ここに買いに来るなんて、お目が高いですわ。つい先日、入った物ですのよ」
開いた木箱には、象牙や鼈甲の精緻な彫りの櫛のほかに、ガラス棚に陳列されていた宝石まじりの物もあった。
「好いたお人に贈りますのか？」
悠乃介は曖昧に微笑んで返し、「あなたを、どこかでお見かけしたような気がしているんですが」と問いただした。

「おやまぁ、新手の口説き文句ですか？」
女は袖で口元を隠して笑った。
「私は何年か前まで、ついこの先の宿場の遊女でしたから、そこで見かけられたんと違いますか？　それとも、居留地で？」
居留地と聞いて、悠乃介の記憶が甦った。
「ああ、思い出しました。サーカスを見に行きませんでしたか？　つい先日、居留地で開かれたリズリーサーカスです」
「兄さんも行きましたか。そんなら、見られてしまったかな、私を囲っている人を」
女は別に恥じるでもなく、自分の身の上を口にした。
リズリーサーカスを見に行った時、異人と腕を組んで歩いていた女が、目の前にいる者と同一人物らしい。周りの人間は「らしゃめん」と呼んでいた。異人の愛人のことだ。
「では、あなたは、栄商会とはどんなご縁がおありで？　たしか、店主は正治さんとか」
それを聞いて、女が急に背筋を伸ばした。口元が引き締められ、悠乃介を探るように、小首を傾げて眺めやる。
「ふうん、どこで調べてきたのか知りませんけどね、お兄さん。このお店は、あたしのお店。あたしの住まいですよ」
悠乃介は返答に困った。それでは、町年寄の石川に届け出た店主の名前が偽りだということになる。
女は悠乃介がいぶかしんでいるのを悟ってか、鼻で笑った。
「別に、この店は騙りじゃありませんよ。店主が死んだのを、買い取っただけですからね」
「なるほど。店を引き継いだわけですか」
「だから、言ったじゃありませんか。あたしは、囲われ者、人はらしゃめんとか、呼びますけどねぇ。そんなことはどうでもいいんですよ。あたしは幸せだから。今までの暮らしに比べたら、今は極楽にいるんですよ」
さぁ、どの品にします、と訊ねながら、女は悠乃介から目を離そ

うとしなかった。
悠乃介も話を合わせ、木箱の中の品物を物色してみせた。
ひとつの櫛を手にとりながら、悠乃介は女に問うた。
「この櫛、これはどこで加工なさった？」
女は不思議そうに悠乃介を見上げた。
「どこで……って？」
「そうです。たしか、この緑の石は削りだして磨かねばならぬものと、聞いたことがあります。異国の品でございましょう？　これを取引した、異国の商会があるはずだと、そう思ったのですよ」
「おやまぁ、詳しいんだね」
顎をふんと持ち上げて、女は薄紅を引いた唇を持ち上げた。
「そうだよ、あたしの旦那はフランス人だからね。去年、フランス軍が横浜に駐屯することになってね、それで商売に来たんだよ。居留地に行けばあるよ、バラス商会という名前でね」
「つまりこちらは、バラス商会の暖簾分け、とでもいえばいいのですか」
ようするに栄商会とは、実体のないお店であったらしい。けれども、そうなると原石を水戸藩に斡旋したのが誰なのか分からなくなる。少なくとも、目の前にいる遊女崩れのこの女に、水戸藩の者と商売交渉できるような力はないように思えた。
つまりここは、ただの家で、栄商会という名前は騙りであったということではないか。
殺められた山本が、そのことに気付いたのかもしれぬ。
悠乃介は店内を見渡した。間口も狭く、暖簾の奥も広そうではなかった。ここにお亮や脇坂を隠しておくには、狭すぎるのではないかと考えた。ぐるりと見渡し、振り向いてお店の入り口を見た瞬間だった。
ぎょっとした。櫛が一本、隅に落ちている。
息をのんでから、しまったと思いなおして、女を振り返った。
女は真顔だった。

「そろそろ、何をしにきたのか言ってもいいんじゃないかい？　え？　兄さん」
話を引き伸ばして探っていても仕方がない。こうしている間にも、お亮の身に危険が迫っているかもしれない。悠乃介は腹を括って、単刀直入にいくことにした。鬼が出るか蛇が出るか、相手は女一人、どちらが出ても負けぬつもりでいた。
「それもそうだ……そんなら話は早い」
失笑してから、堂々と栄商会の暖簾の近くまでいき、先ほど目にとまった物を拾いあげた。
間違いはない。
悠乃介が長崎土産にお亮へ贈った、鼈甲の櫛だ。細い筆で赤い椿が描かれていた。悠乃介は、お亮を連想してこの櫛を買い求めたのである。
真顔のまま座っている女に、櫛を差し出して見せた。
「これをさしていた娘を探している」
「ふぅん……」
女はゆっくりと瞬きしてから、悠乃介を見上げた。吸い込まれそうな黒い瞳がしっかりと悠乃介をとらえた。それから、肩を揺すって可笑しそうに笑い出した。
「あの気の強そうなお嬢さん、やってくれたんだね。ああ、可笑しい。佐久間の旦那の怒り狂った顔が、目に浮かぶみたいだよ」
商品の入った木箱をさっさと奥に片付けると、女は再び正座しなおした。
「あたしは菊野。佐久間の旦那とは遊女の頃からの知り合いでね。だけどね、味方をしているわけじゃない。あたしは佐久間が嫌いだからね。言いつけで、このおかしな家の地下牢を貸しただけさ。大丈夫だよ、兄さん。あのお嬢さんなら無事だから」
「地下牢？　ほぅ……お亮を知っているんだね」
「お亮さん、って言うんだね？　粋の良さそうな子じゃないか。あの子はいい男と一緒に、もう旅立っちまったよ」

「旅立ったって、どこへ？」
女――菊野は足を崩して横座りになった。白い足が着物の裾から覗く。後れ毛をあげながら、深い息をついた。
「諦めたほうがいいんじゃないかい？　あの子は兄さんの、これかい？」と、小指を立てた。
「妹だ、大切な。あの子は今度のことに何の係わりもありはしない。どこへ行ったのか、教えてくれないか」
「悪いこと言わないから、手を引いたほうがいいよ。バラスははね、あくどい武器商人なんだよ。佐久間達はバラスと繋がってる。あたしを訪ねた佐久間に、役人だと知ったバラスが目をつけたんだよ。それからはすっかり仲良しさ。それにね、佐久間もたいがい、悪人だよ？」
「それでも、私は助けたいんだよ」
悠乃介の声に力がこもった。真っ直ぐに菊野を見下ろし、不敵な笑みが口元に浮かんだ。まるで、どんな敵であろうと恐れず、命をはってでもお亮を救い出すと言わんばかである。はっきりと断言する悠乃介に、菊野の瞳の警戒がやわらいだようにみえた。
菊野は袖で口元を覆うと、くすりと笑って肩をすくめた。
どうやら菊野は本当に佐久間の仲間、というわけではないようだった。
「面白いじゃないか。じゃあ、教えてあげようさ……こう言ってたよ、佐久間がね。幕府は大量の武器を望んでる。あちこちで反乱が起きているからね。薩摩なんぞはエゲレスと手を組んで、最新式の大砲を手に入れたらしいからね。可笑しいね、そんなものにバラスの売る不良な武器が太刀打ちできるわけがないよ。まぁ、そんなわけでね、お偉い方にいい顔するためには金子がいるんだってさぁ、たぁんまりとね」
やはりそうか、と悠乃介は思った。佐久間には袖の下が転がり込み、宝石の原石は武器弾薬に変わる予定であったのだ。
「だからあのお侍が邪魔なんだって言ってたよ。水戸へ、返すんだ

と」
「水戸へ？　なぜ？」
「さぁ……あたしは何にも知らないよ。だけど佐久間はえらく怒っていたねぇ……話が違うと言って。今ここで始末しないのかと、明宝と言い争っていたよ」
「それは誰です？」
「買弁だよ。清国の。バラスが連れてきたんだよ……ああ、そういえば」
菊野はそう言って、なにかを思い出すように目を泳がせた。
「サーカスの日だったね。佐久間の遣いが来て、なにやら失せ物があったと、騒いでいたよ。明宝がえらくご立腹だったから、よく覚えているよ。あの時、兄さんも近くにいたなんて、偶然だねぇ……」
リズリーサーカスの日だ。佐久間の遣いとは、お亮にぶつかった目明し以外には考えられない。居留地にはまったく似つかわしくない目明しがいた理由も、これで納得がいく。
山本が持っているはずの宝石の原石は行方知れずになった。山本が大倉屋に宝石を預けたからだ。
必然的にフランスのバラス商会の計画には変更の必要が生じたのだろう。水戸藩がすでに支払いを済ませた宝石の原石を奪う計画が、山本がお亮に荷を預けたことで狂ったのである。
そこまでは筋が通っている。
今更、脇坂を水戸に帰してどうなるというのだ。第一、脇坂や山本を襲うまでもなく、下田を出た十人の侍を一気に殺めて宝石を奪えばすむことだ。いや、それでは騒ぎが大きくなりすぎる、ということも考えられる。十人を襲うとなれば、それなりの準備が必要で、腕のたつ浪人を雇わねばならないし、別の意味で金子がかかるのかもしれない。
考えれば考えるほど、魚の骨が喉につかえて取れなくなってしまったように、悠乃介の心中にはもどかしい思いがわきあがってくる。
「教えてくれてありがとう、菊野さん」

悠乃介はお亮の櫛を懐にしまって、菊野に頭を下げた。
「羨ましいねぇ、あのお嬢さんが。こうして心配してくれるお人がいる。あたしには、そんなお人はいないから……」
菊野が憂いた瞳を誘うように向けて、寂しげに微笑んだ。
お亮が、らしゃめんといえど本当に好いて一緒にいる人もいるかもしれないと、言っていたことを思い出した。異人に寄り添って歩く菊野が、あの時はそう見えただけであったらしい。少なくとも、悠乃介に救いを求めるような目を向ける菊野が、幸せであるとは思えなかった。
バラス商会が日本から引き上げれば、菊野は行くところがなくなってしまう。そのうえ、「らしゃめん」だという風評はおそらく一生消えることはない。
闇に住まうのだなと、悠乃介は思った。ずっと闇にいることはない。生きている限り、光のある場所に住まうべきだ。
「なにか困ったことがあったら、横浜大倉屋を尋ねてお出でなさい。私は悠乃介。その名を出せば、大倉屋の者が、私に取り次いでくれますから」
菊野は何を言い出すのかと、目を丸くして悠乃介を見上げた。けれどすぐに、悠乃介の言いたい事がわかったようだった。乱れた着物の裾をただし、きちんと正座すると、手をついて軽く頭を下げた。
「覚えておきますよ、兄さん」
達観したような笑みだった。菊野が大倉屋を頼ってくることなど、ないであろうということは、悠乃介にも分かっていたのだった。

其の五・朦朧とする妖異……3

籠が止まったのは、お亮が櫛を落としてから随分と経ってからであった。

ちゃんと人の目にとまるような場所に落ちたか、佐久間や与五郎に気付かれることなくやり過ごせたか、気になって仕方がないものの、確認のしようもない。おそらくは、入口付近に落とせたはずだ。町の往来で落としてしまうよりは、はるかに良い。あとはどうぞ、悠乃介の目にとまりますようにと、神仏に祈るばかりだ。

そのあとはしばらく籠に揺られていた。一刻以上は経っている。眠くなって意識を失っていた時間もあるだろうが、関内は出てしまっただろう。

時折、さわさわと木々の葉が擦れる音が聞こえてくるほかは、静かだった。

籠もちの小さな掛け声と粗い息遣いが絶え間なく耳に届く。馬の足音がそれに混じる。どうやら馬は二頭いるようである。足が不揃いに二種類聞こえるので間違いないだろう。

与五郎は歩いているとして、佐久間が馬に乗っていると思われた。もう一人が誰であるのかは見当もつかない。

しばらくすると潮の香がしてきた。どうやら籠は、東海道を海沿いに進んでいるようだなと、お亮は思った。といっても、横浜に着たばかりで、まだ江戸までは行ったことがないから、どこを歩いているのかはさっぱり分からない。

籠に乗っている間は、どうやって脇坂とともに逃れるかだけを、ずっと考えていた。

水戸についてしまえば、何かに巻き込まれることになりそうだった。何とか巻き込まれる前に、悠乃介に連絡を取りたい。

それにしても眠かった。腰も痛むし、肩も凝ってきた。狭い籠の中でずっと揺られているのは、かなり体力を消耗するらしい。

何度目かの欠伸のあと、小窓から薄く光が差し込みだしたのが感じられた。
どうやら夜が明けてしまったようだった。そこで籠が止まった。
「降りろ。ここからは歩くぞ」
与五郎の声がして、籠の扉が開いた。眼隠しや手足を縛っていた縄が解かれた。眩しい目をこすりながらよく見てみると、お武家が乗るような扉つきの立派な籠だった。
前の籠からは脇坂重三郎も降り立つ。脇坂は顔色がひどく悪かった。青いというより、血の気がなかった。朝日を背に、顔に影が落ちているせいかと思ったが、そうでもないらしい。
お亮は思わずゾッとした。たしかに斬られた右袖はぐっしょり血で汚れていた。牢内にいる時は薄暗かったので、脇坂の顔色などよくわからなかった。血が乾ききっていなかったので巻いてやったお亮の伊達締めも、交換した時はかなり汚れていた。身体が辛いことをお亮に悟られないようにしていたのかもしれないと思うと、目頭が熱くなってきた。
「脇坂はん、どうもあらしまへんか」
脇坂に駆け寄ろうとするお亮の腕を、与五郎が乱暴につかんだ。
「勝手なこと、するんじゃねぇ」
虫の居所の悪そうな声だった。与五郎の顔も、目にくまができ、眉間には深いしわが刻まれている。岩のような顔にはひどい疲労の色がありありと浮かび上がっていた。
与五郎が振り返って、誰かを手招きする。
馬が二頭、歩み寄ってきて、馬上の者が降り立った。
一人は佐久間。もう一人は知らない顔だった。
糸のように細い目をしている。それがわずかばかり、釣り上がっていた。頬骨は高く、珍しい髪形をしていた。
まず、頭の前の髪がなかった。前は綺麗に剃りあげられているのに、耳の後ろあたりからの髪は束ねて細く編み上げられている。お亮は知らなかったが、清国では辮髪と呼ばれる独特の髪型である。

着物も日本のものではない。同じように前を合わせてはいるが、袖はお亮が知っている洋服に似ているし、裾はゆったりとしていて下にズボンという洋装のようなものをはき、足は靴だ。
すぐに買弁だと分かる。いつも大倉屋を尋ねる異人が連れてくる、清国の人間だ。
鈍く光る刀のような鋭さをもつ買弁だった。ひとたび触れたら、身が切り刻まれるのではないかとすら思う。なのに、服の裾が風に揺れ、微動だにせずに立つ姿は静謐ですらある。
怖かった。見ているだけで、怖気たってきた。
佐久間は籠持ちたちに金子を支払うと、彼らが去っていくのをじっと待っていた。話し声が聞こえないほど遠ざかってから、初めて脇坂とお亮に近付いてくる。
「お前たちには、水戸に行ってもらう」
脇坂は返事をせずに、じっと佐久間を睨みあげた。
買弁らしき清国の者が、馬に積んでいた荷の中から風呂敷包みを取り出した。お亮はあっと声をあげそうになった。
せっかく悠乃介が封印した宝石の原石を、また元通り風呂敷に包んである。
買弁は表情ひとつ変えずに歩み寄り、佐久間に手渡した。手渡された佐久間はすぐに、風呂敷包みを脇坂に押し付けた。
「それを水戸藩邸に届けるがいい。もともと、そうするつもりであったのだろう？」
「邪魔したのはどなたです」
脇坂の怒りを含んだ声が、佐久間を射抜いた。
「邪魔？　とんだ言いがかりだ。我らは、お前たちが賊だと思っていたまで。勘違いであったからには、品は元通りお前に返し、当初の目的どおり、水戸へ届けてくれればそれで良い」
動きにくそうな右手を少し添え、脇坂は風呂敷包みを受け取った。
与五郎が言っていた通り、脇坂や山本を賊と考え、捕まえるために奔走していたと信じるのなら、彼らの言うことには筋が通ってい

る。佐久間だけではない同心たちが、山本が殺められた時に検分に来ていたことにも納得できた。賊とあれば、神奈川奉行所が動くことにも違和感がない。幕府は異国人に害をなす賊を放ってはおかないからだ。

「詫びのしるしに、我らが水戸藩邸までご同行しようではないか。そしてフランスの武器商人と、連絡をとってやろう」

佐久間の口元だけが笑っていた。目はひとつも笑っていないから、背に冷たい汗が伝ったように気分が悪い。

「ならば何故、この人を帰してやらんのだ」

脇坂はお亮に視線を送って、佐久間に訴えた。

「間違いであったと言うなら、お亮さんは大倉屋に返して、詫びを入れるのが筋でござろう！」

「貴様と問答するつもりはない。さぁ、行け」

佐久間はあろうことか、腰に挿していた刀を抜いて脇坂に突きつけた。

脇坂は辛酸を嘗め尽くしたように苦い顔をしていたが、逆らうわけにはいかなかった。佐久間は乱暴に脇坂の持つ風呂敷包みを奪い取ると、脇坂の背中に結わえ付けた。

「いくぞ」

佐久間が踵を返す。

「ご武運を」

お亮たちを送り出すのは滑らかな声だった。牢で聞いた、片言の話し言葉を言った人間と同じ、柔らかな声。手を前で合わせて頭を下げる買弁こそが明宝だと、お亮は気付いた。

脇坂のすぐ斜め後ろを佐久間が歩き、続いて与五郎とお亮が歩いた。

四人を明宝が見送っている。

早朝の街道は、まだ人の気配すらなかった。

其の六・現れた妖異……1

「ああん、足が痛いわぁ、目明しさん……」
お亮は甘えた声で、半歩前を歩く与五郎に縋りついた。その三歩前を脇坂が、さらに三歩前を佐久間が歩いている。佐久間は刀を腰に差さず、ずっと右手でもって歩いていた。
「歩かないのだったら、旦那に斬ってもらえ」
与五郎は振り向きもせずに、がなりたてるようにしてお亮に言った。
「どけちんぼ！」
思いつくすべての方法を試そうと思った。悠乃介がお亮の行き先を察知して追いつくためには、時間を稼ぐ必要がある。
けれども、与五郎の機嫌はかなり悪い。大好きな甘菓子が三流品かと思うほど不味かった時と同じような顔を、与五郎はしている。同心、佐久間に付き従ってきたのであろうが、きっと承服しかねることでもあるに違いない。お亮は懐柔するなら、この男だと踏んでいた。
「なぁ、目明しはぁん……」
「うるせぇ小娘だな。与五郎ってんだ、覚えとけ」
口汚く言い捨てる与五郎に、お亮は思わず怒りに任せて殴りつけたくなったが、そこは唇を噛んでぐっと堪える。
「なぁ、なんで、水戸にいかなあきまへんの？　宝石、売ってしもうたらええやないの？　なんやったら、大倉屋が口ききますぇ？」
与五郎は返事をしなかった。
お亮は負けずに、痛いところを付くのはどこかと頭をめぐらせた。
「あの、明宝とかいう買弁。あんなん、ほっといたらよろしいねん。別に、栄商会やのうても、いくらでも金子に変える手立て、ありますぇ？　なぁ、聞いてますのん――」
突然、与五郎が足を止めて振り向き、お亮に匕首を突きつけた。

与五郎の顔は苦虫を噛み潰したようになっている。岩のような顔がますます厳つく見えた。
「いい加減にしろってんでぇ。黙って聞いてりゃ、いい気になりやがって」
「脇坂はんが持ってる宝石、金子にしたらよろしいのやろ」
一瞬、与五郎の目が泳いだのに、お亮は目ざとく気付いた。大人の顔色を伺うのは、ありとあらゆる悪戯をやってきたお亮には得意中の得意だ。与五郎は、金子欲しさに動いている。切り崩すなら、そこに違いない。
お亮は匕首など恐れずに歩き出した。与五郎も匕首をおさめて、いつものように片手を懐に忍ばせて歩き出す。
しばらく間をおいてから、お亮は佐久間に聞こえないように声を潜めた。お亮と与五郎は、いつの間にか並んで歩いている。
「金子、いりますのんか？　大倉屋を馬鹿にしたらあきまへん。大店中の大店どす。うちの身請け金、いくらでも払ろうて差し上げます。安心して、大倉屋を脅しなはれ」
隣を歩く与五郎が生唾をのんだのがお亮には分かった。この調子だと、お亮は内心微笑んだ。
さらに声を潜めて、与五郎に近付く。
「うちを助けてくれはるんやったら、悪いようにはしまへんえ」
「佐久間の旦那をなめたら痛い目をみるぞ。そう簡単にはいかん。旦那は神道無念流っていう剣術の名手で、奉行所でもじき与力に取り立てられるってぇ噂だ。歯向かうわけにゃあ、いけねぇ」
なるほど、佐久間影秋という人物は、神奈川奉行所においては奉行の覚えもよく、まずまず力を持っているわけである。
前を歩く佐久間の後姿を眺めた。手傷を負った脇坂とともに逃れるのは至難の業だ。お亮も悠乃介が通う道場に忍び込んで剣術を教わったこともあるし、町屋の子供たちと木刀を振り回して遊ぶことなどしょっちゅうだった。けれど、子どもの遊びとはわけが違う。
思ったよりも与五郎は佐久間を恐れている風であるし、懐柔作戦

は失敗のようであった。
　とはいえ、このまま大人しく水戸くんだりまで行ってはいられない。
「無駄だぞ」
「なんぞ言いはりましたか？」
「無駄だ、って言ったんでぇ。明宝はフランス商会の買弁だ。幕府の偉い方と懇意にしていなさるフランスに、俺らぁ、下っ端がものを言ったりできねぇのよ」
「フランス、って、栄商会はどないやの？」
「栄商会は、らしゃめんの住まいになってるだけで、何の関係もない。だいたい、明宝が賊に宝石を奪われた、って訴えてきたんだからな、奉行所に」
　お亮の心臓が忙しくなってきた。
　脇坂から聞いている話とは、まったく変わってくる。
　宝石は栄商会の仲介で、フランスと取引することになっていると言っていた。ところが、栄商会は実質商売をしておらず、脇坂自体は盗賊という扱いになっている。
「与五郎はんは、知りまへんのか？　脇坂はんは水戸藩士ですのんやで？」
　振り向いた与五郎の顔は、不審そうに歪んでいた。どうやら本当に何も知らずに、単に賊として追っていたらしい。
　与五郎が佐久間の下へ、駆け寄っていった。お亮はすかさず脇坂のもとへ歩み寄った。
「大丈夫ですか、脇坂はん」
　隣に立つと脇坂はすでに顔の色を失っていた。本来なら淡く赤いはずの唇は、少し紫色になっている。口元に薄い笑みを浮かべたまま、返事もできない様子であった。背には宝石の原石が風呂敷に包んだまま結わえてある。それがいかにも重そうであった。支えているだけで、精一杯にみえる。
「与五郎はん！　あきません、どこか、休むところを取っておくれ

やす！」

佐久間と与五郎が振り向くのと、脇坂が倒れこむのは同時だった。

其の六・現れた妖異……2

その頃、悠乃介はお亮のあとを追うために馬の用意していた。

らしゃめんの菊野から聞いたフランスのバラス商会は確かに居留地内に存在していた。武器弾薬を取り扱う大きな商会で、横浜に駐留することになったフランス軍とも懇意にしている様子であると、周囲の店から情報を得ることができた。

幕府が列強の脅威を肌で感じ、また、長州などの諸藩の叛乱を目の前に装備を充実させようとしていることも事実だ。そこへ巧く、バラス商会も入り込んできたらしい。

列強はこぞって横浜を目指す。大倉屋と同じで、そこに新しい植民地という大きな夢を見出しているからに他ならない。

「坊ちゃん、ほんまに一人で行かはるおつもりですか？」

惣八が半ば諦め顔ながら脚絆を巻くのを手伝っている。丸い顔の広い額には、相変わらず汗がひかり、小粒な目が心配のあまりか寄って見えた。

「本当にすまない。私が留守にしてしまってはいけないんだが、他にお亮を助けられる人がいるかい？」

そう言われてしまうと惣八は何も言えないらしく、俯いて紐をしっかりと結びなおした。

もしも行き先が江戸の水戸藩邸なら、今から馬を駆れば十分追いつくことができるかもしれない。

江戸日本橋から神奈川の宿を越えて横浜までは、おおよそ十里の距離になる。馬で休まず駆ければ、急いで半日というところだ。

＊

佐久間影秋は茶屋に入るとか宿をとるなどという親切心は起こさなかった。脇坂が蒼白であるにもかかわらず、一本の大木の下に座らせて、気遣ってくれたこととといえば日除けだけである。

脇坂の隣に腰を下ろし、東海道を行き交う人たちを眺めながら、傷ついた脇坂とどうやって逃げるか頭をめぐらせていた。けれど、楽しげに歩く者や荷物を運ぶ者、行き交う旅人の姿が物珍しく、お亮の気は散るばかりで一向に考えはまとまらなかった。

街道は整備された並木道が続いている。あたりは見渡す限り田畑が広がっていた。

さっき川を渡った後、市場一里塚の石碑を見たので、川崎宿あたりまで来たことは分かっている。日本橋まであと五里。時刻は分からないが夜明け前に関内を出たので、随分と江戸へ近付いた。籠に乗せられてかなり横浜から離れてしまった。同じ逃げるにしても、土地勘があるのとないのでは大違いだ。

いま休んでいる場所が、市場一里塚からさらに小半刻ほど歩き、道行く者の話では八丁畷という地名だとさっき小耳に挟んだばかりであった。

場所も重要だが、お亮にとって最も大きな問題は隣で苦しむ脇坂である。お亮より大きな脇坂をおぶって歩くわけにもいかない。明らかに様子がおかしかった。大木に身を預けたまま、ずっと肩で粗い息を繰り返している。懐から出した布で滲んだ汗を拭ってやると、身体が少しばかり熱いような気がした。斬られた右腕の傷が膿んできたのかもしれない。

「なぁ、与五郎はん。お医者に見せんと、脇坂はんが辛そうどすえ。このままやったら、水戸に着く前に、どうにかなってしまいます」

与五郎は鬱結とした顔をしてお亮を睨みつけた。そのあとで、佐久間の顔色をうかがうように振り返る。

「そうや、せめて、背中の宝石は佐久間はんが持っておくれやすな」

佐久間は化け物でも振り向くような顔でお亮を見た。

「それか、籠を頼みましょう。出る時は乗ってきたんですから、か

まいやしまへんやろ？　だいたい、なんでずっと籠やないんですか。歩くより、なんぼ速いか分かりまへんぇ」
「あれやこれやと五月蝿ぇ女子だ。言いつけなんだから、仕方あるめぇ」
「誰のどす？」
「明宝だよ、明宝！」
いかにも気に食わないとばかりに声を張り上げる与五郎を、佐久間は手にしていた刀の鞘でこついだ。
「余計なことを言うんじゃねえ」
「すんません」
与五郎を諌めている佐久間だが、井戸よりも深そうなしわを眉間に寄せたままで、いたって虫の居所が悪そうだった。
水戸に着けば、脇坂もお亮も生きてはいまい。今のうちになんとか手を考えておかなくては、生きて二度と悠乃介に会うことがないだろう。そう思うと、なんだか気が焦った。悠乃介に会えないなんて、想像もつかなかった。すぐに助けに来てくれると信じていたけれど、脇坂の怪我の様子からすればあまり状況が良いとは言い切れない。
いま脇坂に何かあれば、それは同時にお亮の死をも意味する。
佐久間が細い目をさらに細めてお亮を睨んだ。
「与五郎。二人を始末するぞ」
「へ？」
佐久間が刀の柄に左手をかけた。
「何もかも、言う通りにしなくてもいいだろう。物を水戸藩に届け、バラスに仲介すると言ってやれば、それでよいのであろうが。なにもこんな足手まといを二人も連れて歩くこともあるまい」
「でも旦那」与五郎が顎で脇坂を指した。「こいつがいなきゃ、話にならねえって、明宝が言ってましたよ」
「余計なことはいい。割りに合わねぇ、七面倒くせぇことはでぇ嫌いだ。そうだろうがよ。途中でおっ死んじまったんなら、仕方ねぇ

ことさ」
「なるほど、だけど旦那。そんなら、水戸より、幕府の方がいいんじゃねぇですかい？　どうせわしらは、はじめっからそのつもりだったんですし、神奈川お奉行さまにでも付け届けと一緒にお渡しになっちゃいかがです？」
佐久間は横目でお亮と脇坂を見ながら、考えている様子だった。
話は悪い方向に進みつつある。
二人の話から察するに、フランスの武器屋・バラス商会は幕府だけでなく水戸藩ともつながりをもとうとしているのであろうとお亮は思った。水戸藩の内情を詳しくは知らなかったが、バラスにとって商売相手が増えることは願ってもないことには違いない。
いまは各藩が、諸外国と手を結ぶ時代だ。異国人が横浜から出ることが許されておらず、攘夷風の厳しい情勢では、足代わりとなってくれる人間は貴重なはずだ。大方、佐久間にはバラス商会から大金が舞い込む仕組みにでもなっているのだろう。そのために、明宝の言いなりになって水戸へ行こうとしているのに違いない。
あくどく稼いだ金子を積んで出世するなんて、虫唾が走る。
お亮の頭はめまぐるしく働いた。
「なるほど、与五郎もたまには良いことを言うの。これの代金はすでに水戸が支払ったと聞く。ならば、老中さまに恩を売るのも、ひとつの手じゃな」
「へぇ、佐久間さまのご出世がまた早くなるってもんです」
佐久間と与五郎は下卑た笑みを向けてきた。お亮は思わず身を引いた。身体の血の気が引く、というのはこういうことかと、生まれて初めて知ることになった。
脇坂は丸腰だ。おまけに手傷を負っている。杉並の街道を少し横に逸れれば、人目を避けて人二人、葬り去ることなど簡単だ。
「脇坂はん、しっかりしとくれやす」
隣の脇坂の肩を少し揺らしてみたが、小さな呻き声が上がっただけで、意識が朦朧としているらしく反応がない。半眼の目が虚ろに

あらぬ方向を見ているだけで、手もだらりとしていた。
佐久間が顎をしゃくった。与五郎が、無言で肯く。
そのままお亮に近付いて、脇坂に身を寄せるお亮の襟首を与五郎がつかんだ。
「なにをしやはるん」
「聞いてたんだろ？　悪いがそういうこった」
引きずるように立たせて、与五郎はお亮の右脇から手を差し込んだ。握っていたのは匕首だ。すばやくお亮の袖の中に匕首を隠す。傍から見れば、与五郎は愛おしそうに若い女を抱きかかえているようである。
なにか時間を稼がなくては。そう思いついて、不本意ながら、虎の意を借りることにした。
「うちに何かあったら、大倉屋が黙ってまへんで」
「大倉屋など、いくらでも潰すことができるんだぞ」
佐久間が脇坂のそばに立って口角を引き上げた。蛇だった。野犬の如き鋭く細い目には、一度睨んだら決して放さない執念深さが感じられた。佐久間ならば、奉行所同心という役目を活用して、大倉屋の悪評を関内だけでなく居留地や江戸に流すこともやりかねない。そんな事をされたら、評判が第一の大店には致命的である。
「あの生意気な坊主崩れも、粛清の対象にならねばよいがな」
佐久間は肩を揺らして喉元で笑いはじめた。どうやら、性根が腐っているらしい。この男に何を言っても無駄だと、お亮は腹を括った。
街道には数組の人たちが歩いている。誰の目にも、旅に疲れたお武家と若い女を抱きかかえた男に見えているのだろう。一瞥していく者がいても、さして気にする風でもなかった。もちろん、ここで叫べば誰かが助けてくれるだろうが、そうすると行きずりの人間を巻き込むことになってしまう。佐久間はきっと容赦なく助けに入った人間を斬るくらいのことをやりかねない。
与五郎に抱えられながら、街道の脇にある雑木林へと連れ込まれ

ていく。滅多と泣かないお亮だが、こんなところで生を終えるのかと思うと情けなくて涙がでた。悠乃介に会えないことが、たまらなく辛かった。京都にいる藤吾朗がどれほど怒り狂い、そして悲嘆にくれるのか、惣八の寿命が縮まってしまうのではないかと、大切な人たちの顔が、次々とお亮の目蓋に映りこんだ。

もっとおいしい物をいっぱい食べて、楽しいこともいっぱいしたかった。悠乃介と一緒にみたてた新しい着物だってまだ仕上がっていない。

考えれば考えるほど、生への執着が大きくなってくる。

全身の力が抜け落ちてきた。膝がお亮を支えてくれない。死ぬ時とはこんなにあっけないものかと我ながら悔しかった。

「しっかり歩け、重てぇなぁ」

与五郎は相変わらず文句を呟きながら、お亮を抱きかかえ、膝丈まで伸びた雑草を足で掻き分けた。

与五郎に身を任せて後ろを振り向くと、木にもたれかかった脇坂を佐久間が左肩を貸して立たせたところだった。脇坂は半眼のまま、すっかり正気を失って寄りかかっている。佐久間は舌打ちしながらようやく抱き起こした。

その時、遠くから馬の蹄が不揃いに聞こえはじめた。

一頭ではなさそうである。何頭もの蹄の音が、少し脚を急がせて駆けてきた。横浜の方角からではなく、街道の日本橋方面からだ。

馬上には武家装束の者が乗っていた。道行く者の顔を一人ひとり確認するかのように頭をめぐらせている。

総勢で八人にもなる数だ。

佐久間が足を止めた。佐久間が止まったので、与五郎も止まった。

脇坂がゆるりと頭をもたげた。佐久間の方に脱力してもたれかかった姿で、半眼のままだ。あれほど何の反応もなかった脇坂が、血の気を失った顔を馬上の人間に向けた。

お亮は目を見開いた。

脇坂が笑っている。声をたてたわけでも、肩を揺らしたわけでも

ない。口角が薄く持ち上がっただけであったが、お亮にはそれだけで脇坂が笑ったと感じられた。死んだように生気がなかった脇坂が、半眼の目をわずかばかり見開く。

「お前、脇坂ではないか！」

馬上の一人が立ち止まった佐久間に目を留めて大声で叫んだ。

それに従うように、八頭の馬が脚を止める。八人の侍が脇坂と佐久間を見下ろした。

其の六・現れた妖異……3

お亮は安堵の息を漏らした。助けが来た。それも、脇坂の知り合いのようだ。さすがの佐久間も、八人を相手に斬りあいまでしないだろうと考えると、胸がすく思いだった。彼らに佐久間と与五郎の悪行をぶちまけて、打ち首獄門送りにしてもらおう。そう思って「助けて」と叫ぼうと口を開きかけた。

「貴様……」

馬上の人間が、腰にさしていた刀を被う袋を解いて、真剣を抜いた。

「水戸藩を売ったな！　殿はお前たちを信頼して荷をお預けになったというのに、裏切るとは何事か」

刃先は真っ直ぐに脇坂に向いている。

くく、っと、小さな含み笑いが脇坂から漏れた。

お亮には信じられなかった。馬上の者は、脇坂の味方ではないらしい。侍は続けた。

「昨日、藤田小四郎が自らを天狗党と名乗り、六十二人もの同志を募って筑波山にて決起した。お前は水戸藩の財を藤田に売るつもりでおるのだそうだな。水戸の名を地に貶める輩に手を貸そうとするなど言語道断」

一八六四年（元治元年）三月二十七日。水戸藩過激派・藤田小四郎率いる天狗党が筑波山で決起した。攘夷強硬派の幕府に対する不満が暴発した形となる。天狗党には下級武士や、全国の浪士、町民や農民も参加し、一大勢力へと発展していく。世にいう天狗党の乱である。

「お前を斬る前に教えてやろう。お前の父、目付け脇坂軍太夫殿は、すでに責めを負われて蟄居謹慎された」

脇坂は無反応だった。佐久間と与五郎は目を見合わせている。思いもよらない出来事だった。

八人の水戸藩士たちは、次々と馬を下りてきた。一様に刀を抜き放ち、怒りに震えるような目を脇坂に向けている。
「待っておくれやすな、お侍さん。脇坂はんは、これから水戸に宝石をお届けするつもりやったんどす！　私も脇坂はんも、この人らにつかまっているんです、助けておく――」
与五郎があわてて お亮の口をふさいだ。
けれど、いまここで黙っているわけにはいかない。脇坂は水戸藩を裏切ってなどいないし、佐久間達だって、天狗党とやらに宝石を届けるつもりなどなかったはずだ。
与五郎が口を塞いでいる手を押しどけて身をよじった。脇に潜ませていた匕首が、少し掠ったらしく、帯のちょうど上辺りにちくりとした痛みが走った。かまわず「助けておくれやす！」と声を張り上げた。
遠巻きに事の成り行きを見守っていた街道をいく人々も、水戸藩士たちも瞠目した。
しかし、水戸藩士の動揺は一瞬だった。どうやら脇坂の裏切りを信じきっているようであった。水戸藩を裏切り、財を投げ打って手に入れた宝石を天狗党に渡そうとしていると誤解しているらしい。
佐久間は何を思ったか、肩に担いでいた脇坂から身を離した。支えを失った脇坂が土の上に襤褸布のように倒れこんだ。
「始末をつけろ」
水戸藩士が倒れた脇坂を指し示したので、お亮は我慢しきれずに呆然としている与五郎を突き飛ばした。脇坂に駆け寄って、背に庇う。
「誤解やと言うているやありまへんか。脇坂はんは、ちゃんと下田から宝石を運んできやはったんです。山本はんも、一緒どしたんや。何と言うたら、信じてくれはるんです！」
「女、どかぬか。どかぬなら、脇坂とともに刺し貫くまで」
脇坂を斬ることを指示された若侍が刀を振りかざした。脇坂と、そう年の変わらない侍である。辛そうに顔をしかめているところを

みると、藩命であるから仕方なし、とでも言いたげであった。
「そっちもだ」
八人のうちで最も年嵩で、先頭を駆っていた者が佐久間と与五郎をも指し示した。
雑木林を背に、あっという間に八人に取り囲まれる。
助かったと思ったのは、ほんの一瞬だけだった。しかし、何故、彼らは脇坂が街道を進んでいることを知ったのであろうか。横浜を出たのは昨夜遅くだ。
お亮は「あっ」と、声をあげそうになった。
籠だ。だから籠を降りたのだ。誰かが水戸藩に連絡を入れ、脇坂が裏切って東海道を日本橋方面へ進んでいると密告したに違いない。
そんな事ができるのは、フランス商会バラスの買弁、明宝一人だ。佐久間と与五郎を含む四人を始末するため。
何のためにそんな事をするのか、佐久間が邪魔だったのか、それは皆目見当もつかない。だが、バラスに協力して金子をせしめようとしている佐久間は、邪魔者には違いないかもしれない。ここで佐久間を殺しても宝石は水戸藩士たちの手に渡るのであるから、金子も払わなくて済んで一石二鳥というわけである。
八人の水戸藩士たちが刀を構えた。
もう駄目だと思った。けれど涙は流れなかった。今度は腹立たしかった。こんなに誤解だと訴えているのに、聞く耳を持たない水戸藩士にも、裏でなにやら画策して人を操っている清国の明宝にも、無性に腹が立ってきた。多くの仲間を失って頭に血がのぼっているのだとしても、仲間であった脇坂を信じないとはなんという了見の狭い話だ。
「まて、まて。私は神奈川奉行所・定町廻り同心、佐久間影秋。これから水戸へ参るのでござる。我らは付き添っているだけで関係はござらんぞ」
いままでの態度とはうって変わって猫なで声だ。媚びへつらうように腰を曲げ、だらしなく目尻が下がっている。お亮はあまりの醜

態に吐きそうだった。
「そうだ、いまここで宝石をお持ち帰りになるといい。私がフランスのバラス商会と連絡をとって、さっそく取引できるようにいたしますから」
「フランスの腐った犬め！」
下手にでた佐久間を、水戸藩士の一人が踏み込んで袈裟懸けに斬りおろした。
佐久間は一瞬怯んだものの、腰から鮮やかな素早さで刀を抜き放ち、斬り下ろされた刃を跳ね返す。
水戸藩士は一斉に身構えた。一介の同心であっても、稀にみる手練だと悟ったのであろう。与五郎が言っていた神道無念流というのは、あながち嘘ではないらしい。
大変なことになった。
「脇坂はん、しっかりしとくれやすな」
うつぶせに倒れたままの脇坂を揺さぶり起こしたが、微動だにしない。背に結わえられた風呂敷包みを水戸藩に渡しても、彼らは裏切り者と信じる脇坂を許すことはないだろう。
それでもやってみる価値はある。
脇坂の胸元から手を入れ、風呂敷の結び目をまさぐった。お亮よりはるかに大きな脇坂を動かすことは容易ではない。いくらお転婆で男勝りだといっても、けっきょくお亮は大棚のお嬢さまとして育ってきた。やはり箸より重い物は滅多と持たず、お仕置きといってもお店の掃除くらいで、力仕事などやったこともない。
また刀を弾く音がした。
うしろでは、佐久間と二人の水戸藩士が睨みあっている。与五郎は腕を斬られて血まみれになりながら、匕首を真っ直ぐに藩士へと向けている。
「さあ、脇坂、覚悟いたせ」
うしろに気をとられている間に、二人の藩士に挟まれていた。
一人は先頭をいっていた年嵩の男。もう一人は脇坂に辛そうな目

を向けていた若者だ。
「なんで信じてくれませんのんや。脇坂はんが、下田からどんな思いで宝石を運んできたと思うてはりますんや。お仲間を殺されて、それでも藩命やと言うて、江戸の水戸藩邸に宝石をお届けしようと、一生懸命どしたんやで？」
「悪いが女。そちが騙されておるのだ。山本や鹿島、坂部など、水戸の重臣たちの子弟がことごとく死んだは、すべて脇坂の仕業と聞き及んでおる」
「誰が、そんなこと言いましたんや。みなさんは、その誰かと脇坂はんと、いったいどっちを信じはりますねん」
声が嗄れるかと思うほど大きな声が出た。初めて、大きな目から涙が零れ落ちていることに気付いた。涙は零れ落ちて、縋りつく脇坂の背におちた。
脇坂が悪い人間だとは思いたくない。山本の身をしんそこ案じていたのも本当だし、牢に捕まっていた時も、お亮の話しをよく聞いてくれた。第一、お亮を庇って、楯になってくれたあの姿に偽りがあったとは思えない。
「お前には何の罪咎はないが、これも宿命と諦めよ」
年嵩の藩士が刀を握り締めて脇坂をお亮ごと串刺しにしようと構えた。
その時であった。
脇坂が起き上がった。地に張りつくばっている襤褸布を捲りあげたが如き動きである。背に縋って手をのせていたお亮は、はずみで跳ね除けられ、尻餅をついていた。
唸り声がした。
まさしく、野に放たれた狼が威嚇の声をあげているのに似ていた。低く、長く、時おり唾液が喉の奥で転がるような音が混じっている。
脇坂の口角から涎が滴り落ちた。
目は半眼のままだった。乱れきった髷から落ちてきた髪が頬に張り付き、泥が混じって顔が土まみれになっている。牢にいる時に、

菊野姉さんと呼ばれていた女が持ってきてくれた絣の着物も汚れていた。
「なんだ、脇坂！」
二人の藩士以外にも、後方で控えていた後の四人も刀先を向けてきた。佐久間と与五郎を相手にしていた二人も、刀を一旦ひいて脇坂の様子を凝視している。
成り行きを見守っていた旅人たちも、事の異常さに慄いて悲鳴をあげながら散っていった。なぜか、水戸藩士が乗ってきた馬たちまで、突然嘶いて暴れ始め、ちりじりの方向へと駆け出した。
「まさか、本当に化け物が……」
佐久間が低い声で呟いた。
「旦那、何を言い出すんです？」
「竹邦悠膳という、生臭坊主が言ってやがった。あの石には、化け物がいやがるんだと。私にもよくない悪鬼がついているから、祓ってやってもよい、などと……」
「げええ、なんですかい！」
与五郎が素っ頓狂な声をあげた。
お亮も尻餅をついたまま、脇坂の変貌振りを見上げていた。目がおかしくなりそうだった。脇坂が、悪鬼にとり憑かれてしまっている。
悠乃介が赤い宝石には邪眼という目がついていて、悪鬼を引き寄せると言っていたのは本当だったのだ。
思えば、傷ついた体をおして無理をし、心身ともに疲れきっていたことは否めない。下田からずっと、次々に殺されていく友人たちの姿を見続け、次は自分の番ではないかと怯え、それでも藩命とあれば、命をとして宝石を水戸藩邸に届けねばならなかったはずである。悪い気が入り込んで根を張るには、状況的にいえば格好の餌食だったわけだ。
脇坂のだらりと垂れていた腕が、ゆっくりと持ち上がった。傷ついて動きにくかったはずである右腕までもが、軽々と持ち上がる。

森の奥から表れた大熊が立ちはだかったような姿になった。
笑っていた。背筋が寒くなるような笑みだった。底の見えない暗い井戸を覗き込んだ時のように、全身の毛がそそり立つようである。
お亮は頭で考える前に後退りしていた。
水戸藩士たちも、脇坂の気に圧されてじりじりと後退して行く。
「脇坂、乱心したか」
年嵩の藩士が呟いた。一呼吸おいて、脇坂に向かって斬り込んでいく。刀の先が軽々と振り下ろされた。
お亮は目を背けて、耳も塞いだ。脇坂が斬られるところなど、見たくもなかったからだ。
ところが、一向に呻き声も倒れた音も聞こえてこなかった。
おそるおそる目を開けてみると、振り下ろされた刀先を、あろうことか脇坂が素手で握り締めている。
脇坂の手の平から、刀に添って赤い血が地面に滴り落ちていた。
藩士はどうにか刀を引こうとして手に力を入れているらしく、腕や体が小刻みに震えていた。
刀は微動だにしない。しっかりと握り締められたままである。
「ば、化け物……」
誰かが呟いた。
それが水戸藩士たちの心中のどこか一線を越えさせたようであった。同士である脇坂を心のどこかで信じ、成敗することに躊躇いを抱いていた彼らの表情が、一転して凶悪なものに変わったのを、お亮ははっきりと見た。
大きな居合いの声とともに、両脇から同時に二人が斬り込んでいく。
脇坂は刀を握り締めていた手を軽く捻った。一方、刀を引き抜こうと力を入れていた年嵩の水戸藩士は、脇坂の力技に圧されて捻られた方向によろめいた。
右から斬り込んできた藩士の刀が、脇坂ではなく、よろめいた同士の背に刺さりこむ。

同時に脇坂は、体重を感じさせない動きで後ろに跳び退り、左から斬り込んできた藩士を避けた。勢い余った藩士の刀は、同じく同士の右腹を掠っていく。

三人はぶつかり合って、縺れるように倒れこんだ。

倒れた拍子に、年嵩の藩士の刀が、左から斬り込んだ藩士の腹に深々と滑り込む。

低い呻き声が重なり合ってお亮の耳に飛び込んできた。

喉が痛かった。

なにかを叫びたいのに、声が出ない。脇坂を止めたいのに、足が動かず、腰が立たなかった。

「旦那、早く逃げやしょう」

うわずった与五郎の声が、脇坂を振り向かせる。

「ひえっ！」

与五郎がかすれた声とともに、佐久間の背に隠れた。

半眼だった目が開いていた。赤い、目だった。脇坂が背に背負っている宝石の原石と同じような、大量の血をこぼしたような赤だった。瞳の中には、陽炎のように揺らめき立つ黒い澱みがあり、それが恐ろしい化生に見える。

「邪眼が……開いた……」

宝石と同じ色の目をみて、ようやく悠乃介が言っていたことが理解できた。

植えつけられた邪眼を通して、悪鬼が行き来できるのかもしれない。その目を今、脇坂自身が持っている。

脇坂が赤い目であたりをゆっくりと見渡した。

三人の水戸藩士は地面に昏倒している。残る五人が、震える刀先を脇坂に向けたまま、目に見えない気に圧されて後退していた。

尻餅をついたままのお亮をも、見下ろしてくる。

目が離せない。吸い込まれそうであった。ひとたび睨まれたら、電撃に打たれたように体が痺れていく。

ずしりと重い荷物を背負ったように、肩が重くなった。背中に赤

子を負ぶった時と同じだ。体温が急激に下がり、足の先から音をたてて肌が粟だったのが分かった。
昔、かくれんぼが度を過ぎ、隣家の蔵の、さらに地下にある湿気た貯蔵庫に迷い込んだ時のようであった。狭くて湿気た貯蔵庫には、息苦しくなるほどの重い空気が満ちていた。息苦しくて思わず座り込み、身体を抱きかかえるようにしていたのを思い出す。押しつぶされていくように、首の後ろが痛み出す。
脇坂はお亮を一瞥し、佐久間と与五郎の方向へとぎこちなく足を進めた。一歩、足を出すのが精一杯のようで、生まれて初めて歩いた赤子のような歩き方だ。
両腕は大きく横に広げている。右の手の平からはずっと血が滴り落ちていた。
脇坂の蒼白だった顔は、柳鼠色の如く灰白色に変わっていた。
佐久間と与五郎は背を向けることなく後退しているが、刀と匕首の刃先は脇坂に向けたままである。
――と、地面が揺れ始めた。
尻餅をついていたお亮には、地面が小刻みに振動しているように感じられた。
それがだんだんと大きくなっていく。
やがて、振動は地鳴りに変わっていった。
読経の声に似た、低くて一本調子な地鳴りである。それがあたりを包み込むようにしてさらに大きくなってゆく。木霊がいくつも重なり合って、低い耳鳴りが持続しているようであった。
よくよく聞いていると、啜り泣きのようにも思えてくる。
「なんでぇ、この声」
与五郎が震えた声で呟いた。
「このあたりは、八丁畷か……？」
「旦那、気持ちの悪いことといわねぇでくだせぇよ」
だらしのない声を出すと、与五郎は佐久間を見捨てて駆け出した。
脇坂が笑声をあげた。人間の声ではなかった。遠くで木霊してい

るような、どこから響いているのかつかめない低い笑い声だ。
笑声に同調するように、どこからか一斉に飛び立った黒い烏が甲高い声をあげた。波が打ち寄せるように、黒い影が与五郎に重なる。
悲鳴があがった。突如として現れた烏の大群が、与五郎に襲い掛かったのである。
与五郎が生きたまま、烏に啄ばまれていく。奇々怪々な声をあげながら、やがて与五郎は静かになった。動かなくなっても、烏の大群は与五郎から離れることがない。骨の髄までしゃぶっていくらしい。
佐久間も足が震えて動けない様子である。
脇坂は満足げに口元をゆがめた。
また、足を勧める。真っ直ぐ佐久間に向かっていた。
地面は変わらず、慟哭を続けている。多くの人間の、苦しみに耐えかねた呻き声とも聞こえた。
「八丁畷、といえば、無縁仏がたくさん納められているという、あの？」
「聞いたことがある……飢饉や疫病で死んだ者を埋めたとか……」
水戸藩士たちの話し声が、お亮の耳にも届いた。
それが本当なら、この大地から聞こえる慟哭は、死者の呻き声なのかもしれないと思った。

其の七・真の妖異……1

悠乃介は、慣れぬ馬で東海道を日本橋方面へと駆けていた。

関内の吉田橋の関所では、町民が馬に乗ることを不審がる兵士たちが悠乃介を引きとめた。それを振り切って駆け出したので、今ごろは奉行所にでも報告がいき、追っ手がかかっているかもしれない。

自らの身など、かまっていられなかった。

どこまでお亮に追いつけるか分からない。悠乃介の頭の中は、真っ白と言ってよかった。お亮の顔だけが頭の中を占拠している。

バラス商会に行って、事の子細を問いただすこともできた筈だった。はたまた、佐久間という同心のことを神奈川奉行所に訴え出て、捜索してもらうこともできた。

いろいろな方法がある中で、悠乃介は結局、自らの手でお亮を救い出すことを選んだ。

悠乃介にとって、お亮とはそういう存在であることを、今更ながら自覚したのだ。

お亮は悠乃介にとっての真昼である。悠乃介がもちえない明るさを、お亮は天性のものとして身のうちに持っている。昼がなければ夜もこない。夜と昼は背中合わせで供にあらねばならないのだ。お亮を失うことは、悠乃介自身の明るさを失うことでもある。

宝石の原石がどこまで悪鬼を成長させたのか、それも不安であった。脇坂の背にいた九つの悪鬼も、完全に取除けたかどうかは分からない。

たいてい人にとり憑く悪鬼や化生は一度で祓いきれるものではない。完全に浄化するまでには時間が必要だ。九つの悪鬼は雑魚であったので心配は少ないが、佐久間についていた悪鬼は少し力が強かった。あれほどまでに佐久間の中に入り込んでいたのであるから、一度祓ったくらいでは、再び隙をみて同じ身体に戻っている可能性もある。

さらに、もっと性根の悪い悪鬼化生ならば、本格的に護摩を焚き、ご本尊の前で浄化しなくてはならないだろう。
今はなんとかお亮を救い出し、宝石の原石を取り戻すことが大切だ。
馬は途中、数回、旅籠や茶屋などで水をもらって休みをとりながら、駆け続けてくれた。さすが惣八が用意しただけあり、なかなかよい馬であったようだ。
神奈川関門を越え、一里塚をあとにすると神奈川台場が右手に見えた。完成したのはまだ四年ほど前である。神奈川本陣を横目に、神社仏閣の多い通りを日本橋方面へと急いだ。
馬がちょうど、生麦あたりに差し掛かった頃だった。
それまで大人しく言うことを聞いて走り続けてくれた馬が急に荒々しく足を止めた。
「どうした、疲れたか」
悠乃介は街道の脇で馬を降り、休ませてやった。
気候はちょうどよかった。海から吹く潮風が、少々湿気を含みすぎてはいるものの、髪を心地よく揺らし、かいた汗を適度に冷やしてくれる。
馬は歯を剥いて、いきり立っていた。
「どこ行くんでぇ！」
悠乃介の脇を、男が一人叫びながら鶏を追って走っていった。
奇声を発した鶏が三羽、羽をばたつかせながら暴れている。どうやら小屋を覗いた拍子に逃げ出したらしい。
向こう側では、犬が狂ったように咆えていた。少し先でも、同じように咆える犬がいる。
空を見上げると、海鳥が大群をなして、日本橋方面とは反対方向へと飛び立っていった。
動物が騒いでいる。
悠乃介は嫌な予感がして、馬にまたがった。馬は悠乃介を振り切るようにして嘶いたが、首筋を撫でて落ち着くように繰り返してや

る。
人間よりも動物のほうが感性が鋭い。悪鬼化生を感知するのは動物のほうが先だ。これほどまでに騒ぎ立てるのなら、近くに何かがいるに違いない。
バラス商会の者や同心・佐久間は宝石を水戸へ運ぼうとしている。悠乃介の封印はとかれて、書状は捨てられているに違いない。佐久間に憑いていた鬼が、さらに成長して再びとり憑いていることも十分に考えられる。ただ、動物たちがこれほどまでに怯えるほどの鬼になっているかどうかは、少々疑問が残った。なにか、鬼を小躍りさせるほどの環境がこの辺りにあるのかもしれない。

其の七・真の妖異……2

お亮はへたり込むようにして座ったままだった。
与五郎が烏に啄ばまれていく様を、まるで観劇でもしているかのように眺めている。現実味がなかった。夢を見ているのではないかとすら思えた。
夢でないことは重々分かっているのに、現実ではないのだと、どこかで考えようとしている。お亮の心が均衡を保つために逃避しようとしているらしかった。
なんとか歯を食い縛ろうとしても、第一腰が立たない。自分はなんて情けないのだろうかと、頭をこつきたくなった。
佐久間はしばらく与五郎が喰われる姿を呆然と眺めていた。が、不規則に地を踏む足音を聞いて我に返ったのか、手にしていた刀を構えなおして脇坂重三郎を見返した。
脇坂はぎこちなく歩いて、佐久間へと近付きつつある。
水戸藩士たちは、もつれるようにして串刺しになった三人の遺骸に駆け寄っていた。
「貴様……」
威嚇するように怒鳴り上げた佐久間だったが、脇坂に飛び掛っていくようなことはしなかった。
佐久間からは激しいまでの怒気が感じられた。地面から鳴り響く唸り声は絶えることがなく、辺りを包んだままだ。
「何が目的だ？　私を殺すことか。ならば、私は何も知らん。すべてはバラス商会の明宝の言うがままになしたこと。仇を返すなら、明宝の元へ行くがいい」
佐久間が腰を落として刀を斜に構えた。
一方の脇坂は佐久間の声を聞いているとは思えない。ただ、ふらふらと近づいていく。
大きな居合いの声が、佐久間から出た。脇坂が間合いに入ったの

だ。
刀が左上から振り下ろされる。正確なまでに斜めに白刃が軌跡を描いた。
お亮は脇坂が斬られたと思って袖で顔を覆った。驚いて顔を隠したが、すぐに目を見開いた。
脇坂は斬られていなかった。
真横から振り切った刀を後ろに跳び退って避けている。佐久間は後ろによけた脇坂を追って刀を突いたが、今度は左に避ける。佐久間もすぐに刀を返して左側から斬りあげたが、真綿が跳ぶように刀先を避けて佐久間の右側に躍り出る。
脇坂は声をたてずに笑っていた。口角が引き上げられている。
佐久間が体勢を立て直して、目を細めた。右頬が引きつって、口元から噛み締めた歯が覗いた。
「許せん」
お亮は思わず腰をあげた。そして、目を擦った。
佐久間の背後に黒い影が見えたような気がしたからだ。
宝石を運んでいた脇坂ですら、お祓いせねばならないほどの悪鬼がとり憑いていたのだ。佐久間ほどの性根の悪そうな輩が、無事で済んでいるはずがない。
お亮は立ち上がった。このままでは佐久間に脇坂が殺されてしまう。それだけは絶対に嫌だった。悠乃介なら、脇坂にとり憑いたかもしれない悪鬼を祓ってくれるはずである。ならば今は、脇坂を守らねばならない。
冷えた牢の中で、お亮の居眠りに膝を貸してくれた。同士・山本の死を心から悼み、藩命のために命を賭して働こうとしていた。彼をこんなところで死なせてはならない。
やらねばならぬことを見つけたお亮に、怖いものはない。
「水戸のお侍さん！」
駆け出すと肩が重かった。ずっと荷物を背負っているような感じだ。自分の体がこんなに重かったかと、あらためて考え直してしま

うほどである。地面にのめり込みそうな足を懸命に動かして、五人の水戸藩士の元へと走った。
藩士たちは、お亮が近付くと刀を抜いた。
「何をしはりますの。今は脇坂はんを、助けなあきまへんやろ？」
「何故、助けねばならぬ。彼奴は裏切りものぞ。どういう成り行きかは知らぬが、我らが脇坂を助けるいわれなどない」
一番気難しそうな水戸藩士が声を荒立てた。凛々しいまでの太い眉が印象的だ。
「したが、舘林殿。私には解せませぬ。我らの元に届いた書状、真実、奉行所からのものであろうか」
お亮はそれを聞いてすぐさま「違いますわ、それは違います！」と言って、大きく手を横に振った。
「よう考えてください。なんで、そんな事を水戸藩に密告せなあかんのどすか？　宝石やったら、ほら」お亮は脇坂の背を指差した。
「脇坂はんの背中にありますがな。四の五の言うてんと、はようあれを水戸に持って帰らはったらええのんどす。あとの売買のことやったら、横浜大倉屋がなんとでも取り計らいますさかい！」
力強く叫んで、自分の胸を勢いよく叩きこんだ。我ながら商売上手だと、胸を張りたくなったほどだ。当主・藤吾朗の血がここまで濃く受け継がれていることに少々嫌気を感じつつも、水戸藩士たちの動揺した顔を見て、もう一押しだと意気込んだ。
「な、そうしまひょう！　うちは大倉屋の一人娘でお亮。うちの頼み事やったら、おとっつぁんかて、首を横に振るようなことは絶対にしまへん」
館林と呼ばれた眉の太い男が、ふんと唸った。
「ここはあきまへん。ここは化けもんの巣窟どす。はよう逃げんと、皆さんまで、ほれ、あの同心みたいに化けもんになりますぇ」
ぐるりと振り向いて、お亮は佐久間を指差した。
ちょうど佐久間が、刀を振り上げたところだった。
相変わらず脇坂には傷ひとつない。一方、佐久間は髪が乱れ、額

に汗をかき、顔面は蒼白であるにもかかわらず、口元からは涎がたれていた。鋭い犬歯でももっていれば、まさしく狼の如き形相である。

時を同じくして、辺りが薄暗くなり始めた。

八丁畷辺りは周囲が田畑で見通しがよく、平坦な真っ直ぐとした一本道である。ところどころに雑木林のような深い草むらもある程度だ。その景色が、霞んで見えにくくなってきた。深い霧に包まれて、視界がさえぎられたのに似ている。

霧が、薄黒いのである。

死者の慟哭の如き地鳴りも止むことがない。生暖かい風に包まれているのに、時おり冷えた風が頬や腕を撫ぜていく。それが不気味だった。

「それを寄越せ……」

聞こえた声は地鳴りのような響きだった。佐久間の声とはとうてい思えない。あろうことか、目が白目を剥いている。

「なんだ、あれは」

館林は、同士の遺骸から立ち上がった。

「そやし言うてますがな、化けもんや言うて！」

痺れを切らしたお亮は脇坂のもとへと駆け出した。化け物と化しつつある佐久間の狙いは、脇坂の背に結わえてある宝石だ。それさえ佐久間に渡せば、脇坂はとりあえず助かるかもしれない。あとは、きっとお亮を追いかけてきてくれている悠乃介にお祓いをしてもらえばいい。お亮は脇坂を助けるために、かなり短絡的にことを考えていた。

お亮の後ろから、水戸藩士たちもついてくる。

「脇坂はん！」

お亮は脇坂の左腕をつかんだ。

その時だった。お亮をわずかに振り返った脇坂の隙をついて、佐久間が斬りかかってきた。

白刃が返される鋭い音が鳴り響く。

水戸藩士の館林が脇坂の前に躍り出て佐久間の剣先を防いでくれた。
「お亮とやら、脇坂のことは半信半疑ゆえ、いまだ据え置くにしても、この化け物だけは成敗すべし」
館林をはじめ、水戸藩士たちが佐久間の前に立ちはだかった。
お亮は嬉しくて大声で礼を言おうとした。だが、脇坂が左腕を大きく振った。腕に捕まっていたお亮は、じゃれてぶら下がった猫が投げ飛ばされたように軽々と宙を跳んだ。地面に背中から打ち付けられて転がる。幸い、帯が座布団のようにお亮を守ってくれたので、衝撃は和らいだものの、落ちていた小石で肘や足に擦り傷がたくさんできた。
悲鳴すら、あげる間がなかった。
それでもまた、起き上がった。もう一度脇坂に駆け寄って、今度はうしろから腰の辺りを抱きかかえた。
同時に佐久間に向かっていたはずの館林が刀を左手に握り返し、脇坂に一瞥をくわえただけで背を向けたまま、力任せに脇坂の腹へ握っていた柄を叩き込んだ。
その隙に、踏み込んできた佐久間の刀が館林を横薙ぎに斬った。
脇坂の呻き声と、館林の呻き声が、かさなった。
「いやぁ！」
お亮の悲鳴とともに、脇坂が膝から崩れ落ちた。
「館林殿！」
残った水戸藩士四人が、館林にすがる間もなく佐久間と対峙している。
佐久間は白目を剥いたまま、目が据わっていた。何も見えていない様子だ。ただ、「それをよこせ」と念仏のように繰り返して、刀を構えている。
お亮は袖でごいと涙を拭うと、脇坂の胸で結び付けていた風呂敷包みを解いた。背中から重い音とともに地面に落ちる。その時一瞬、地鳴りが起こり、身体が傾いだことが分かるほどに揺れた。

宝石を背中から取り外してやると、脇坂が再び地面に昏倒した。
「脇坂はん……」
あれほど妖しい光を発していた瞳は閉じられ、脇坂は静かになった。
血の気を失った顔は、まるで死んだみたいであった。驚いて胸の辺りに耳を当てると、心の臓の鼓動がはっきりと聞こえる。
お亮は安堵して風呂敷包みを小袖の袂に入れると、山本を追った時と同じように胸に抱きかかえた。
途端に背中がぞくりとした。真冬に、炉で温まっていた身体を雪原に放り出したみたいだった。
京都で横浜行きをかけて蔵に籠った時にも同じようなことがあった。隅から這い出してきた醜い虫を見た時や大きな野鼠がお亮のそばを駆け抜けた時と同じ、酷い寒気だった。
嫌な気分である。何もかもが嫌になる。そばにいるもの皆が嫌いで、呪いたくなってきた。
らしゃめん、と言って蔑む者たち。
脇坂を信じない水戸藩士たち。
お亮をかどわかした与五郎。嫌な目付きで見下ろす佐久間。鍵を持っているくせに助けてくれなかった菊野という女。
それに悠乃介は何故来てくれないのか。
だいたい、横浜に来てから良いことなど一つもなかったような気がしてきた。やりたくもないお茶の稽古や、踊りの稽古、ご近所付き合い。愛想笑いに媚びへつらい。おまけに、お稽古を怠けると惣八にお仕置きされる始末だ。
どんなに憧れても、大好きな悠乃介とは、一生結ばれることがない。
そう……一生だ。悠乃介はお亮にとっては兄。いつかそばから離れて、誰か別の女と一緒になる。
嫉ましい。そうなる女が、急に憎くなってきた。
悠乃介の顔が目蓋に浮かぶ。

青空に浮かぶ白い雲のように優しくて、夕闇に光り輝く一番星のように綺麗な兄。部屋にある大日如来様と同じ、静謐な笑み。
真綿のように柔らかな声がお亮を呼んだような気がした。声が、お亮を我に返す。
「うち、なに考えてんのや……」
風呂敷包みを抱きかかえながら、また背中が重くなったような気がした。赤ん坊を、まるで二人背負ったように。
「よこせ……」
佐久間が刀を縦横に振り回しはじめた。白目を剥いた佐久間の瞳には妖しい光が閃く。脇坂が開いた目に光った赤い色と同じ、背筋の寒くなる目だった。それが、蛇がちろちろと舌を出すように、佐久間の目に妖しく灯る。まるで脇坂から佐久間に、獲物を変えて赤い瞳が乗り移ったように思えた。
水戸藩士たちも、佐久間の異様な気配に圧されていく。
お亮は大きくかぶりを振った。
ここから逃れなくてはいけない。この宝石を持っている限り、心には闇が住み着く。深い深い闇だ。人間が持つ、負の感情がどんどんと膨らんでしまう。ともすれば、お亮の中にある醜い思いが自身を呑み込んでしまうのだ。
脇坂を見下ろし、立ち上がった。数歩、後退って、それから駆け出した。
裾がはだけようと、蹴躓いて転ぼうとそんなことはどうでもいい。すぐに草履の緒が切れて、片方が脱げてしまった。足袋のまま、足に刺さりこむ小石にもかまわずに走った。

其の七・真の妖異……3

悠乃介は馬を急がせた。
たびたび嘶いて足を止める馬に鞭を入れ、強引に駆けていく。
東海道を東に進めば進むほど、肌が粟立ってきた。きっと近くにあの邪眼を持った妖かしの宝石がある。
悠乃介は袖のうちにひそめていた数珠を、しっかりと握り締めた。般若心経を唱えながら、お亮の無事を祈り続ける。
途中、信楽茶屋というところで馬に水をやった。馬は息があがりそうになっている。
「あと一息だから頼んだよ」
馬を労わってやりながら、遠く東を眺めた。邪気は間近に感じられた。宝石が近くにあることは間違いがない。
「さっきはびっくりしたよ」
「最近はどこも物騒で困る。あれもきっと、どこかの浪士にちげぇねぇ」
茶屋の前に置かれた畳敷きの腰掛に座っていた三人の旅人が、密やかに噂を始めた。すぐ隣に腰掛けた悠乃介に気付いて、その中の一人が声をかけてきた。
「ようよう、あんたはこれから、六郷の渡しの方へ行くんかい？」
「六郷の渡し、と言いますと……」
「あっちだ」
旅人は東海道の東を指差した。日本橋へと続く道だ。六郷の渡しは、今でいう多摩川で、堤防などはなく河岸からそのまま向こう岸へと続く川を渡す船着場である。
「今はやめたほうがいい。斬り合いやってるから」
「そうだ、兄ちゃん、あぶねぇよ」
彼らは親切気に行くのをよしたほうがいいと念を押した。
悠乃介は旅人たちに礼を言うと、それでも急がねばならぬ事情が

あるのだと説明して、馬が水を飲み終えたのを見計らって跨った。
鶴見川という小さな川を渡り、市場一里塚と書かれた石碑が見えたところだった。
見知った顔が、血相を変えて駆けてくる。悠乃介はあわてて馬を止めた。
お亮だ。
結い上げた髪は半分ほどけている。お亮に似つかわしくない地味な着物には泥がつき、裾や袖が破れていた。顔や手には小さな擦り傷があって、草履が片方ない。
それだけではなかった。お亮の背には、六、七歳と見まごうばかりの全身まっ黒い鬼が二匹、肩口に齧り付いていた。影、というよりは、大きな人型の木炭、というほうがいい喩えだ。
「お亮！」
視線も定まらない様子で必死に駆けていたお亮が、ふいと顔を上げた。
「悠乃介兄さまぁ！」
とたんに、大きな瞳から大粒の涙が豪雨のように零れ落ちた。
悠乃介は馬を下り、お亮に駆け寄って抱きとめた。馬は嘶いて、来た道を引き返していく。
胸の中でしゃくりあげるお亮の乱れた髪を撫ぜながら、沸き起こる愛しさとは裏腹に、背に齧り付く鬼を睨み上げた。
鬼が、急に大きな二つの赤い目を開けた。威嚇するように細かに生え揃った歯を剥き、枯れ枝のような細い腕をお亮の首に巻きつけた。
引かねば首を絞めるぞ、という鬼の意思表示にもとれる。
「お亮、一体どうなった？」
「今はそんなことより、これ」
鬼が甲高い奇声をあげた。
お亮が袂から風呂敷包みを取り出した。瞬間、地震のように大地が揺れ、低い慟哭が鳴り響く。

悠乃介の身体が傾いで、お亮がよろめいてきた。
「これは……この地には何がいるのだ」
悠乃介は風呂敷を受取るなり、懐から用意してきた曼荼羅が描かれた紙をとりだし、すばやく宝石を包み込んだ。再び、懐にしまいこむと、数珠を左手に持ち、不動明王の印を結ぶ。
「臨・兵・闘・者・皆・陣・烈・在・前！」
九印を唱え手刀をきる。今は一刻も早くこの宝石の邪眼を封印し、さらに悪鬼化生の類を呼び込まないようにすることだ。これ以上強力な邪念が漂えば、悠乃介一人の手に負えないどころか、近隣に住む者たちの精神まで壊してしまう。悪鬼は広がり、人は心を病み、諍いがあちこちで起こって余計な血が流れることになる。
「ナウマク・サマンダ・バザラダン・カン　」
悠乃介の低い声が、鬼たちを怯えさせた。
「お亮、しばし耐えよ……オン・キリキリ・オン・キリキリ」
印を結びながら、お亮の肩を数珠で祓っていく。祓いの真言を受けながら、お亮は後ろが気になって仕方ない風であった。
「あかん、兄さま！　佐久間が来たわ」
悠乃介はすぐさまお亮を背に庇った。懐に手を入れ、再び曼荼羅に包まれた宝石をお亮に手渡す。
「これを預かっていておくれ。でもいいかい、お亮。悪鬼がお亮の背中についている。だから、余計なことを考えなくてもいいよ。怖がらずに、私を信じていてくれるね」
数歩身を引いたお亮だが、すぐに胸を張って力強く肯いた。今のところは肩についている悪鬼も、悠乃介の神通力に怯えてなりを潜めているようだ。お亮ほどの気の強さなら、そうそう闇の世界に流されることもあるまい。
悠乃介は大きく息を吸った。
街道の東を見ると、すっかり視界を失っている。大波が砂浜に打ち寄せる勢いで、黒い霧が雪崩を打って押し寄せてきた。
「あのな、兄さま。この先は八丁畷というところで、無縁仏さんや

行き倒れの人が弔われていはるらしいの。そやし、あの霧やこの地面の揺れは、死んだお人の泣き声みたいですやろ？」
「なるほど、それで納得できた。この異常な気配は、そのためか」
邪眼が、大地に眠っていた無念や怨念を呼び起こしたのであろう。人の念は存外強く残っているものだ。本人の意志にかかわらず、引き寄せる物があれば容易に融合してしまう。
打ち寄せる黒い霧の中心に、佐久間影秋がいる。
佐久間には、お亮についていた悪鬼とは比べ物にならない化生が憑いていた。身の丈は佐久間の倍ほどもあり、もはや形を成していない。夕日に照らされてできた長い影が起き上がってきたように見えた。
土地に住み着く怨念をすべて吸い込んでしまったようである。吸い込んで、大倉屋に乗り込んできたときとは比べ物にならない妖怪と化していた。
これでは憑かれた佐久間自身に正気など残っていないであろう。化生の怨念だけが佐久間という人間の中に巣くい、人としての道徳も情念もすべて失ってしまったはずである。
宝石の邪眼が、人の怨念や嫉妬などの負の感情を呼び起こし、増幅させ、それを悪鬼が喰っていく。そうして、どんどんと悪鬼化生の類は力をつけてゆくのである。
悠乃介は生唾をのんだ。長々と喉の奥に閊えていた魚の小骨が、ほろりと取れたかのようだった。
もしも、宝石を野に放った人間の目的が、武器弾薬を売買する商売のためではなく、悪鬼化生を作り出すことにあったとしたらどうであろうかと。
宝石を巡って人々は必ず争う。そうでなくても、いま時代は混迷している。
幕府体制は崩れ、一方では公武合体、尊皇攘夷だと政策は割れ、地方の外様藩は次々と反旗を翻している。ご意見番としての地位を築いていた水戸藩ですら、過激派なる者がことを起こそうと画策し

ていると聞く。
嫉み、怒り、殺意。宝石を巡って沸き起こる感情は、悪鬼化生には堪らない栄養となっていたに違いない。石はあまりに多くの血を吸いすぎた。
黒い霧を背負った佐久間は悠乃介を見ると眉根を寄せた。
すでに目は白目を剥き、犬歯を剥き出しにして涎をたらし、餌に餓えた野生の獣の如き姿となっていた。胸元はおおきくはだけ、剣先でつけられた傷が見える。袖の袂はばっさりと斬られていた。
「寄越せ……」
大量の涎が口の中で佐久間の発声を邪魔している。それでも、ひたすら同じ言葉を繰り返して悠乃介に訴えてきた。
悠乃介はお亮を背に庇いつつ、後ずさった。後から、面識のない侍たちが三人、駆け寄ってくる。
「お亮、あれは？」
「水戸藩の人や。脇坂はんを、裏切り者やいうて、斬りに来はったんです。奉行所から文が来た、いうて」
「それは潮合がよすぎるというものだな」
「そうどすのんや、きっと、買弁の明宝というヤツが、なんかしたに決まってます。脇坂はんを浚うたんも、うちらを水戸へ連れて行こうとしたんも、みんな明宝が指示したんやと与五郎が言うてたもん！」
栄商会にいた菊野から聞いた名と同じだ。バラス商会にいる買弁だと言っていた。リズリーサーカスの日、目明しから宝石が行方知れずだと聞いて怒っていたのだと、菊野は教えてくれた。
佐久間が間をとって、刀を構えた。背にいる化生が独立して揺らめき立つ。笑い声がおこった。面白い観劇でも見た時のような、歓楽を尽くした笑いだ。
「私の名、呼んだか」
黒煙に邪眼が開いた。人間の目と同じである。黒い瞳があり、白目の部分が赤い。声は柔らかだった。子守唄を歌う母のように優し

く語りかけてくる。
「返す。それ、私のもの」
背に隠れていたお亮が、悠乃介の腕を鷲掴みにして、黒い霧の中に立つ佐久間を指さした。
「明宝や！　悠乃介兄さん、あれは佐久間やのうて、明宝の声や、間違いないわ。なんでやろうか、うちらを見送ったはずやのに、なんで……」
甘菓子の中にワサビを仕込んだような、対極的な響きが隠された声だった。片言の日本語を操り、優しげな言い方の裏に恐ろしい本性が隠されているのではないかと空寒くなる。
水戸藩士たちも、佐久間から距離をおいて足を止めた。一方の佐久間は肩で荒く息をしたまま、動きを止めた。
「宝石は返せません。これは浄化して、処分します」
悠乃介は数珠を前に出し、小さく経を唱え始めた。低い声で鳴り響く経が、黒い霧を圧していく。
「返す。浄化、無理。すでに、育った。独りでに妖かしとなる」
「すべて、お前が仕組んだものか」
「仕組む？」
佐久間の背後に揺らめいていた黒い化生が、悠乃介が想像するような鬼の姿へと変わっていった。佐久間の首に野太い腕を巻きつけ、耳まで裂けた口にのびる牙を剥く。耳の先は尖り、頭の先には角がある。錦絵に描かれる伝説の鬼の姿と同じだ。
鬼の右手が佐久間の右手をつかみ、左手が、同じく佐久間の左手をつかむ。やがて、互いの腕が同化していき、佐久間と鬼が一つになって見えた。
悠乃介の目には、佐久間と鬼が二重線を描いて重なって見えている。
「なるほど、そうやって人間を操ってきたわけだ」
「何を言っているのか、よくわからねぇな」
佐久間の声だった。涎をたらしたまま、口角を片方だけ引き上げ

て笑っている。
「なるほど、それなら合点のいくことも多い。例えば、栄屋正治ではないか？　明宝とやら、お前はそうやって邪眼を使って人と同化し、栄屋として水戸藩へ遣わせた。異国から安く仕入れた宝石を買わないかと、ね」
「ほぅ、それで？」
「水戸藩にも武器を斡旋し、商売を大きくしたいと考えたバラス商会を利用して、話を持ちかけたわけだ。水戸藩は明宝、お前の策略どおりバラス商会と契約し、まんまと下田まで出かけていった」
「それは面白い筋書きだ」
「水戸藩士たちを襲ったのも、明宝だな」
「ほほぅ……この私が、か？」
「そうだ。宝石に込められた邪眼は水戸藩士たちの血と恐怖と無念さを吸い取ってどんどん大きくなる。お前は菊野の知り合いだった佐久間を使って、生き残った水戸藩士を賊として追わせた。佐久間の中にある邪念は格好の餌だったろう？」
「では、裏切り者が出たと水戸藩に書状を送りつけたのも私だと？」
「この筋書きは、すべてお前が書いたものであろう？」
悠乃介は目を細めた。
「何のためにそんなことに手を染める。悪鬼化生を作り出したところで、買弁のお前に何の益があるというのだ」
目の前の佐久間に悠乃介は問いかけた。いまは佐久間であって、佐久間でない。邪眼によって吸い込んだ怨念が化生を造り、それが佐久間にとり憑いている。邪眼の持ち主の明宝だけが、その化生を操ることができるのである。下田を発った脇坂たちを、闇の中で襲ったのも、おそらく邪眼によって操られた明宝の化生に違いない。
佐久間――明宝は笑い出した。背をのけぞらせ、声を立ててひとしきり笑ったあと、真っ直ぐに刀先で悠乃介をさした。
「おのれは、一つ、勘違いをしている」
悠乃介は気付かれぬように、真言を唱え始めていた。形のよい唇

は、ほとんど動いていない。
ただ、明宝の言いように、柳眉をひそめた。
「確かに、私は買弁だ。香港で、バラス商会に語学力を買われて、通訳を申し出た。ただ、それは日本に渡るための方便」
明宝は、足を進めだした。
「私は清国で手広く両替商を営む山西商人でね。銀も手織物も扱う。もちろん、宝石も、だ。そう、ただの宝石じゃない。持てば必ず人が呪い殺せる、古の力を持った宝石なんだがね……近々、横浜と香港を結ぶ航路ができるとの噂でね、それで下見に来たわけだ……」
「日本の情勢を知って、悪鬼化生を宝石に乗り移らせるために来たと、そういうのか」
明宝は答えなかった。
「宝石に邪眼を埋め込み、悪鬼を宿らせ、それを人に売ると？」
「買う者がいるから売る。それだけじゃねえか。高く売れるんだよ、これは。人を呪い、貶めたい輩は、この世にはごまんといるのさ」
明宝は肩を揺らして笑いながら、手にしていた刀を自分の舌に当てた。赤い舌の上を白刃が滑っていく。
刀に佐久間の舌からあふれ出た血がまとわりついた。
「生まれたときから持つ、この赤い瞳。使わずしてなんとする。すでにその宝石には悪鬼が乗り移ったようだ。さぁ、帰してもらおうか……」
明宝は声高く笑った。
まさか、宝石を妖かしのものへと育て、それを人に売る商売をしているなどとは想像もしえなかった。確かに、今お亮が手にしている宝石を人に売れば、手にした者に不幸が訪れることは間違いがない。開いた邪眼が人の怨念を呼び込み、悪鬼を育て、精気をしゃぶられてゆく。それがどんどんと人の手を渡ってゆけばどうなるか、考えるだけでも恐ろしいことだ。
「許されない……そのようなこと」
悠乃介は九印をきった。

「ぬるいわ！」
明宝が足を踏み込んで刀を振り下ろした。人間業とは思えぬ速さである。ぶんと、鋭く空を切る音が轟いた。
「お亮、下がっていなさい」
悠乃介は明宝を睨んだ。

其の八・真昼に呑まれた妖異……1

悠乃介の背中は、とても広く感じられた。

背中の向こうには佐久間がいる。不思議なことに、佐久間から明宝の声がほんの一時だけ聞こえた。

幕府や水戸すらも裏で操っていたのは明宝だという。宝石を前に、人間の欲にまみれた争奪戦をあろうことか、明宝の手のひらの上で演じていたというわけだ。お亮自身すらも。考えれば考えるほど、小憎たらしかった。

「お亮、下がっていなさい」

悠乃介は厳しい声でお亮に告げた。けれど、返事はしなかった。下がって、悠乃介に守ってもらうだけの弱い女ではいたくない。ここぞという時は、明宝に一矢報いなければ、どうにもこうにも腹の虫がおさまらなかった。

脇坂はん、大丈夫やろうか。

ちゃんと息はしていたが、館林という者が不意打ちを食らわせてくれなければ、あのままとり憑かれた化け物に呪われていたに違いない。

お亮はそっと手を合わせた。

館林という侍は、脇坂を助けるために命を落としてしまった。館林だけではなく、四人いたはずの水戸藩士は、すでに一人、姿が見えなくなっている。脇坂や山本とともに宝石を運んでいた八人を入れると、明宝の手に十四人もの水戸藩士が犠牲になったことになる。

お亮は封印された宝石をいつものように袖の袂に入れて、胸に抱きしめた。どうしてこういう時に限って振袖でないのかと、舌打ちしたくなる。もしも振袖なら袂に宝石を仕込んで振り回せば、いい武器になるというのに。よりにもよって今日は袖の短い小袖だ。

佐久間が真っ直ぐ悠乃介に向かってきた。邪魔にならないように、距離をとって右側から回り込む。

お亮の目にはほとんどとまらぬ速さで刀が振り下ろされた。空を切る音だけが、耳につんざく。
悠乃介は切っ先を軽く左に飛び退ってかわしたようだった。
相手は武士、しかも達人らしい。悠乃介は刀無しで、どうやって渡り合うつもりなのだろうか。
お亮は思わず足元に落ちていた小石をつかんでいた。左手で胸に袖を抱え、右手で振りかぶる。幼い頃は的当てと称して、近所の悪がきどもとよく石を投げ合ったものだ。一番上手に的へ当てるのは、いつもお亮である。
石は佐久間の左耳のあたりに命中した。
「やった！」
佐久間がお亮を振り返って睨みつけた。白目を剥いたままの顔は、地鳴りや地震よりも恐ろしかった。
その隙に水戸藩士の一人が悠乃介に駆け寄り、脇差しの一本を投げ渡した。佐久間は驚くべき反射神経で、投げられた脇差しを弾き返す。そのまま腕を返して、得手とは反対の右側から横なぎに悠乃介を斬る。切っ先は悠乃介をかすり、旅商人姿の脇腹を切り裂いた。
大きく右から横にないだので、刀を返すまでに一瞬の隙が出来る。悠乃介は斬られたこともかまわず駆け出して、弾き飛ばされた脇差しに飛びついた。左手でしっかりと鞘を握ると、数回地面を転がって起き上がった。
佐久間はあっという間に体勢を整え、頭上から刀を振り下ろし、転がる悠乃介を寸断しようとしていた。
水戸藩士たちが阻止すべく佐久間を囲む。
佐久間と悠乃介の間に、水戸藩士たち三人が壁となって立ちふさがった。お亮からは佐久間の背が見える。
しまった、と思った時には遅かった。
佐久間は素早く踵を返し、お亮のほうへと駆け出していた。着流しの黒い着物が、烏が羽ばたいたようにひろがった。刀を正眼に構えたまま、真っ直ぐ向かってくる。

お亮は慌てて、円を描いて左側に逃げた。水戸藩士がお亮と佐久間の間に入ってくる。それを佐久間が一刀両断した。
息をのむと、喉が痛んだ。人が斬られてゆくのに、お亮には何もできない。
残った二人の水戸藩士と、佐久間の乱闘となった。
悠乃介は、左手に持っていた数珠を脇差しの柄に絡ませて握り締めた。刀を手刀代わりに九印を結ぶ。
「オン・シュチリ・キャラロハ・ウンケン・ソワカ」
真言の印には様々な形がある。
悠乃介は刀を一旦小脇に抱え、内縛印という指を組み合わせて拳骨のような形に手を結び、不動明王の真言を唱え始めた。印を結び換えながら、低く響く声が、黒い霧を裂いていく。
「オン・キリキリ、オン・キリキリ」
指を立てたり、開いたりしながら、転法輪印、外五鈷印と呼ばれる印を結んで、真言を唱えていく。指を組んで人差し指を高く立ててあわせる諸天救勅印を結んだ。素早い動きであった。
「オン・キリキリ・キャクウン」
再び印を変えると、鋭い声が響く。真言が唱えられると、悠乃介の声にのせて、水戸藩士と斬りあう佐久間の動きが鈍くなった。
気合の声が、悠乃介の口から出たとは思えぬ迫力で佐久間を捕らえた。
不動金縛りの法によって、佐久間の動きが封じられた。それでも、完全に封じることができないのは、明宝の力が強いか、八丁畷でわだかまる怨霊たちの念が邪魔しているのか、お亮には分からない。
けれども悠乃介の術を黙って眺めていたわけではない。悠乃介も水戸藩士たちも戦っている。自分に一矢報いることがあるとすれば、手持ちの武器は一つしかない。
袖の脇から細くて白い腕を出して屈み、宝石をしまいこんだ袂を足で踏みつけると、勢いをつけて身を引いた。袖はあっけなく肩口から解けた。三度ほど踏みつけたまま身を引くだけで、袖は着物の

身ごろから、見事に裂けてしまう。
「安もんはあきまへんなぁ。簡単に引きちぎれてしもうた」
袂に宝石が入ったままの袖をつかむと、一捻りしながら佐久間の背後から駆け寄った。
ちょうど、動きが封じられたところだった。佐久間は金縛りにあったように硬直している。
思い切り振りかぶって、宝石の入った袂を佐久間の後頭部に打ち付けた。鈍い音がした。
「ぐふぇっ」
「お亮いけない！」
悠乃介が脇差しを手に持ち替えて駆け出すのが見えた。見上げると、佐久間がぎこちない動きで後ろに立つお亮を見返してくる。
あっと、思った時には、脇から水戸藩士の一人が斬り込んでいたが、佐久間は見もせずに刀を返して刃を弾き飛ばす。
刀がお亮に向かって振り下ろされた。

其の八・真昼に呑まれた妖異……2

同時に悠乃介がお亮を抱きかかえる。何が起こったのかわからないうちに、悠乃介とともに地面に転倒した。

間一髪、悠乃介の右頬を刃がかすって、佐久間の動きが止まった。不動金縛りの法が効いているらしい。

悠乃介は脇差しから刀を引き抜くと数珠を巻きつけ、小さな声で経を唱えながら、刃を返した。そのまま佐久間の脇腹に横なぎに刀を打ち込む。

刀背打ちにされた佐久間は、大木が打ち折られて倒れるように、ゆっくりと地面に沈んだ。

倒れこむ佐久間に駆け寄った悠乃介は刀を逆手に持ち替えて振り上げた。

お亮は思わず目を閉じた。悠乃介が人を殺めるところなど、見たくもなかったからだ。

がきん、という鈍い音が、聞こえる。

「何故、斬らぬ！」

水戸藩士が振り上げた刀を、悠乃介が脇差しの鞘で止めた。お亮はそこで目を開けた。

「この同心の始末は、神奈川奉行所がおつけになること。今ここで斬ることは容易いですが、それでは私たちは人殺しだ」

脇差しは佐久間の左耳のすぐ横に突き立っていた。

悠乃介は座り込み、脇差しに手を当てて数珠を絡ませたまま、経を唱え続けた。

「オン・アボキャ・ベイロシャノウ・マカボダラ・マニ・ハンドマ・ジンバラ・ハラバリタヤウン……」

そのまま心経を唱え続ける。霧が少しずつ引き始めた。陽の光が、重い雲の合間から差しはじめてきた。まるで後光のように、空から差し込む細い光が、いくつも地面を照らし出した。

慟哭がおさまっていく。身にまとわりつく冷えた空気が、温かみを増していった。
お亮はじっと悠乃介を見ていた。
突き立った脇差しの下には、きっと明宝がいるのだろうと、お亮は思った。明宝が持っていた邪眼を貫いたに違いない。明宝は生身の人間だった。街道で見送っていた姿はしっかりと記憶している。相模にはいくつも関所があって、異人は自由に歩くことができないはずであるから、明宝自身は関内に戻っているはずだ。
邪眼を貫かれた明宝の生身の身体は、どうなったのだろうか。
霧が収まって、あたりがすっかり元通り明るくなってきた頃、どこから現れたのか旅人たちが、お亮たちを囲んでいた。
「どうしなさった」
一人が声をかけてきた。あっという間に、人だかりができた。
ようやく、生き残った二人の水戸藩士が我にかえって刀をおさめる。
「申し訳ありませんが、彼は罪人です。近くの関所に、連絡が入るようにできませんか」
水戸藩士を振り向いた悠乃介の右頬は血にまみれていた。身体にはいくつも切り傷ができ、脇差しを握る手も血まみれであった。
「悠乃介兄さま！」
お亮は駆け寄って悠乃介の背に手を添えた。微笑を返す悠乃介が、ぐらりと傾ぐ。
「いやだいやだ、しっかりしとくれやす」
「大丈夫だよ、お亮……深い傷はありはしないから」
二人の水戸藩士が、悠乃介のそばで跪いた。彼らもまた、あちこちを切り裂かれ、手といわず顔といわずに血が流れている。
「私は水戸藩士、田辺と申す。こちらは宮川。これから我らは、籠の手配をいたします。子細は後ほど」
「田辺殿、私は脇坂を」
「ふむ、頼んだ、宮川殿」

田辺、宮川と名乗った、壮年の藩士たちは、悠乃介に頭を下げると各々の役目を果たすために散っていく。
佐久間は白目を剥いたまま、昏倒していた。
一方の悠乃介は、脇差しから手を離そうとしなかった。傾いだ体をお亮に預け、大きく息を吸った。
「これで終わったわけではない……急ぎ、宝石を処分せねば。やはり、大京寺の方丈様のお力をお借りしよう。私にはこれまでの力しかない」
「兄さまは、十分おやりにならはりました。おおきに……助けに来てくれて、ほんま、おおきに」
悠乃介の笑みが、お亮の救いになる。胸に熱いものが込み上げてきた。脇坂の顔が目蓋に甦る。
目を落とすと、お亮の脇に、破れた袖に潜んだ宝石が転がっている。曼荼羅と印によってではあるが、封印された宝石はものもいわずに鎮座している。
なんと罪深い宝石であろうか。人をこのように惑わし、多くの血を流した。
けれど、惑わされたのは人だ。
「うちな、よう分かった。怖いのは化けもんなんかやないって。一番怖いのは、人の心やって。人はなんと、醜い心を持ってますのんやろうな。うちの心の中にも、ちゃんと怖いもんがあったんや」
お亮はそう言って、自分の胸に手を当てた。
「みんな闇をもってる。みんな、胸のうちに化けもんを飼うてますのんやなぁ……それがな、よう分かったわ」
目尻から静かに涙がこぼれ出た。
悠乃介が血にまみれた腕を伸ばし、お亮の目から零れ落ちる涙を拭ってやった。お亮の顔にわずかばかり血糊がつき、涙が赤く変わっていった。
「けれど、お亮は闇をもっていることを知ったではないか。知っているということは、とても強いことなんだと思うよ。自分に闇があ

ることを知っているのなら、光を当ててやればいいではないか……闇の中に、昼をつくってやるんだよ、お亮」
「そんなことできるん？」
「知っていたら、できるよ。人を嫌うのも、好くのも、どちらも同じ人ではないか。どっちを選ぶのかは、自分で決めることだからね」
お亮は空を仰いだ。日は傾きつつある。真昼の太陽は少し脇に逸れようとしていた。まだ辺りを明るく照らしている。
「闇に、昼をつくるんか。簡単そうにみえて、それって難しいんと違うやろうか、悠乃介兄さま」
「そうでもないよ……」
悠乃介はなにかを思い出したように、懐の深いところに手を入れた。片方の手は脇差しからけして離さないままだ。
「お亮、これのおかげだよ」
とり出したのは、長崎土産の鼈甲の櫛だった。赤い椿が繊細な筆捌きで描かれている。
「悠乃介兄さま……」
ちゃんと櫛は悠乃介が拾ってくれていたのだ。それで、助けに来てくれた。嬉しくて嬉しくて、心の臓が弾け飛びそうになった。
「お亮は……私には真昼みたいなもんだ」
悠乃介はそう言って目を閉じた。目を閉じたまま、静かに深い呼吸を始めた。脇差しを握り締めたまま、お亮に身を預けて、ふいと意識を失っていったようだった。
「うちが、真昼？」
お亮には、悠乃介がどういう意味でそう言ったのか、見当もつかなかった。それでも、自分の膝の上で静かに寝息を立てる兄を見て、心が和いだ。
悠乃介の手の中には、鼈甲の櫛がある。大切に持っていてくれた櫛だ。それだけで、お亮の心はいっぱいになった。
遠くから籠の声が聞こえてくる。
水戸藩士が呼びに行ってくれた籠が来たらしい。これでようやく

大倉屋に帰ることができる。お亮は胸が張り裂けそうなほど大きく息を吸って、ゆっくりと吐いた。

＊

横浜大倉屋では、惣八が目を血走らせて待ち構えていた。

籠が着いたのは、翌々日の昼八ツ（午後二時ごろ）だった。先に連絡がいっていたはずなので、どうやら店の前で行ったり来たりして、ずっと待っていたようだった。

籠から降り立ったお亮を見るなり、怒り狂うかと思いきや、小粒な瞳から涙をこぼし、懐から手ぬぐいを出しておいおいと泣き始めた。

さすがにお亮も胸が痛んだ。これほどまでに惣八が心配してくれていたのかと、今までいろいろと悪さをして申し訳なくさえ思った。今度のことは極めつけになってしまったし、きっと藤吾朗からも叱られるであろうから、しんそこ反省した。藤吾朗に言って、特別手当を出してもらうことも厭わないかなと考えた。

「ほんま、よろしゅうございましたわ。さ、お前たち、若旦那さんをお連れして。ほんま、お嬢さんもご無事で何よりでした」

うしろの籠から悠乃介も降り立った。風呂敷包みを抱えている。もちろん、泊まった旅籠でしっかりと封印した宝石である。邪眼は封印しておく限り、何も見えず、何も仕掛けることができないらしい。いま宝石は目隠しをされたのと同じ状態にある。山本が大倉屋に宝石を預け、悠乃介が封印し、脇坂が籠の中で封印を解くまでは、どうりで、明宝が手出ししてこなかったはずだ。

悠乃介の傷の手当も、すでに終わっていた。

すぐそばにあった信楽茶屋の主人はとても親切だった。駆け込んだ水戸藩士の話を聞き、すぐさま本牧にいるという名医を連れてきてくれた。

悠乃介と水戸藩士たちは、茶屋で休ませてもらってじっくりと怪

我の手当てができた。
二晩世話になるうちに、お亮の背についていた悪鬼のお祓いまで済んだ。
多くの旅人たちの手によって運ばれてきた脇坂も瀕死の状態であったが、ちゃんと息をしていた。医者によれば、右の腕が少々化膿しているものの、命に別状はないようだった。ただ、右手は二度と使い物にならないだろうとのことだった。刀を握り締めた手はすでに半分千切れており、動きもしなかった。脇坂はそのまま本牧の療養所で、半年あまりを過ごすことになる。
水戸藩士・田辺と宮川は、報告のため、一旦江戸藩邸に戻っていった。蟄居謹慎している脇坂の父である目付け・軍太夫の無実も訴えねばならないし、宝石を売ることができない事情も、藩主に説明せねばならない。
それに関しては、悠乃介が大京寺の方丈とともに、いずれ江戸藩邸に出向くことで話が落ち着いている。浄化が巧くいけば、宝石は元の石として、売ることも可能になるであろう。大京寺にいる竹香方丈の力を借りれば、必ずそうなると悠乃介は言った。
「ほんま、遅うおましたなぁ。お嬢さんの姿を見るまで、生きた心地がしまへんでした」
「ごめんな、惣八」
お亮が素直に謝ったとたん、惣八が青くなった。懐から手ぬぐいを取り出し、薄くて広くなった額を拭う。
「なんやの？　何ぞ悪いことでも言うた？」
「いや、お嬢さんがあんまり素直に謝らはるから、何ぞ起こるんとちゃうかと……」
思わず眉間に深いしわが寄った。いったい惣八は、お亮のことをなんだと思っているのかと向かっ腹が立ったが、たくさん心配をかけたことを考え合わせると、反論する気が起こらなくて、大人しく口を噤んだ。

其の八・真昼に呑まれた妖異……3

数日後のことだった。
悠乃介が羽織に着替えてお店に出てきた。
「兄さま、まだ寝てやなあきません」
惣八の言いつけ通り、抹茶茶碗の片付けや香炉磨きをしていたお亮が立ち上がった。その拍子に、膝にのせていた清水焼の高級香炉が転がり落ちて欠ける。あっと思った時には遅かった。すぐうしろに、歯噛みをしながら立ち尽くす惣八が手ぬぐいを握り締めていた。
必死で謝ってから、悠乃介を奥に連れて行こうとするが、頑として首を縦に振らない。
「やはり、行ってくるよ、お亮」
「あかんって、言うたやない。明宝のことは、もう関わり合いにならんとおきまひょ。宝石だけ、浄化できたらええやない」
悠乃介は懐から書状を取り出した。
「さっき、竹香芳悦和尚さまから届いたんだ。もちろん、宝石は護摩祈祷を執り行えるよう、川崎にあるお寺にも連絡してくださったそうだ。方丈さまもじきに、こちらに来られると思う。私もその時は、ともに行くつもりでいるが……」
「それだけやったら、あかんの？」
悠乃介は困ったように失笑して、首を縦に振った。
「ほんなら、私も連れて行かなあかんぇ」
「そう言うと思っていたよ」
歯噛みして怒る惣八を供に連れて行くことで納得させた悠乃介とお亮は、さっそく大倉屋を出た。
調べたところによれば、バラス商会は山下居留地にある。すぐ脇が中華街だと聞いて、お亮は背筋が寒くなった。お亮自身は佐久間に憑いていた明宝を見たわけでも、赤い目が開いているのも見たわけでもない。が、籠から降りたあと、初めて見た明宝の刃のような

鋭い顔が今も脳裏に焼きついている。辮髪を結い、高い頬骨に細い目。あの目が開くと赤いのかと思うだけで、真冬に井戸の水をかぶったみたいに寒くなる。

「ほんなら、明宝という清国のお人は、生まれつき邪眼を持ってたというわけやね」

「本人はそう言っていたね」

どこか、納得していない、という言い方であった。

悠乃介は籠を呼ぶという惣八をおし止めて、歩いていた。わずかに足を引きずっているのは、腹の傷が引きつるためだという。もっと痛々しいのは、お亮を守るためについた右頬の傷だった。今は傷を覆っているので見えないが、もしかしたら一生傷が消えないかも知れぬと医者が言った時には、お亮は失神しそうになった。

役者のような綺麗な顔に傷が残ると思っただけで、寝込みそうだ。

当の本人は何も言わないが、かえってお亮は辛かった。

「どうもあらへん？」

お亮は悠乃介の手をとった。春風のように優しく笑う悠乃介に、少しお亮の心の荒波がおさまった。

現在でいう日本大通りを越えると居留地である。

洋館が立ち並び、雰囲気ががらりと変わる。すぐ近くに中華街を見ながら、そのまま元町通りを歩いていると、大倉屋の二軒分はあろうかという洋館から、黒い着物姿の女が異人と連れ立って出てきた。

「菊野さん」

女は悠乃介を見ると、艶やかに微笑んだ。その後、隣りで支えるように手をとっているお亮を見ると「おや」と言って、小首を傾げた。

菊野は相変わらず黒に錦糸の入った芸子のような着物を身にまとっている。赤い紅が目鼻立ちのはっきりした顔に映えていた。異国の言葉で「うぇいとあもーめんと、ぷりーず」と言ってから、菊野は悠乃介に駆け寄ってきた。

お亮はあの狭くて冷えた牢の中で、菊野が運んできてくれたおむすびにどれほど救われたかを思い出し、礼を言おうと口を開きかけた。だが、菊野はお亮を無視して悠乃介に極上の笑みを向けた。少なくとも、お亮にはそう見えた。

「ほんとにやったんだねぇ。佐久間は乱心した状態で戸部奉行所に運ばれたらしいよ。正気を失っていると、聞いたけれどね。だけどもよく助かったねぇ」

菊野はすっと悠乃介の右頬に手を伸ばしてきた。

「傷をつくっちまって。綺麗な顔が台無しじゃないか」

「菊野さんがいろいろ教えてくださったからです。助かりました。ありがとうございました」

「嫌だねえ、あたしゃ、何も言ってないよ」

お亮の口が尖ってきた。あまりに親しげな二人の様子を見ているとつまらない。つまらないどころか、自分だけはみ出し者みたいだった。ひどく似合いに見えた。なんと釣りあう二人であろうか。それが余計に面白くなかった。

「おやまぁ、オチビちゃんが拗ねてしまったよ」

猫が歯を剥くように、今にも噛み付きかねないお亮を悠乃介が背に庇って、「今からバラス商会を訪ねようと思っていたのです」と言って、うしろで待つ異人を見た。

異人は洋装で頭に四角く見える帽子をのせている。ステッキをつき、顎には金髪のひげが蓄えられていた。

「バラスだよ」

視線を感じたのか、バラスは人なつこく笑みをたたえる。歩み寄って、手を差し出してきた。悠乃介の手が華奢に見えるほどだ。しっかりと手を握り合うと、悠乃介は日本人らしく頭を下げた。

菊野はバラスに、なにやら異国の言葉で話しかけ、再び悠乃介に問いかけた。

「明宝に会いに来たのかい？」

「何故、それを？」

菊野は鼻でせせら笑った。
「詳しくは知りゃしないけどね、佐久間と明宝がつるんでいたのは知っているから、そんなとこかと、思ってね。だけど明宝はね、くびになったよ」
「買弁、やめましたんか？」
悠乃介の背から飛び出して、お亮は叫んだ。
「そうさ、何日前のことだったろうねぇ。これに関してはバラスもかなりご立腹だよ。突然、幕府要人との商談の席を立ち上がって中華街の自宅へ戻ったかと思ったら、目の辺りに大火傷を負っていてね。とても人前には出られやしないよ」
「やはり」
悠乃介はたった一言呟いた。
あの時、佐久間の脇につきたてた脇差しは明宝を貫いていたのだ。邪眼が潰された明宝は、たとえ生身の身体をそばにおいていなかったにしても、無傷ではすまなかったのであろう。
「あのお侍は？」
「無事です。助け出せました」
「それはよかったねぇ。無事だったんだね」
お亮はこれ以上二人に会話をさせまいと、悠乃介の前に出た。少し頬が膨らんでいるのは致し方ない。酷いやきもちだと思ってはいたが、今は傷ついた悠乃介を守るのは自分ひとりでありたいという我がままでもある。
「荷物に憑いていた妖怪は、兄さまがお祓いしはります。もう何も心配はありまへん。あの時はほんまに世話になりました。おおきに。さ、悠乃介兄さま、行きましょう」
「お祓い？　骨董屋の若旦那さんが？」
背を向けて行こうとしていたお亮の背に、楽しげな菊野の笑い声が聞こえてきた。細くて白い手を口元に当てて、わずかばかり目を細めて笑う姿まで婀娜っぽい。
「何だかよく分からないけど、面白い商売してるじゃないかい」

菊野の隣に立っていたバラスが肩に手をのせ、「ヘイ」と言いながら、親指を立てて後ろを指差す。菊野も「オッケー」などと、お亮の分からない言葉でバラスと会話をしている。

どう見ても遊女崩れっぽくて、色気ばかりに見える菊野だが、異国語を粋に扱っている姿はいかにも横浜の新しい女という感じであった。

なんだか女としても負けたような気がして、お亮は悔しくなった。

「兄さん、あたしゃ、今度、栄商会に別の看板を持つことにしたんだよ。兄さんに嬉しいこと、言ってもらったからねぇ。ちょいと考えたのさ。それで、三味線と長唄、教えることにしたんだよ。また遊びに来ておくれね、チビさんも」

「チビやありまへん、お亮どす」

頬を膨らませながら反論したが、菊野は小さく笑っただけだった。バラスに手をとられ、菊野は踵を返す。しばらく行ってから振り向いて、「そうだ、今度ね、兄さんに御礼をしておくよ。兄さんの商売、集まった生徒さんにでも、宣伝しておくからね」と、空いている手をヒラヒラと振って見せた。

「なんやのん、あれ」

唇を尖らせるお亮を見て、悠乃介は薄い笑みをたたえながら、「あの人は強い人だね」と言って菊野を褒めた。

「明宝のところへ、行きますのやろ」

悠乃介が自分以外の女を褒めるなんて、なんだか気分が悪い。けれども、だからと言ってそんな気持ちを悠乃介に悟られるのだけはごめんだった。

お亮はむくれながら、中華街へと足をすすめた。とにかく、悠乃介にとっては明宝に会って決着をつけないと、今回のことは終わらないらしい。

早く終わらせたかった。終わって、またゆっくりと悠乃介と横浜で過ごすのだ。元気になったら、本牧で療養している脇坂を見舞いにも行きたい。

元町通りから朝陽門をくぐってすぐ、人に聞きながら、寂れた路地を入ると明宝の住まいがある。清国で商人をやっているだけあり、構えは立派だった。

まわりを歩く者の中には、着物姿や洋装、立襟で、一見着物のような服を着た者など様々である。横浜の中にあって、清国であり、清国でない、異国と横浜が融合した不思議な空間であった。

惣八は買弁と話し慣れているので、懐から紙と筆を取り出し、明宝の住まいであろう建物から出てきた清国の者と会話した。どうやら彼は医者であるらしい。親切にも一旦、館に戻って、使用人を連れ立ってきてくれた。それでようやく悠乃介たちは明宝と会うことが叶った。

通された部屋は広かった。大倉屋の十畳二間続きの部屋と変わらない。内装は洋風だった。高い天井あたりから腰の高さまである窓から、明るい日が差し込んでいる。床には毛足の長い絨毯が敷かれ、壁には曼荼羅が描かれた布が掛けられていた。

お亮は目を擦った。部屋は明るいはずなのに、一瞬黒い影が横切ったような気がしたからだ。

再び目を凝らすと、部屋の最奥に明宝はいた。左目を白い布で覆っている。

人が三人はゆったり座れようかという椅子に足を投げ出し、一人で腰掛けていた。肘掛に手をおき顎に当て、入ってきた悠乃介を睨みつけた。

「なぜ、来た」

お亮が籠から降りた時に見た明宝と同じだ。辮髪で、独特の袖の形をした着物を着ている。裾からはズボンが覗き、足には靴を履いていた。

糸のように細くて鋭い右目が釣りあがっている。怒りのせいか、頬が紅潮していた。

隣に立つ悠乃介を振り返ると、珍しく眉をひそめて明宝を見ていた。

お亮には兄が何を見ているのかわからない。明宝のうしろに、まだ恐ろしげな悪鬼化生でもみているのかもしれない。
悠乃介は臆せず名宝のそばに歩み寄り、近くにあった机に懐から小さな包みを出して置いた。
「なんだ」
「金子です」
明宝は左目に手を添えながら、机の上に置かれた包みを解いた。金の棒だった。
「それだけあれば、宝石の変わりになるでしょう」
脇に立つ悠乃介を見上げて、明宝は小さく舌打ちした。
「目の代金ではありません。あくまで、宝石の代金です。あれは私が買い取ります。ならば、そのあとどう処分しようと私の勝手」
どこまで悠乃介の言葉が明宝に伝わっているのかは分からない。お亮は惣八と部屋の入口に立ったまま、生唾をのんでいた。
今ここで、明宝が邪眼を使って何かを仕掛けてきたら、また悠乃介が傷つくかもしれない。そう思うと恐ろしい。
「取引、か」
「そうです」
肯く悠乃介に、明宝の口元が綻んだ。鼻から息が漏れ、薄い唇が上に引きあげられる。
「商売、やめない。目、失ったわけではない」
「その背にいる妖異、知っているのでしょう？　死ぬつもりですか」
明宝は答えない。
悠乃介は明宝に頭を下げた。片目を失った明宝を殺めることくらい、今なら簡単だったかもしれない。明宝はこれからも、邪眼を込めた宝石を人に売り続けることだろう。人を呪い、不幸にしたい者が、それを買い求めていく。人が闇の心を認めない限り、明宝一人を消したところで同じことだ。第二、第三の明宝が、必ず広い世界にはいる。
わずかに足を引きずりながら明宝に背を向けた悠乃介を、お亮は

できるだけ優しく微笑んで向かえた。
「帰ろう、悠乃介兄さま」
「そうだね」
中華街を出て、しばらく誰も言葉を発しなかった。
あまりに失った者が多くて、お亮の目にも涙が滲む。
山本の顔が浮かんだ。怯えた長吉の顔もである。お亮に力さえあれば、明宝など一突きにしたって足りないくらいだ。
「なんや、悔しいわ……兄さま」
「ほんまやな。さっき、明宝を見た時は、思わず飛び掛りたい気ぃになった。やけど、そないなことしても、長吉も山本さんも、喜びやせんやろう……な、そう思わんか、お亮」
珍しく、幼い頃から使い慣れた京都の言葉で、悠乃介は静かに呟いた。
「うん……そやね。あの人の後ろにも、化け物が憑いてたん？」
「そうや、もう独立して動けるようになってると思う。きっと、みんなを殺めたのは、あの化生やろう……そやけどな、お亮」
悠乃介は足を止めて、空を仰いだ。
「私が何もしなかったのは、もう、あの人は死ぬことを覚悟しているからや。佐久間を見たやろ。明宝も、ああなることを知っているのや」
「うん」
二人は寄り添うように歩いた。
お亮が明宝の死を知るのは、まだ少し先のことである。
おりしも、天狗党がいよいよ激戦を始めた七月七日のことであった。資金調達に失敗した腹いせに放火などを行って暴徒と化した天狗党に対し、保守派も党員の家族などを殺害するなどの報復に出て、情勢は混乱を極めていた。天狗党の藤田小四郎や武田耕雲斎をはじめとする三百五十人あまりが斬首となって乱がおさまったのは、翌元治元年三月である。あまりに多くの血が流れた、水戸の悲劇であった。

元町通りをしばらく歩くと、横浜港が見える。
多くの者が夢を見るために。そして夢を買うために。集まっては喜び、傷つき、笑いあったり泣いたりしている。
どうか一人でも多く、笑っていられる夢を買えますように。
お亮はしんそこ、神仏に祈った。

終章・未来へ駆ける妖異

横浜大倉屋に、何度目かの雷が落ちた。

ただの雷ではない。大倉屋の奥座敷を揺るがすような怒声が鳴り響いたのである。

お亮の前には藤吾朗が座っている。胡坐をかいて、拳骨を両膝にのせていた。野太い眉に四角い顔、少し厚いかとも思える唇は、しっかりへの字に曲がっている。どこかしら、お亮に似ているのは、正真正銘の親子だからであろう。

藤吾朗は悠乃介から手紙を受け取ってすぐに京都を出立したらしく、どうやら籠を急がせて、二週間あまりかかる道のりを十日でやってきた。京都のお店を放置してきたのであるから大胆だ。

「お前は京都に連れて帰る。ええな。わかったな」

何度も念を押して、再び雷が落ちた。拳骨がお亮の頭に電撃の如く落ちたのである。

「痛いなぁ、そないに怒らんでも、十分反省してる」

「お前の十分を、信じられるとでも思うているんか？　今までそう言うて、なんべん、裏切られたかしれやせん。三条様にも京都奉行様にも、おとっつぁんが何べん頭下げたと思うてんのや。見てみぃ、惣八の頭もまた薄ぅなった。どないすんのんや」

「そやかて、そりゃあ、うちが悪いんかもしれんけど、それの何倍もあっちが悪いんや。今度のことかて、うちが宝石を同心に渡しとったら、脇坂はんかて死んではったし、水戸の人らかて困ってしまわはりましたえ？　結局、水戸藩と仲ようできたんやし、文句言われる筋合いはあらへん」

「口の減らんやっちゃな。結果はどうあれ、お前はどんだけ、人に迷惑かけたと思うてんのや。悠乃介を見てみぃ。大事な跡取りが、傷だらけやないか」

「そやし、仕方なかったと、言うてますやろ」

「絶対許さん」
「京都になんか、絶対に帰らへん」
お亮の頬が、これ以上膨らまないというところまで膨らみ、目が釣りあがった。
障子の向こうには丸い影が映っていて、小刻みに揺れている。おおかた様子を伺いに来た惣八が笑いを堪えているに違いない。それを見ているだけでも、お亮の虫の居所はさらに悪くなった。
京都になぞ戻ってなるもんか、と、強く決意している。
そのためなら、再び蔵に籠ることなど造作もない。今度は味方をしてくれる悠乃介がいる。なんだったら、菊野のところへでも家出したってかまいやしなかった。
「お亮、一度京都へ戻ってはどうだい？」
悠乃介が荒波に一石投じるように、静かな声音で言った。
「悠乃介兄さままで、そないなこと言うの？」
「ほれみろ」
藤吾朗は、ざまあみろ、とばかりに鼻で笑った。
隣に座っていた悠乃介が、膝の向きを変えてお亮と向き合った。寝間代わりの白い着物の下には、いくつもの傷が隠れている。右頬に薄く残った切傷はお亮を守るためについたものだ。それを見ると、お亮はまた半べそになる。
「これからも横浜では何があるか分からないよ。異国相手の商売だ。今度のこともそうだが、お亮には刺激が強すぎるのではないかな」
「悠乃介兄さま……」
途端に涙があふれ出て、悠乃介が見えなくなった。藤吾朗に何を言われようと涙の欠片も出ないが、悠乃介に帰れといわれると涙腺が穴のあいた襤褸布のようになってしまう。
悠乃介がお亮の身を案じて言ってくれていることは分かっていたが、そばに居なくていい、と撥ねつけられたように感じられて、酷く悲しかった。
への字に曲がった口に涙が入ってきたので、大仰に袖で顔を覆っ

て泣き伏した。
すかさず藤吾朗が「嘘泣きはあかん。そんなことしても、あかん」と、また鼻でせせら笑う。
そこへ「すんまへん」という声とともに、障子が静かに開けられた。
手代が一人、藤吾朗と悠乃介に、順に頭を下げて挨拶をする。
「なんぞ用事か？」
藤吾朗が使用人を使い慣れた声音で居丈高に言った。
手代は恐縮したまま、頭を上げずに答えた。
「すんまへん、若旦那さん。お話中ですが、店に出ていただけまへんでしょうか。私らだけでは、手におえまへんのです」
藤吾朗と悠乃介は目を見合わせた。お亮もぴたりと泣き声を止め、顔を上げる。
「ほんなら、私も行こうか」
藤吾朗が大熊の如く立ち上がった。そのあとに悠乃介とお亮も続く。
奥の屋敷からお店に近付くにつれ、騒がしい声が聞こえてきた。大勢の客が着ているらしい。骨董屋にしては珍しいことだ。
お店の玄関がある表へと通じる暖簾を持ち上げた藤吾朗は思わず絶句していた。
間口十間ほどのお店の店先が、人で埋まっているのである。ざっと十人以上はいる。皆一様に、手には風呂敷包みや木箱を抱え、当主がやってくるのを、今か今かと待ちわびているようだ。
「今日はようお出でくださいました」
藤吾朗が飼いならされた猫のように柔和な顔を作って丁寧に頭を下げても、客たちのざわめきはおさまらない。よくよく聞くと「竹邦悠膳」の名を呼んでいる。
その中の一人が回りの人間を押し退けて前に出てきた。どうやら悠乃介の顔を知っていて、藤吾朗の脇から顔を覗かせた悠乃介を目ざとく見つけたらしい。

「若旦那さん、やっと来てくれましたか！　実は、この箱には古くから伝わる壷が入っておりまして」
男は店先にずいっと木箱を差し出した。大人の膝丈はあろうかという大きさだ。
「夜毎奇怪な音がいたします。どうぞ、祓ってやってくださいまし」
藤吾朗もお亮も、とうの悠乃介ですらすぐに返答できなかった。藤吾朗と悠乃介は顔を見合して眉をしかめている。
店に来た客たちは、悠乃介と藤吾朗の返事を今か今かと、期待に満ち満ちた瞳で待ちわびていた。
お亮はしてやったりと微笑んだ。これは大日如来様のご褒美だ。お亮が横浜にいてよいという証明だ。てっきり菊野の言っていたことは冗談だとばかり思っていたが、まさかこんな風に「御礼」が返ってくるとは思いもしなかった。
胸を張って前に立つ悠乃介と藤吾朗を押し退けると、そそと大店のお嬢様よろしく上品に店先に歩き出し、丁寧に膝を折った。鳳凰の織物が入った朱色の袖が綺麗に広がり、小首を傾げたお亮の京風の赤い簪が小さな涼しい音を立てた。もちろん、椿が描かれた鼈甲の櫛は、特別に毎日、頭を飾っている。
「これは五軒隣りの長野屋さんやありまへんか！　ようおこしやした。そういうことでしたら、奥でお話を伺いますさかい」
「お亮！」
悠乃介はあわてて飛び出し、お亮の肩をつかんだ。
「水戸藩とのつながりもできました。骨董屋として、新しい商売もできそうどす。なんぞ文句ありますやろか」
とり澄ましたお亮の返答に、悠乃介は一驚して目を見開いていたが、すぐにいつもの静かな笑みにかわった。
お亮の笑顔は、眩しいほどの陽の光に向かって咲く向日葵に負けないくらい、溌剌として晴れやかだった。まんまと藤吾朗を落とし穴にでもはめた気分である。
「さ、惣八、お茶をお出ししなさい。そこのお前」端で控えていた

手代に目をとめ、「はよう、お客さんに順番を待ってもらうように説明おし。お待たせしたらあきまへん」と指示した。
惣八も笑いをかみ殺して肩を震わせながら、言われたとおり奥へと入って行った。手代たちも、店先で騒ぐ客の順番を、確認し始める。
「さ、長野屋さん、こっちでございます」
呆れ果てて言葉を失っている藤吾朗に微笑みかけ、お亮は悠乃介を伴って奥へ長野屋を案内した。
初夏の真昼の日差しが、大倉屋の暖簾から忍び入っている。
これから忙しくなりそうやわ、と、お亮の心は湧き立っていた。

「闇夜の真昼」　――

了　――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5667f/

闇夜の真昼

2010年10月8日12時52分発行